

1998

大正十三年一月二十九日(第三種郵便物認可)  
昭和五年二月一日發行(每月一回一日發行)

永樂町人編輯



二月號

【號二十三第】

東京御來遊の際は  
御立寄り願ひます

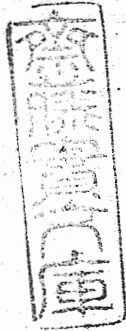
フランス  
西洋料理  
クワントン  
支那料理

# 泰明軒

東京芝區新櫻田町一七

日比谷公園に近く  
議院には殊に近し





節分行事

二月三日—午前十時より

福箱 大賣出し

一個…金五圓也

御福運當り御慰みとして縁起のよい純金製惠比須大黒様一對が右福箱中には入つて居られます。そのほか全部に錫合金製惠比須大黒様、福財布等入れて御座いますから賣切れとならぬうちお早く御求め願ひ上げます。

餘興

尙三階ホールに於きまして節分に因んだ面白い餘興を御覽に供します

京城 丁子屋

内地への御土産  
お手近の御贈答品  
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和高麗焼  
三和  
漢陽高麗編  
和焼  
製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

金剛煎餅  
金剛羹  
金剛饅頭  
金山

金剛山產松實花應菓

# 金剛飴

龜屋商店

京二城本町目

電話二七五  
本局四七五番

金剛柏子(松の實の蜜)

金剛おこし

金剛柏子菓(朝の鮮菓子)

金剛しるこ

誰でも直ぐ使へる

# 大谷和文タイプライター

が参りました

○和英 兩用    ○鞆 に入れて機行自由    ○字數二千四百外摺換自由

朝鮮中央總代理店

京城明治町一

櫻井秀專商店

電本園三〇〇二番

新各地種

仕立鄭寧

既製品も

いろいろとり

そろえ居候

京城府鐘路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

# 温泉 陽 温泉

---

## 汽 車 便

京城より僅に三時間  
一日數回汽車便あり  
直通列車もあり、こ  
れより至便至利なる  
温泉郷は他になし

## 宿 泊 料

御一泊朝夕和食附五  
五〇錢及び四・五〇  
錢の二種、數名御同  
宿の際は割引致しま  
す、茶代御無用の事

---

# 旅 館 神 井 館



謹 賀 新 年

咸北鏡城

直塚保三

平壤府

大橋恒藏

大邱日報社

河谷靜夫

位 各 者 讀

何かの御機會に  
銘酒「福迎」を  
きこし召され  
御批評賜はり候へば  
光榮これに過ぎず候



深き自信を以て  
新釀「リットル」を  
市に出しました  
大方博雅の御方々に  
これ亦御高批願上候

本町電車終點

電一本一四六一  
光話一四一五

難波酒造場



# 次 目 號 月 二

ルソー島に佇みて……	總督府學務局	高橋 濱吉氏(二)
野球往來……	殖産銀行	丸中 德三氏(三)
冬日追想……	總督府學務課	神尾 弼春氏(四)
旅人の話……	京城醫學專門	飯島 滋次郎氏(五)
年賀状……	東四軒町	蒲原 久四郎氏(六)
新聞の發行部……	京城日報社	笠神 志都延氏(七)
爐邊球談……	大阪毎日支局	高須 一雄氏(九)
その頃の柔道家と私……	朝鮮銀行	長谷 井市松氏(一一)
台灣雜感……	城大醫學部	今 村 豐氏(一二)
鷺の洲乾……	平壤商業會議所	松井 民治郎氏(一五)
放光寫經を拜觀して……	養正高普	磯部 百三氏(一六)
屠蘇機嫌……	西本願寺	清谷 惠眼氏(一七)
支那の趣味……	總督府文書課	津田 常男氏(一八)
金瓶梅の酒を判斷……	地質調査所	松田 新兵衛氏(一九)
辭書の迷子……	城大附屬病院	三木 清一氏(二〇)
エポの初期症狀……	城大法文書部	今井 眞太郎氏(二三)
慢性自惚くだし……	明治町小唄坂	天野 利武氏(二四)
獻酬廢止について……	京城日報社	岡村 介石氏(二五)
上 肉……	黃海道師範	鮫島 宗也氏(二六)
支那水仙……	城大豫科	佐々木 清之丞氏(二七)
金儲とローズニズム……	セル商會支店	名越 那珂次郎氏(二八)
巴里の畫室……	洋畫家	岩田 運三郎氏(二九)
贅六の辯……	倣新學校	山田 新一氏(三〇)
或る夜の歌……	南米倉町	濱口 良光氏(三一)
拳骨の遺り場……	三巴酒造合名	今 村 勲氏(三六)
或る死体の話……	李王職醫寮	浦田 多喜人氏(三七)
緊縮夜話……	總督府内務局	池部 義雄氏(三八)
品川雜記……	中央朝鮮協會	長 郷 衛二氏(四一)
萬年筆の思出……	京城婦人病院	中 島 司氏(四三)
或友(短歌)……	朝鮮鑛業會	工 藤 武城氏(四四)
内地見學餘談……	洋畫家	德野 眞士氏(四五)
寒天に立つ……	南米倉町	多田 毅三氏(四七)
夢で見る女……	京城日日新聞社	角田 不察氏(四八)
鳩(短歌)……	櫻井町	森 二 郎氏(四九)
私の渡鮮當時の思出……	京城女子技藝	德野 鶴子氏(五〇)
維摩去つて後觀鸞……	南大門小學校	井上 要二氏(五一)
近 詠(和歌)……	京城中學校	山本 吉久氏(五二)
やまと歌……	……	關本 幸太郎氏(五二)
高架索の囚人……	朝鮮史編修會	國風會京城支部(五三)
馬の智惠……	總督府農務課	瀨野 馬 鶴氏(五五)
歐米を旅して……	竹添町	吉田 雄次郎氏(五六)
父と子……	古市町	木塚 常三氏(五七)
獨語……	……	奧 永政輝氏(五九)
		永樂 町人(六一)

# ルーソー島に佇みて

高橋 濱 吉

(總督府學務局)

ジュネーヴ湖がローヌ河となつて流れ出づるあたり、河中にルーソー島と名くる静閑な一小島がある。ルーソー島とは言ふ迄もなく近世思想界の革命児ジャンジャック、ルーソーが沈思冥想に耽つた場所であり、今は彼が記念像の建つてゐる島である。

このあたり水は清く澄みわたり幾尋の底に遊ぶ魚さへも數へ得る北の方を望めばユラの秀嶺高く雲表に聳へ、西の方を見ればアルプスの靈峰は突兀萬仞紺碧の湖水に臨む。是等の山々は其の姿の氣高き神々しき、全く形容の言葉もあらばこそ。あたりの景色は美其のものであり、美の極致である誰か生を此の地にちくるもの、大自然のインスピレイションにより大詩人たり、大藝術家たり、大思想家たり得ざるものありや。

ジャンジャック、ルーソーは即ち此地に生れ、此の地に育つた。父はフランス人で時計の製造職工であつた。彼がまだ東西も辨へぬ頃母は世を去り、父は彼を捨て、何處にか姿をかくして終つたので、彼は全く家庭的には冷酷に育てられたのであつた。斯くて彼は叔父の手によつて育てられ、或は他人の家に寄食し、或は音楽師となりて放浪生活を営むなど、彼をして遂に『吾は何事も知らざるも、すべての事に感ず』と告白せしむる迄に、多情多感の性格の持主たら

しめた。一七六二年佛國に於て彼が公刊したる『民約論』及『エミール』の二書は、思想界に一大波亂を起し、迫害を受ける事はけしかりしかば故國に逃れたるも、身を置く處もなく再び祖國を去り英國に逃れ、轉々と放浪の旅を續くるの余儀なきに至つた。一七七八年淋しく旅の空、佛國のエルムンザイルで没した。

彼の思想は彼の生涯の縮圖である。如何なる事象も自然のままならば即ち善であるけれども、人為の加はる事によつて悪となる。彼が宗教論、道徳論、政治論、教育論は何れも其調を茲に置く。即ち彼は歴史の宗教は之を排除し、自然其のままの人類を以て最善とし、文明は罪惡をもたらすものとした。故に彼は自然的宗教を認め自然的状態の間に道徳的理想を發見し、人は生れながらにして自由であり、平等であるべきを主張した。

ルーソー去りて正に百五十年。此の永き年月の間に如何に社會思想に對し、このしひたげられたる彼の思想が影響を與へたであらうか。大哲學者カントすらルーソーの書を手に入る、や十年來一日も缺かさなかつた散歩をば別人の如く忘れて耽讀したと言はれてゐる。思想の力は恐るべきものである。彼は今尤も冷酷に遇せられた祖國に於て、而も彼が常に冥想に耽

【 二 】

りたりと唱へらるゝ島に於て、國人から、町人から慕はれ敬せらるゝの的となり、靜に過去をふりかへりつゝローヌの流れを眺めてゐるのである、彼の感慨や如何に。彼が思想はアルプスの連峰のそれ如く永久に聳へ、ジュネイヴ湖の其れの如く美しき姿をやどし、ローヌの流のその如く千代萬代迄もつきせし流れ行くであらう。

## ◆學校風聞記

漢 江 漁 郎

○三阪小學校の校長を、三好氏といふ。文字通りの早出晚退で、部下の教員は、『敵はんく』と悲鳴をあげてゐる。

○早い話が、朝ドンナに早く出勤しても、校長は、チャンと來てゐる。一体どの位早いのか、マルデ見當がつかぬ。

○ソコで、若い先生達、二三人申し合せ、午前五時を期し、『エヘッ、今日こそ校長に鼻を明かしてやらう』と、喜び勇んで出勤すると、校内は、シーンとしてゐると、『成功々々』と小踊りしながら、ヌツと教員室に這入ると、オーヤ……電氣がついて、その孤燈の下で、校長チャンと調べ物をしてゐる。一同棒を呑んで、『ウ、ウ、ウ』

○スルトそれを見やつた三好校長、ニヤ／＼しながら、『諸君、お早う。イヤ感心です。明日からどうぞコンナ風に、いつもお早く……』、一同またしても、『ウ、ウ、ウ』

への事に感ず」と告白せしむる  
國に於て、而も彼が常に冥想に耽  
ウ、ウ」

# 野球往來

## 丸中徳三

(殖産銀行)

北漢山人

### ◇禪堂風聞記

○米人で、醫師兼布教師をして  
ゐたハーンといふ人……大抵なお  
方は、ア、あれかと、御承知でせ  
う。

○そのハーン氏が、ひと頃妙心  
寺に行つて、座禪の稽古をしたこ  
とがある。

○導師は、後藤瑞巖師で、與へ  
られた公案は、『神は見ざる所な  
しといふ。然らば、その神の目は  
どんなものか。貴下はソレを見て  
來なさい。』

○ハーン氏いろ／＼技巧を凝ら  
して答解するが、いつも手を振つ  
て、『アー、いかん／＼』とハネ  
られる。

○残念で、こたえられぬ。遂に  
一杯喰はせてやれといふ氣になつ  
た。ソコで、我れ乍らうまく作り  
上げた答解を持つて、『ウフツ、  
坊主め、これなら參るぞ』と、イ  
ソ／＼と師の座室に行く。先づ喚  
鐘を、カーン／＼……。『這入れ  
ッ』、そこで、シテやつたりとハ  
ーン氏、ヌーツと這入ると、一聲  
大喝、『この馬鹿者め』……同時  
に、仁王の手のやうな如意が、ヒ  
ユーツと飛んで来て、ハーン氏の  
眞ッ甲を、カーン、『キヤツ』と  
いつて、飛び上り『ウーン』とい  
つて、尻餅をついた。

○それ切りハーン氏、禪堂をあ  
きらめた。

○『ハーンさん、どうしてヨシ  
ました』、悄然として答ふらく、  
『ワタシ、頭は一ツしか持ちませ  
んでな』

好きだと物笑ひになつてゐる方が  
ゐまいがベースボールへの強い愛  
着を感じることは當然だと思はれ  
ます。斷つて置きますが若人を統  
率して監督振り度いといふのでは  
ありませんよ。ユニホームを着て  
バットを振りまわし度いといふ大  
それた望のためでもありますよ  
唯だベースボール其他の競技の  
醸し出すあの空氣に一寸でも浸つ  
てゐれば結構なのです。

冬です、ベースボール以外餘  
技の無い私は楽しみませんね。快  
々として!!。

處が最近俳句の仲間入りをしま  
した。笑つちあ可ませんよ、お  
前がとね。銀行の神郷解悦兩先生  
——勿論俳名です。松本さん御承  
知の方でせう——發起に係る句會  
に出て有りつたけの感覺を絞り出  
してゐます。が根が全然素人の悲  
しさ棉入り位なら未だ我慢も出来  
ませうが、からつきし體を爲して  
ゐないのでから先輩同人に御迷  
惑至極でせう。餘技低脳者の悲哀  
をこゝでも暴露してゐます。

だが待つて下さい、餘技への無  
感覺者である私にも俳句だけは親  
しまれそうな氣持がします。

芭蕉、一茶も地下でナツブンが  
飛込んだものだど苦笑してゐませ  
う。笑はと笑へです(一、二六夜)

Aさんはこよなきよき大先輩で  
ありますと申しますと迷惑そうな  
顔をされるかも知りませんが。

そのAさんが陶然とされた時：  
……俺が何故スボウツを愛するかと  
言ふのかい、簡單だよ、それはね  
俺がスボウツを直接爲し得ないか  
ら……。

觀賞家の哲言でせう。

或る斯界の大選手の話……僕は  
ベースボールの選手ですから勿論  
自分の對手チームを研究する爲  
に他の試合を見ることはあります  
が關係の無い相手、關係の無い試  
合は見度くもありませんよと述懐  
したことがあります。

大乘と小乗の哲理、皮肉に面白  
いちありませんか。

それなら夫子自身の告白は？一  
寸困りますね。

毎年春から秋にかけて私の生活  
は本職の銀行への勤務と、その勤  
務の餘暇に青空を仰ぎ、土の香漂  
ぶグラウンドで若い選手諸君と餘  
技としての野球に没頭することな  
のです。

餘技らしい餘技の一つも持合は  
せの無い私、近頃流行の麻雀に  
は勿論近寄れない、將棋、碁、其  
他何一つとして取柄の無い即ち餘  
技への白痴ではないかとさへ自分  
自身で考え込む私——に下手の横

# 冬日追想

## 神尾 弑 春

(總督府學務局)

【四】

にしみて感じられるのであつた。妹は襖は張り替へさせてゐた、これに何を畫かうかといふ。

私は似顔のある本は何もかも繰つて見た、そしてとうとう羽左の助六にきめた、芝居を見たことのない妹に揚卷姿をくどくどと説明する通ぶつた態度は自分ながらおかしかつた。案外な出来榮で妹は喜んでゐる。私付嬉しくて、どうとう贊を書いた——當時半井桃水

新作の歌澤助六の文句を惡筆でのたくらせたのであつた。丹青の苦心を惡筆で破られても妹は喜んでゐたのもうれしかつた。唯芝居好きの裏の老婆さんに助六がわからなかつたのはほんとに寂しかつた

馬關に近く、かみがた風のその地方では江戸歌舞伎の面白さは共鳴され様もなかつたのだ。さりとて此の好き話相手に助六の説明をするのは幻滅を更に更に増すばかりだもの。

◇ にび色の雲とぢこむる冬の日には暮るるを待ちて早く寝ねけり

板持の向つ裾野に陽は降りつ湯本の峽も雪解けぬらし

日本海を渡る雪風のうすら寒い、田舎の生活では暮れるのを待ち兼ねて戸を閉ぢ、夕飯を乏しい光の下で食べるや否や寝るのであつた

——若くて、都會生活譚美者であつたその頃のデイレットタントに何で堪え得たらう。

然し春は終に來た、まなかいに緩いスロープをもつて横はつてゐる板持の洪積層の野面にけさんさんとして陽が降りそそぐ。その裾野の果ては湯本温泉だ。手拭かたに雪解けのわかるみ路を歩いて田舎じみた外湯に行くのもその頃唯一の樂みであつた。

マンドリイ又かきならしなど妹は家守りのむと舟路におもふ

オーゾアの襟を立てたが寒い、毛布をかぶつたが身ぶるいは止まぬ、舟底に打ちふしてはかない郷愁に心をやるのであつた。遙に兄の爲めに來て呉れた妹は寒い暗い北國日和の、日本海岸の家に留守居をして呉れて居るのだ。こんな日は

雨戸を立てねばならないので晝でも暗くて繪もかけまいし、所在なさに我流のマンドリイでも鳴らしてゐるのだらうが、裏の老婆さんは來てやつて呉れるかしら。

ふと覺めて振りかへれば、雨乞山はやはり笑つてゐる。遠ざかつて見れば猶さら頂あたりの和やかさが懐まれる。乏しい冬の夕日を浴びて圓い芝山はほほえんでゐるのだ。

荒くれ男のいさかひの中に身を投げ出して、背水の陣を布く覺悟はして來たものの、身ぶるいは油谷灣を渡る夕風の一しほ寒い爲のみでもなさう。私は食ほる様に

雨乞山の頂に見入るのみであつた

◇ 新しき障子ととの(助六の似顔ゑがかせながめくらしつ

助六の繪に贊すとて江戸唄の文字ざれかきぬ窓の障子に

油谷の海を渡つての遠征も效がないわけでもなかつた、しかし緊張が取れて見れば尙さら寂しさが身

にしみて感じられるのであつた。妹は襖は張り替へさせてゐた、これに何を畫かうかといふ。

私は似顔のある本は何もかも繰つて見た、そしてとうとう羽左の助六にきめた、芝居を見たことのない妹に揚卷姿をくどくどと説明する通ぶつた態度は自分ながらおかしかつた。案外な出来榮で妹は喜んでゐる。私付嬉しくて、どうとう贊を書いた——當時半井桃水

新作の歌澤助六の文句を惡筆でのたくらせたのであつた。丹青の苦心を惡筆で破られても妹は喜んでゐたのもうれしかつた。唯芝居好きの裏の老婆さんに助六がわからなかつたのはほんとに寂しかつた

馬關に近く、かみがた風のその地方では江戸歌舞伎の面白さは共鳴され様もなかつたのだ。さりとて此の好き話相手に助六の説明をするのは幻滅を更に更に増すばかりだもの。

◇ にび色の雲とぢこむる冬の日には暮るるを待ちて早く寝ねけり

板持の向つ裾野に陽は降りつ湯本の峽も雪解けぬらし

油谷の海の渡りを寒み雨乞山頂

きに照る陽をなつかしむ

雨乞山峰のささけら陽は降れど

谷の瑞雪消えも得やらす。

雨乞山の懐しさは十年もたつた今日になつても忘れられぬ、向津具の半島に抱かれて靜かにたたえて

ゐる油谷灣のほとり、我が雨乞山はそそり立つて居るのであつた。

白山火山系の餘脈を引いて火山性を帯びた山は秀でて居る中にも和やかな曲線を持つて居た——頂近く圓い豊満な姿をしてゐた芝山は

多が來て芝が枯れると殊に旅人の心を引くのであつた。

私は人丸峠に立つてゐた、對岸の向津具半島の端に起つて、暮から持ち越して來てゐた漁夫の網代

争を調停すべく、三ヶ日をすますと直ぐ發つて來た私は、油谷灣をよこぎる渡船を舟待ちせうと峠の人丸祠の前に立つたのであつた。

出雲石見の宿り宿りに旅愁を歌つた歌聖も、長門路の海岸を歩き疲れてやはりここで、靜かな、暖か

そらな油谷灣の景色に見入つたことであつたであらう。そして振りかへつて、そそり立つ岩石の頂近くむくむくと圓み持つた芝山が冬の陽を浴びて笑ひかけてゐるのを見て慰められたのではなかつたらうか。

◇ 新しき年來といふに防人は綱代

さばくとうみ渡るなり

新しき年來といふに防人は綱代

さばくとうみ渡るなり

新しき年來といふに防人は綱代

さばくとうみ渡るなり

# 旅人の話

うな氣がしました。私の宿つた家は勿論朝鮮の宿屋でした。入口の壁に壁紙を貼つて



新しき年來といふに防人は網代さばくとうみ渡るなり

油谷の海を渡つての翌日、いわけでもなかつた、しかし緊張が取れて見れば尙さら寂しさが身

舎じみた外湯に行くのもその頃唯一の楽しみであつた。

# 旅人の話

## 飯島滋次郎

(京城 醫 専)

南鮮を旅行した人がある時こんな話をした。

その邑内は日が暮れると油は尊いので、早くから寝てしまうのでその静さはまるで泥深い海の底のやうでした。月のある晩はそれでも邑内の狭い——と云つても白い砂ばかりでそれに何人が培つたとも知れない非が植多であるのでしたが——その川に掛けた石橋を鳥の羽根を一本さした市女笠を被つた男が非や牛の臍物を繩にからげて提げて行くと、あとから風水先生みたいな老人が通る。木靴を鳴しながら子供達が走つて行くのでした。しかしこんな子供達はオコウイワ口(そら猫が来た)と親から囁かされるので日が暮れたら寝てしまふので子供の泣聲も聞えず叫聲と云つたら犬の遠吠えぐらいでした。

隣つてゐるのでした。こんな光景はモダンと云ふ名の下に含まれてゐるふんわりした感觸を通じてきた私にはまるであの御伽噺の不思議國のアリスみたいでした。

酒幕の裏は竹の疎林なつてゐるのですが、その中で石の上に安座をかいて、空を眺めてゐる老人がゐたり、馬尾の冠を被つて竹を破つてゐる男を見たり、それに遠くで長々と鶏が鳴いたりして歴史をあとすざりして神代を一瞥したやうな感じがしました。

### ◆醫界風聞記

北漢山人

○池田病院長の自用車は、鮮銀前で、電車と衝突し、車體はベチヤンコとなつてしまひ、先生も車夫も、シタ、カ傷を負ひました。

○しかし、池田先生は、深く電車を徳とし、殊に運轉手は、一度自邸へ招じ、大に表彰したいといつてゐる。

の一步手前で、素早く電車を止めたのは、運轉手の機轉——拙者にとつては、救ひの神。これがどうしてお禮をいはずに居られやう。で、拙者傷のいたむたび、難有うくと、實は運轉手君に、頭を下げとるんぢや。ドツぢや。拙者のいふことが、間違つとるかナ」

○友人目をボシヨク、「な、な——るほど、それが池田式か。フライン、ドコまでも一洗あるのう」

貧しい邑内ですから橋の袂に酒幕が一軒あるぎりでした。雪濃湯とか骨董飯とかきまつたものしかないのですが、その家の亭主は客が肉をくれと云ふと半月形の朝鮮抱丁をふるつて茹でた肉を無造作に切つては客になげてやると客は泥が着いても氣にも留めず生蠔をつけてむさぼり食ふのはうらやましいくらいでした。店頭に赤い肉がぶらさがつて、すくくと響いたポプラの梢に三日月が斜になつて、地面には黙々として大地とビツタリ合つて生活してゐる人々が

また、どういふ理論かな。アンタのいことふは、拙者トント判らぬが、『判らぬとは、アンタのいふことが、拙者トんと腑に落ちぬそもく拙者は、普通ならアノ時電車に轢き殺されてしまふ筈ぢや死なないのが寧ろ奇跡。つまり死

社長 高橋章之助  
朝教育新聞  
發行所 京城仁寺洞 一三六其社

# 年 賀 狀

蒲原久四郎

(東 四 軒 町)

【六】

て其儘投函する風もあるが、小生は一々先方より賀狀拜受の旨をも自書する習にして居るので手数は厭はぬが投函が自然遅れになつて済まぬ氣がした。

一、於是結論として到達した事は年賀狀は普通の方法によりはかきに謹賀新年と住所氏名とを印刷して、前年の例を參照して、凡そ先方から来るものを見込んで、前以て發送して置く事である。

一、賀狀の書き方も色々ある様であるが、くどく書いて、受ける人をして嫌氣を起さしめるのも如何はしく思はれる。謹賀新年位が一番無難であろう(一月五日誌す)

はいけない」とあつて早速賀狀の追加をやり初めた。

一、勿論印刷物を用意して居る譯で無い上に年賀の客を引受けながら、片手に賀狀を書く事故一通りの事では無い。

一、又來る又書くといふ風に、中々容易の事で無かつた。

一、世の中には先方から來た賀狀に對し、一月一日の日附ある印刷物に、先方の宛名丈けを書い

一、年賀狀廢止には不賛成である一年に一回知人に對して消息を通ずるといふ意味も含まれて、年賀狀は必要である。

一、併し乍ら、度を超へて餘りに多く出すのは、費用もかゝり、手數もかゝり、郵便局に迷惑をかける。

一、ソレで今年は、親族親友及特に世話になつた人を選び、葉書二百枚を限りて、特別取扱にして差出す事にした。

一、印刷をやめて全部自書した爲めに、特別取扱の最終日たる二十九日迄に合はなかつたもの三十一日中に投函した。

一、可笑しな話ではあるが、元日に差出すと先方から來たものを見てから出した様に思はれはせぬかと、下らぬ心配もあるが、年内に出して置けば其心遣ひもいらぬ譯。

一、昔は三十一日のスタンプがあれば笑はれたものであるが、今は事實二十日から二十九日迄に差出し、東京からの年賀狀が一月一日配達されるといふ現状であるから、三十一日のスタンプがあつても可笑しく思ふものも無くなつて來た次第。

一、斯くして三十一日迄かゝつて二百枚の賀狀を出して安神して居つた、が偕て元日に配達を受けて見れば、『仕舞つた』と言はせるものが多數である。』之

## ◆ 双方閉口記

漢 江 漁 郎

○總督秘書官の近藤氏は、以前成南の警察部長をしてゐたことがある。

○當時、氏の部下の或る署長で迎も甚の好きな先生がゐた。

○普通の好きななら、何も文句はないが、この先生は、三日にあけず、任地をハツして、こそく元山に碁を打ちに行く。行つたら、なか／＼戻つて來ぬ。

○『××君、君ア少し碁を控えろとい、ハナー』、温厚な近藤氏も流石にさういはずに居られなかつた。スルト相手は、『ハツ、ハツ、自分でも、聊か恥ぢてゐます。もう斷然、アレは廢業いたします。天地神明に誓ひまして』  
○それから二三日後、近藤氏が

官用で、元山へ出張しやうとする時、列車中で、ハタとこの署長に遇つた。近藤氏は、心中で、ハハア、まだやつてるナとは思つたが顔を合せると、先方定めて面目を失うだらうと、ワザと見て見ぬ振一心に新聞を讀む振をする。相手の署長も、ハツとしたが、今更らどうも斯うもならぬ。窮餘の一策頭から毛布をスツポリ。『ゲー、ゲー、ゲー』  
○さて……双方腹の中で『神様よ、この旅を安泰ならしめ給へ。一寸驚きました』

旗幟幕

龜屋旗店

京城黄金町五丁目  
電話本一五八五番

新聞の發行部數

へば甲は八乙が一〇なのである。  
甲新聞社の發送所から新聞紙が十萬枚にしかこ厚三日とする。

二百枚の賀状を出して安んじて居つた、が偕て元日に配達を受けて見れば、『仕舞つた』と言はせるものが多数である。』之

す。もう断然、アレは醜業いたします。天地神明に誓ひまして』  
○それから二三日後、近藤氏が

京城黄金町五丁目  
電話本一五八五番

# 新聞の発行部数

## 笠神志都延

(京城日報社)

素人の圖々しきほど濟度すべからざるはない。就中新聞の素人が新聞知識につき執拗なるほど手が付けられぬはない。たとへばである。しかしながら何とかくのごとき『たとへば』の多きことよ。それは新聞の発行部数の質問である新聞の発行部数など分るものではない。分つてはならぬものなのである。

ソコでわれ／＼がそいふ素人の質問に對して、それは分らんと答へると彼は知らぬはずはあるまいといふのだ。分つてはならぬもののだと重ねて答へると今度はその秘密にせんでもよからうと押して来る。しつこいにも何んにもお話にならない。仕方がないからわれ／＼はそれは君の想像する通り、また君の推算する通りなのだと答へてどうやらその場の會話を打ち切ることにして居る。われわれに取りて新聞の発行部数は實は知らないのではない、といつて秘密にするのでもない。全く分らんのである。

分らんといふのは——われ／＼が現に知つて居るところの部数を裸のまま質問者の前に告白したとする。そのときその部数の告白が當然持たねばならぬところの意味は、その通り質問者に受け取られはしないのである。発行部数が十萬ですとわれ／＼が答へたとして質問者はハアそうですかといふた

切り引き下つてしまふに相違ないのだが、われ／＼としては発行部数十萬といふたときにはそれに附着する意味はかす／＼あるのだ。しかし質問者はこの點甚だ無頓着でいきなり十萬といふだけを丸呑みにしてしまふのである。何ぞはからんこの発行部数十萬といふことには種々雑多の意味が附着して居る。それが分らぬとメツタにかすは明かされない。

ここに甲新聞がある、また乙新聞がある、どちらも発行部数が十萬だとする。新聞に素人なるは、さては兩社は勢力伯仲ですネと早呑込をする。早呑込をされるがいやさにわれ／＼は分らんと答へるのである。なるほど兩社の発行部数がどちらも十萬あり勢力が伯仲する場合もあらうけれども、事實はそりでない場合もあり得るのである。

甲新聞は十萬の新聞を印刷する乙新聞も同様である。そこでこれを発行部数と稱するとする。左様に稱してもよいのである。しかし甲新聞は十萬の新聞を印刷して十萬を配布する間に、十萬を印刷はしたが、その内二萬ばかりは發送所の壁際に積み置き、あとで層屋に賣り拂つたりしまいものではない。そうすると乙新聞の十萬は本當の十萬であるが甲新聞の十萬は二萬ばかり掛値をした十萬にしかならない。勢力といふ上からい

へば甲は八乙が一〇なのである。甲新聞社の發送所から新聞紙が十萬枚たしかに毎日出たとする。けれども月末に行つて集金して見ると八萬枚分しか集まらなるとする。その間に乙新聞は十萬枚をたしかに賣つてたしかに十萬枚分の集金が終つたとしたらどうなる。

讀者に配つた分量はどちらも十萬枚だから勢力伯仲と一應いへるけれども、甲新聞は買はれない新聞賣れない新聞を無理に賣つて居たこととなり乙新聞は賣れる新聞を賣つて、賣つただけの代金を易々と取り立てて居たのである。すなはち乙新聞は甲新聞と同じ程度の賣上げ状態でがまんするならば十萬枚ぐらゐまでは発行部数を増してもよいわけになる。いけば甲新聞は十萬を境にどちらかといへば減る傾向を有し乙新聞はどちらかといへば増す傾向に於てあるのである。そこで甲新聞へは悪い係數を掛け合せ乙新聞へは善き係數を掛け合せるとすると甲新聞が八萬である間に乙新聞は十二萬となりまさに五割の相違である。同じく発行部数は十萬なりといつても實にこれだけちがふ。ウツカリしたことはないのではないのである。分らんと答へるにしくはないのであるいはんや如上述べたことさへもハツキリ分るものではなきに於てをや。甲新聞が悪玉で乙新聞が善玉だとチャンときまつたのがありやうはないのだ。

そ一つ新聞の勢力といふことを考へて見なければならぬ。勢力といつていろ／＼定義付け得るが、今は單に新聞の勢力とはその新聞の宣傳力といふことに限局して置く。さて甲地方は新聞の購讀に非常に個人の選擇力が多く入り込む



とする、乙地方ではそれほどではないとする。甲地方では夕刊賣りが發達し、勤め歸りの俸給生活者などが電車の中でこれを読み捨てにする、家では別に細君が別の新聞を読んで居る。隱居は隱居、子供は子供でこれがまたそれ／＼好む新聞を読む。この状態に於ては同じ十萬の發行部數でも大した宣傳力とはならない。しかしながら乙の地方に於けるがごとく、早起の書生が郵便受から出して來ながら讀んだ新聞を登校まぎわの子供

が讀み、次いで主人が朝の茶と共に讀み、主人を送り出して置いて細君が讀み、隱居の室に廻して置いて最後に午後八時以後の女中が讀むといったやうな状態に於ては同じ一枚の新聞でも宣傳力の測定につき同日に論ずべきではない。甲地方の甲新聞と乙地方の乙新聞とでは發行部數は同じく十萬でもその効果は六倍くらゐちがふ。すなはち乙新聞の經營者が發行部數は實は十萬なるに拘はらず六十萬と號しても決してウソにはならな

いのである。いな宣傳力の測定に關するくさ／＼の説明をすれば十萬と答ふところをこの説明を省かんと欲せば六十萬と號して決して差支ないことになるのである。新聞發行部數の十萬が六十萬まで増加した。この調子で話し込んでならもう少し増加させ得るかも知れぬが、今度はこれ位にして置かす。本文の讀者にして新聞の素人たるを笑はれたくなくば一切發行部數の質問はなさざること、ただ單純な目分量にて満足すること。

◆江湖風聞記

北 漢 山 人

○城大の内藤吉之助教授は、南山町のさる別荘に、たつた一人で住んでゐる。

○尤も、教授は、マダ獨身だ。『君、膝ツ小僧を抱いて寝るのはこれで、ぞん外あつたかいぞ』

○教授の愛するのは、一にも酒二にも酒。だから机の上を見るとウイスキーあり。ブランドーあり一升徳利も、ソコで、ニヤ／＼してゐる。

○教授は、晝は大抵寝てゐます日がトツブリと暮れると、ムク／＼と起き上ります。そして懸命に、書見をやり出します。やがて鶏が鳴かりが、雀が構らうが、『ワシヤとお構ひ無之候』

○専門は、法制史だが、ヒョウンなことから歌謡の研究を思ひ立ち時々妓生を招んで、『君一つこれを唄つてくれ。次ぎは、これをたのむ』、チャンと膝を正して、正面を切つて、緊張して聴かれる

には、流石の妓生も住生。『先生！テレ臭いのネ』、『お察し申します。だが拙者とても、なか／＼テレ臭うござる』

○朝鮮の法曹界で、俳道の名家といふと、京城に根本判事、平壤に荒巻判事、そして大邱に、村田判事、これを稱して三絶といつてゐます。

○ところが、昨多の人事異動で

人 蔘 劑 だけ  
一も二もなく

總 督 府

專 賣 局

精製の蔘精  
に 限 り ます

發 賣 元

貴 生 堂 藥 品 店

京 城 本 町 二 丁 目  
電 本 一 三 八 番  
振 替 七 六 一 番

荒巻氏も、村田氏も、共に京城に榮轉することになつた。

○若葉會(京城法曹會)連中喜ぶまいものか、一同狂喜して、『どうぢや、これに因んで本會を三絶會と改稱しやうぢやないか』『ウン、よからう。……だが待てよ。我々の存在は、マルデ型なしだ』、『ハ、いかに、さア困つた。我々もこれで、なか／＼の大家ぢやからノウ』

盧 邊 求 炭

がつたかれは、右手を大きくクワイ  
ソドアツプさせるなり窓ガラス目



たのむ、チャンと膝を正して、正面を切つて、緊張して聴かれる

めます。

ところが、昨多の人事異動で

つた。我々もこれで、なかくの大家ぢやからノウ

# 爐邊球談

## 高須一雄

(大阪毎日支局)

### ブレーキと プーレキ

ウォルター、ジョンソン、この名は米國では勿論のことわが國でも野球愛好家には既に十數年前からお馴染になりすぎてゐる位によく知られてゐる名である。

ウォルター、ジョンソンとはその誰であらう。

米國球界が産出した三大投手の一人として球史に深くその盛名を印刻した人である。三大投手と云ふのは、かの有名なるマグロー氏の監督するニューヨーク、ジャイアンツに所屬してゐた故マシューソン投手と、一九二七年セントルイス、カーヂナルスが、世界選手権爭奪戦に優勝したとき、老ひたる花形役者としてセントルイス市民から絶大の歡迎を受けたアレキサンダー投手と、そうしてかれジョンソンの三人である。

ジョンソンはアメリカン、リーグのワシントン、セネターズと云ふチームに籍を置いて活躍することと實に廿數年の永い生活で現在は最早第一線から退いてゐるが、かれの健投によつて一九二五年初めてワシントンにワールド、チャンピオンシップを齎らして首都の一夜を狂踏亂舞の巻と化さしめた勇者である。その當時の喜悅を忘れ得ぬ首都の市民はかれの引退を惜も慈父を失つた様に感じ再びかれ

をして投手板に立たしめやうとする熱望と、チームの長老グリフイ

ス氏の熱望を拒否し難く、かれは一昨年から再び思ひ出多いセネターズのユニホームを身につけて投手板にこそ立たないが一軍の監督として采配を振るつてゐるのである。かれが現役として花やかな投手生活を送つてゐる頃の偉大なる技術は數十萬のファンを熱狂せしめ球界のアイドルとして崇拜畏敬されてゐたのみならず一個の社會人としてはその崇高なる人格に對して世人は多大の尊敬を惜しまなかつたのである。

會てかれは若かりし當時を追憶し『犬にも全盛時代はある』と云つてゐるが、かれが全盛時代のある一日、知人と二人で料理店で食事してゐたとき、隣席の一人の若者が突然

『ジョンソンさん、あなたのブレーキ(曲球のこと)は打者にとつては非常な脅威となつてゐますが、どうしたらあんなに大きく球が曲るんでせうか』

と質問をはじめた。當時はスパイの如きものを使つて敵方の内密を探査することが流行してゐたのでジョンソンも警戒はしてゐたにちがいない。この質問を皮切りにいろいろとうるさく聞く若者の云ふことを黙々として聞き流してゐたが、卓上にあつたコップを手を持つて靜かに立ちあ

がつたかれは、右手を大きくワインドアップさせるなり窓ガラス目掛けて力一杯コップを投げたからたまらない、コップも窓ガラスも激しい音と共に破れてしまつた。

この意外なる出來事に呆然としてゐる若者を冷やかに眺め、破られた窓を指さしながらジョンソンは破顔一笑

『私のブレーキと云ふのはあゝして出すんですよ』

と云つて食事をつゞけた。大投手であるかれの一面にはこうしたウイットも周到さも持つてゐたのである。

### ラタタツタ

#### の悲哀

出來事はだいぶん古い過去のものと……。

ラタタツタ、ラタタツタ、ラタタツタ……とスタンドを埋めつくれたポスト側の觀衆は馬鹿騷子の調子面白く聲を張上げて囃し立てはじめた。その聲に合せて拍手子をとるものスタンドの板を靴音高く踏み鳴らすものなど、その音響は一つのリズムとなつて騒擾のうちに音楽的にしかも潮の寄するが如く場内を壓してしまつた。そうしてラタタツタの音響はいつやむともわからない。

二對一の接戦で敗けてゐるポストン側九回目最後の攻撃中の情景である。相手は常勝を誇つてゐたクリブランド、チームである。常勝軍に對してポストン側の肉薄はファンを熱狂せしめてしまつたところで今まで如何なる彌次が飛ばぶが如何に觀衆が喚き立てようが、そんなことにはびくともせず死灰の如き冷靜さを保つて投球を續けてゐた投手の顔色は俄かに色

を喪ひ、顔面筋肉はビク／＼と震  
舞しはじめ、悠然たる投球態度は  
一變して焦燥氣分に惱まされ、何  
物かに襲かれてゐるやうな風に見  
えた。

こうなつてはもう投げられるも  
のではない、投球は亂れ勝となり  
球にはスピードさえ失つてしまつ  
た。ここぞと打者が一打した球は  
中堅左翼間に美事なる安打となつ  
て飛んで行く。二三壘にあつた走  
者は本壘に入つて勝負は逆轉した  
敗れたと思はれたボストンは勝利  
を占めたのである。熱狂し切つた  
観衆は一層喚き立てた。そうして  
ラタタッタ……の囃子は音樂的の  
調子を失はずに續けられてゐた。  
が場内から脱衣場への歩道を誰よ  
りも最も悲しそうにスゴ／＼と引  
き上げてゆく投手の姿は英雄の末  
路を想はせるものがあつた。破竹  
の勢で連戦連勝を誇つてゐたクリ  
ーブランドチームがボストン、レ  
ッドソックスに敗れた時である  
この日クリーブランドの投手を  
務めたのはコベレスキーと云ふ投  
手で、當時かれはアメリカン、リ  
ーグ投手中最も優秀なる技術を持  
つてゐた投手である。

かれの向ふところ敵なく、かれ  
のゆくところ敗北はなく、クリー  
ブランドのコベレスキーか、コベ  
レスキーのクリーブランドかとも  
で言はれるほど球界の人氣を一身  
に集めてゐたのである。

かれはクリーブランドチームに  
加入して大リーグの選手生活を初  
める以前、若き頃は中西部R町と  
云ふ炭坑のある小都會に住んで炭  
坑で働らく傍らその町のチームに  
加はつて投手を務めてゐたのであ  
る。田舎投手として荒削の技術では  
あつたが將來大リーグ選手生活を

するだけの天才的本能は持つてあ  
たのであらう。かれの投球振り  
小都會のファンを熱狂せしめ誰し  
もかれの名を謳歌せぬものはなかつた。またかれが炭坑に務めてゐたことから非常に大いなる後援を得てゐた事はかれにとつて何物よりも幸運であつた。その大いなる後援の中にもかれが試合に際してもそれ以外の場合でも最も力強いものとしてゐたのは戀人として熱愛する坑夫長の娘であつた。將來樂しがるべき家庭生活を夢想しつゝかれは汝々として働らき、凱旋將軍の如き氣持で投手板に立つてゐたのであつた。

けれどもかれの期待した結婚は許されず、あまつさえ炭坑からは追放されねばならぬ羽目となつた思はぬ不幸に見舞はれてはじめて知る人生の悲哀を味はつたかれは苦しみ抜いた。けれどもかれは救けるべき道は何等見出し得なかつた。そうして失職の苦痛と失戀の痛手を背負つたかれは思ひ出多い町と熱愛する愛人に永久の別れをせねばならぬ日が來た。それは町の祭りで月明の夜であつた。

炭坑の彼方からは聞き馴染んだ馬鹿囃子のラタタッタの面白い樂の音が賑やかしい男女のはしやく聲に交つて聞えてゐた。

けれどもそれはかえつてかれの心に悲痛な哀愁をうつたえるものとなつて心をかき亂した。そうしてラタタッタの囃子は忘れられぬ悲しい思出となつてしまつたのである。

その後數年のかれは努力によつてかの時以來志した大選手生活に入る事が出來たのみならず、さく／＼たる名聲を得てゐたのである。

そうしたかれが觀衆の口から出るラタタッタの調子に忘れ得ぬ悲哀を呼び起され心は再びかき亂され投球意の如くならずさしも常勝を誇つてゐたクリーブランド、チームを敗北の彼方へ導いてしまつた。

ラタタッタの聲はまだ續けられてゐた。これも當時流行したスパイの誘導した仕業であつたのである。

◆讀んだもの

北 漢 山 人

○不二興業會社が、朝鮮開拓の最尖端に立ち、過去二十年を通じて、如何に大きい干拓事業を成したか、産米増殖に直接貢献したか内鮮移民を安處したかといふことは、略々世人の知るところであるが。

○同社は、一つの紀念として、今回『農事及土地改良事業成績』と稱する二小冊子を發行し、これを各方面に寄贈した。

○筆を藤本合名時代より起し、如何にも簡潔に、如何にも手順よく、一目瞭然と各般の業績を記してある。殊に挿入した寫眞版が、記述と相待つて、大に讀者の胸をうつ。

○先驅者の苦心は、到底筆紙の盡し能はぬところであらう。今にして往時を回想する、萬感油然たるものがあらう。我等も、亦讀み來つて、多大の感慨を禁じ能はぬのである。

級位に幅を利かしたものである。従て當寺の且且と云つたが、

# その頃の柔道家と私

長谷井市松

(朝 鮮 銀 行)

加はつて投手を務めてゐたのであ  
る。田舎投手として荒削の技術では  
あつたが將來大リーグ選手生活を  
入ることが出来たのみならずさ  
くくたる名聲を得てゐたのであ  
る。

來つて、多大の感懐を禁じ能はぬ  
のである。

私が始めて講道館に入門したのは、  
明治三十三年の夏であつた。  
當時同館の幹事は富田五段がやつ  
て居つた。私は數名の青年と一所  
に、ソコで備へ付けの名簿に住所  
氏名を録して、血判をしたものだ  
これで完全に堂々たる天下の講道  
館に籍を置くことになつたのであ  
る。少年時代の私にとつて、ソレ  
は尤嬉しいもの、一つであつた様  
に今でも記憶して居る。その頃の  
私達の師範格は横山、永岡兩七段  
と、それから磯貝、山下、内田な  
どの六段の方々であつた。少し下  
つた所で足立三段、居相三段、大  
角三段、鹽谷二段、野口二段と云  
つた様な連中であつた。

また市内電車と云ふやうな、文明  
な利器はなかつた時代なので、私  
はいつも稽古着を引擔いで、意氣  
揚々と大道を闊歩して、毎日小石  
川の下富阪迄一里半の道程を歩い  
たものである。途中咽喉が乾くこ  
とがあつても、決して柔道家は水  
や氷を飲んではならぬと云ふやう  
な考で、汗を拭き、闊歩したも  
のである。

當時は稽古の始まる前など、よ  
く横山氏は私達のために柔道の心  
得、眞髓と云つたやうなことを話  
してくれた。就中氏自身の病弱で  
あつた坐立ちから、柔道は業であ  
つて決して力でない、敵の力を利  
用する所に柔道の妙縮は存するな  
ど、能く語り聞かされたもので  
あつた。けれども斯く語る當年の  
横山氏は身長五尺六寸、相撲にし  
ても引けはとらぬ程の巨漢であつ  
た爲に、私達は直にソノ言葉の全  
部を、無條件で受入れることは勿  
論出来なかつたものである。

私は日々<sup>の</sup>練習による柔道の進  
歩と、未來の空想とを夢み乍ら、  
赤阪の氷川から紀の國坂へ出て、  
網尾井町から十手三番町のお濠端  
を通つて行つた。私は途々他日自  
分が幾分の成功<sup>を</sup>をでもかも得る  
ことがあつたならば、斯うした現  
在の行動の、誠に愉快な思ひ出に  
なるであらうとも考へたものであ  
る。然るに十年、二十年、月日は  
徒に巡つて、私は依然たる舊吳下  
の阿蒙たる域を、一步も踏み出し  
得ないことに想到して、中心限り  
なき愧耻の情を禁じ得ないものが  
ある。

私はソノ頃赤阪の氷川町に住つ  
て居た。暑中稽古の始まるのは、  
暑い盛りの午後の二時頃からであ  
つた。當時は今と違つて東京にも

あの頃は遠大の希望<sup>を</sup>懐きしが  
ちつとも物にならざりしかや  
後年私は平凡人の歌として、斯の  
やうな一首を綴り合せて居る。  
今も尙私の脳底深く印して居る。  
話がツイ横道に這入つたが、私は  
其年の夏稽古の終了と共に、皆勤  
證を賦與され幸運にも乙組に進級  
することを得たのである。其頃の  
乙組と云ふものは丁度當今の初段

級位に幅利かしたものである。  
従て當時の甲組と云つたら隆々た  
る名聲を博して居たものであつた  
其夏の稽古中での面白かつたこ  
とは、先年物故した白玉親方、當  
時新十兩の玉椿と、浦港の兩君が  
他流仕合兼研學に來たことであつ  
た。この港浦もイ、相撲であつた  
が、どうした譯か十兩で廢業して  
しまつたやうである。當時玉椿と  
仕合つたのが鹽谷二段(此人は横  
捨身の名人であつた)と山崎四段  
(此人は腰車の名人であつた)の  
二人であつたが、玉椿君全然問題  
にならず、ころ／＼にやられるの  
で、港浦など見物し乍ら手を拍い  
て笑つたものだ。けれども玉椿君  
一生懸命しがみついて、投げられ  
ても稽古着に取りついて、しまい  
には殺して下さいなど、ダダを捏  
ねたこと程左様に彼は負けず魂で  
年天下の名力士と歌はれ、關脇の  
榮冠を戴くに至つた裏面に、斯う  
した苦心慘愴の研究があつたこと  
を決して見逃してはならないと私  
は思ふ。

當時私の學校では丁度一級上に  
前田榮世君(三段)が居り、松代  
林太郎君(二段)が居た。前田君  
は當時講道館中の青年闘士で錚々  
の聞へがあつた。君の得意は實に  
見事なる釣込腰であつた。彼は又  
堂々たる體軀と溫雅な風貌との持  
主で、後年講道館柔道の基礎を築  
くべきものと目されて居た。松代  
君は出足拂の名人と云はれた人で  
常に黙々として指導の任に當つて  
居た。私のチーム、クラスには山  
田敏行(當時甲組、今は四段)齋  
藤一郎、天谷八郎、田邊八右衛門  
などの連中が居り、一級下に佐竹  
三段が居た。君は幼年組から進ん



だ人で、別に取立て、名手ではなかつたけれど、快調な豪放な男で仲間から愛好されて居た。で其頃の紅白勝負の大將組が前田君と美術學校の轟三段などで、幾分後れて伊藤徳五郎君などであつた。伊藤君は大外刈を得意として居た。此頃はまだ黒帯の寥々たる時代で甲組が一番幅を利して居た。『ラレは講道館の甲組だぞ』と云へば大抵のものは震へ上つたものだ。ソレ程又通中は亂暴でもあつた。ソノ頃一高の杉村陽太郎君なども甲組の一人で、彼は巻込を得意として居たやうに覺えて居る。前にも一寸書いたが其頃美術學校に轟祥太と云ふ三段が居た。此人も相當有名であつた。今の和田三造畫伯など當年の美少年で、彼は巴殺を得意として居た。當時二高からは入來二段が態々暑中稽古に出席して居り、學習院では故徳川(慶久公)柳生の兩君が幼年組の二三級處で、同時に又講道館の花形でもあつた。兩君とも講道館嘉納塾生として、學校へもコ、から日々通學して居た。

私達の仲間で番町學校の筋向にある伊勢屋と云ふ酒屋に下宿して居た男があつた。いつも試験が済むと通中が、コ、を本據にして痛飲馬食をしたものだ。前出、松代佐竹、伊藤などの通中は、大抵一人で二三升も引ッ掛けてけろりとして居た。私なども當時は一升程度はピリツともしなかつたものである。後年前田はアメリカに行つて、コンデコマの光世とか云ふニツクネームで世界的に名を揚げ、佐竹、伊藤の兩君も前後して渡米し、今は何れもシャートルで立派な道場を開いて、相當世界に名をなして居る。松代君は北海道の函

館に歸つてソコで道場の主となつて地方青年の教養に任じて居る。私の柔道生活は殆ど十三年間も續いたのであつたらう、住居や勤務の關係で、或時は赤坂尙武館の代稽古をやつたり、或時は麹町の深田道場に出掛けたりしたこともあ

る。而して今尙行李の底に稽古着の一着を收めて轉々したものであるが――最後に私の武勇譚の一顧りと、路上瀕死の一青年を活で生かした功名談もあるが、之等は省略して一先づ此稿を擱筆する。

本場銘仙  
毛糸各種

ち、ぶや

本町二丁目  
電話五〇五番

◆鶴ヶ岡閑話

北 漢 山 人

○鶴ヶ岡の文化住宅は、朝鮮土地經營で經營し、今は立派な城南の一文化村となつてゐる。

○土地經營では、始めこの地面を、大倉組から譲り受けたのだがその大倉組は、最初ヒヨクナ因縁から、この土地を手に入れたのださうな。

○今を距ること、十餘年……故大倉男は、善隣商業か何かの用事で、京城へやつて來た。スルト或る見ず知らずの男が、是非お目に懸りたいといふ。初對面のもは困るといふと、でも男一匹の命にかゝることですといふ。ソコで、餘儀なく面會することにした。

○會つて見ると、イキナリ金三

百圓御無心申すと來た。命にかゝるといふは、そのことかと聞くといかにも、左様ですとある。男はその率直を愛し、ワケは、聞くまい。さう持つて行きなさいと。三百圓やると、この土地を、そつちへ取つて欲しいといふ。イヤ代價は入らぬと斷ると、それでは、この三百圓を貰うことが出來ぬといふ。押問答の擧句、とう／＼書類を押しつけて行つた。

○當時の鶴ヶ岡は、一面茫たる草山。何の値打もありやしない。忘れたやうにしてゐる中、時勢變轉。とう／＼何十萬圓といふネダンになつた。

○この男、マダ京城にゐるかも知れぬ。兎も角も、金持といふものは、コンナ風で、殆んどヒトリで、金の殖えるものだと或る人の追懐談。

あり。この方の心配は無用なり。

○官吏は學校の先生まで制服着

し、今は何れもシャートルで立派な道場を開いて、相當世界に名をなして居る。松代君は北海道の函

かゝることですといふ。ソコで餘儀なく面會することにした。○會つて見ると、イキナリ金三

のは、コンナ風で、死んどヒト！で、金の殖えるものだと惑る人の追懐談。

# 臺灣雜感

今村 豊  
(城 大醫學部)

○昨年十一月九、十兩日、臺北の臺灣醫學會に醫學部から外科の小川君と僕が出席した。來賓として基隆の船まで送迎を受け島内の汽車のバスを貰ひ、方々で招宴に與り、到る所で役所の自動車に乗り廻し、巡查の護衛がつき、お蔭で持ち前の出たらめも出來ず、聊か有難迷惑を感じたが、兎に角面白い旅行であつた。

の燈臺まで燈臺の歌を呉れた。十日間の島内旅行にこれらの書類がカバン一杯になつた。

○招宴のカハキリは着いた八日夜の總督官邸の臺灣料理、主人石塚總督は小柄な上品なお爺さんである。中々上機嫌で話して呉れるし骨董を見せるし自身巡視の活動寫眞までして呉れた。あの控室で頂いた臺灣最上の葉巻は中々よい香りで和製にこんなものがあるかと思つた。臺灣醫學會長の堀内さんは、北白川の宮様について渡臺されたと云ふ實に臺灣醫學の父である。顔つきは丸で違ふが、感じが我が志賀總長に甚だ似てゐる。長い話で若い者惱ます所も亦同じ。九日の宴會の挨拶、實に卅五分間、折りから蒸し暑い雨は降るし開く者一同汗をしばつた。

○宣傳通り交通と旅館の設備は行き届いてゐる。先づ週に三回出る連絡船は郵船商船何れも一萬噸級。型は古いが歐洲航路なみだ。船は大きく客は少く、會社は儲かるまいがお客は樂だ。汽車も箱こそ小いが中々清潔で乗り心地悪くない。阿里山は八千尺の高さまで材木運搬用の汽車あれど、普通山に行くのは臺車、即ち人の押すトロツコによる。少々危険を伴ふが下り坂の壯快さけ他の乗り物では味へない。潮州から最南端の鶯鷹尾まで往復百餘哩の自動車道は天下逸品だ。坦々たる直線の木麻黄の並木道、通過する村々の珍しさ(自動車に驚いて逃げ廻る豚やアヒルの群、リントウの生垣の前にウツソウたる麻竹の林を後にした南支那風の繪のやうな建物、泥中に動かぬ水牛の群れ、大きなシャボテン、亭々たる檳榔樹、その實を食べる口の眞黒な土人等々)長いドライブが一向退屈しない。

○朝鮮も同様だが、臺灣は宣傳に中々熱心だ。何んでも毎年懸賞で宣傳歌募集して醫者に強制的に唱はしてゐる。あまり傑作のない證據には丸山さんの國境節ほど内地を風靡してゐるものがない。役所工場何處を訪づれても先づ統計報告書類を包んで呉れる。鶯鷹尾

○宿舍の設備は角板山、阿里山の上までも水道あり電燈あり、到れりつくせりである(尤も僕の行ったのは最も有名な所で宮様方さへとられるコースだからそれ以外の地は保證の限りでない)マラリアの殆どない土地でも必ず蚊帳をはつて呉れる。汽車の寢臺も蚊帳

○官吏の制服と今一つ眼ザワリになるのは銅像の多い事だ。殊に見玉大將、後藤新平のは數が多い。銅像なくとも後藤新平は頗る大きな後に實を結ぶ仕事してゐる。臺灣に行つて後藤新平の傑さがわかる。臺北の中央研究所は殊にその熱帯病研究部は國寶だと褒める人さへあり。新平の創めたものである。臺北、臺中の都計畫の美にして堂々たる道路の如き自動車の發達しない時代よく思ひ切つて廣くかつたものだ。やはり新平のプランときく。臺北はもとより地方まで病院の設備の立派な事これ亦新平のお蔭である。

○宿舎の設備は角板山、阿里山の上までも水道あり電燈あり、到れりつくせりである(尤も僕の行ったのは最も有名な所で宮様方さへとられるコースだからそれ以外の地は保證の限りでない)マラリアの殆どない土地でも必ず蚊帳をはつて呉れる。汽車の寢臺も蚊帳

○この阿片工場は今年國際聯盟から調査に來るので、相當當局の頭痛の種子だときいた)あり。其他嘉義の製材工場、阿里山の登山鐵道、屏東の製糖工場、それから基隆高雄の港灣設備等々。兎に角九州より狭い島で中央に貫いてる所だ。圖體ばかり大きくて年々中央からアテガヒフチを頂くこの半島

○この阿片工場は今年國際聯盟から調査に來るので、相當當局の頭痛の種子だときいた)あり。其他嘉義の製材工場、阿里山の登山鐵道、屏東の製糖工場、それから基隆高雄の港灣設備等々。兎に角九州より狭い島で中央に貫いてる所だ。圖體ばかり大きくて年々中央からアテガヒフチを頂くこの半島

あり。この方の心配は無用なり。○官吏は學校の先生まで制服着てゐる。一寸した宴會まで勳章つけて出る。服はカクシボタンで海軍士官に似てゐる。帽子の金筋は普通の日はバンドでかくしてある昔の朝鮮のそれの如くケバケバしく野暮でない事も長続きする一理由だろ。實際官吏の半分は服代經濟の故に且つ簡便のために寧ろ喜んでゐる。イカメシイ大官の送迎に停車場に並んだ様はよろし。購冊として制服制帽青樓より出て來る圖は感心出來ず。

○この阿片工場は今年國際聯盟から調査に來るので、相當當局の頭痛の種子だときいた)あり。其他嘉義の製材工場、阿里山の登山鐵道、屏東の製糖工場、それから基隆高雄の港灣設備等々。兎に角九州より狭い島で中央に貫いてる所だ。圖體ばかり大きくて年々中央からアテガヒフチを頂くこの半島

とは違ふ。

○案外なのは阿里山から見る新高山の姿である。こゝから尾根つたひ七里。年に登山家でない素人が百人餘登ると云へば平凡な山である事がわかる。途中生蕃の危険以外山そのものの危険はないとの事、一萬三千尺帝國の最高峰も回歸線上にあるお蔭には年中殆ど雪を見ない。周圍に一萬尺以上の峰が群立してゐるので一向高く見えない。(台灣には一萬尺以上の山が四十八もある)富士の威なく、日本アルプスの魁なく、金剛山の奇もなく、極めて平凡な山である。

○豫期して行つた果物中マンゴウは時期が外れボンカンには少々早かつたので、平凡なバナナ、パイナップル、ジャボン、パパヤ、それに西瓜を飽く程食べた。魚や野菜は新鮮で美味のものが容易に得られる。ただ米は年に二度も穫れ乍ら所謂南京米で上等のものは内地から来る。牛肉も彼地産は固くてマツク内地ものが上等である故に非常に高い。台灣ではスキヤキは上等の料理に屬する。台灣料理(實は福州料理)は北方支那料理より僕等の嗜好に向く様だ。

○朝鮮から行つて著しく眼につくのは百姓の働く事だ、子供でも水牛を追ひ、アヒルの群の守をしてゐる、道バタに烟管くわへて終日ウツクマツテゐる悠揚の様は見あたらない。元來が支那人だし、米の二度とれる所だ。ほんやりもされまい。(役所の報告書によれば朝鮮の耕地が遙かに總面積は多い、しかも肥料代は台灣より總額で少い。一戸あたりの家畜家禽の類も比較にならぬ。以て彼地の百姓の勤勉なる事、若しくは豊かな事がわかる。)

○珍しいのは阿片が官賣で公然廣告の出である事、感心したのは生蕃に立派な顔の多い事(但し僕が見たのは七種族中の三種に過ぎぬが)。驚いたのは朝鮮人蔘の看板を到る所に見た事だ。(歸つて杉原人蔘博士に話すと台灣も人蔘の御得意先きたとの事)今一つ自慢にならぬが台灣人、内地人の女郎屋と軒を並べて二三軒のカルボウ屋ある事。

○台灣は内地同様既に出来上つ

### ◆大晦日の話

三木一彦

○歌人の徳野鶴子さん、大晦日の暮方、本町で買物をして、小走到りに櫻井町へもどつて来る。

○コ、で、斷つておきますが、鶴子夫人は、なか／＼のブルジョア、その持家だけでも何十軒とある。

○ところが、その中の一ツ……たしかに空家になつてゐる管の一軒で、人聲がし、チラ／＼明りさへ見へる。これは不思議と立ちとまると、中で酒盛りを始めてゐる

○夫人一生一代の大奮發!、玄關におとつれて、『御免下さい』『ヨ、入らつしやい』『ソコで、ワケを聞いて見ると、先方の曰く、『何んしろ明日は正月です、い、家へ引越して、い、正月を迎えるといふのが、僕等の趣旨。そこで、捜し廻つてると、丁度コ、に、うつてつけの家がある。語に曰く、善は急げとな。依つて斯くの次第。追ひ／＼大家さんへ御沙

【一四】

たとの感がある。平地は見渡す限り米田、甘蔗畑、山地になつて茶畑、果樹園、天下に有名な阿里山とても西側半面は裸である。東側新高に面し原始林あれど。需要が増してもつと能率の上る伐採法を施したら餘命の程も知れてゐる。兎に角調つた出来上つた事は老成を意味し現在以上の發展を意味しない。

こふなると調はぬ丈我が半島の未來は洋々たるものである。

汰をするつもり。早速ですが奥さん、コ、にもう一部室、オンドルを作つて貰ふワケには行きませんか。エー、、らいらくといはうか向ふ不見といはうか、まことに以てい、氣な先生だ。

○大家さん、二ノ句がつけなかつた。しかもそれが、お醫者さんと來てゐる。

○これだけは、歌にならんさうです。

○峰岸善太郎氏といへば、本町四五丁目、大和町方面切つて物持!。一代にして、この身代を作り上げたといふ剛のモノ。

○本籍は、東京で、この春も、東京に行つたが、汽車はいつも三等。『お年寄りだから、二等にしてはどう?』と、家人心配すれば『警澤をいひなさい。拙者は、汽車に四等のないのが怨めしい』  
○平生『濱口さんは、エライ。あれでなくちやいかん』といつてゐる。定めし今度は、首相と節約談をして戻ることであらう。

類も比較ならぬ。以て彼地の百姓の勤勉なる事、若しくは豊かな事がわかる。

に、うつてつげの家がある。語に曰く、善は急げとな。依つて斯くの次第。追ひく、大家さんへ御沙

あれでなく、いかにいふ。定めし今度は、首相と節約談をして戻ることであらう。

# 鶯

## 松井民治郎

(平壤商業會議所)

去年の正月、私は或る席で誇り顔に、今度京城から半玉を落籍して来たよと、友人に話した事がある、其れから十日程経て、其の友人が遣つて来て、先日の話のあつた半玉を見に来たのだ、酒を出してお酌でもさせると、大まじめな註文であつた。

私は腹の中で、成る程無理からぬ間違ひを仕出かしたものだ、が是れも一興、宜しい今お目に掛けると云つて、臺所に酒の仕度を命じ、暫らくして徐ろに隣室から小鳥籠を持ち出して、是が其の半玉だよと、友人の前に置いて見せた友人は怪訝な顔付で、何だ是は小鳥ではないか、馬鹿にせずと早く其眞物の半玉を出せと迫るのであつた。實は白狀するが、其の半玉と言つたのは、此鶯の半玉なのである、幸ひと仕込み甲斐があつて、今ソロ／＼鳴き初めつゝあるから、先づ緩つくりと飲みながら可愛い聲を聞いて遣つて呉れと大笑ひをしたことが、今や丁度一年を過ぎて仕舞つた。

近年、私も年寄りの御多分に漏れず、益裁いぢりとか、又は小鳥の類を飼育するよ様な閑潰しに趣味を持つて来たので、數鉢の植木に水を灑ぐ、三四羽の小鳥に餌をやる、其中にも先輩から教を受け、雛鶯の仕込みを試みる事が一番興味のあることに思つて居る偶ま、閑寂の境地に在る時に、庭

の植込みを隔てた、奥の小座敷から、清々しい法華經の妙聲が、音波を透して我が居室に注いである、薫香に和して来た刹那と云ふものは、春が我が、我が春か、全く私と春と鶯とは、一つであるかのように聞き惚れるのである。

歌聖西行法師の歌に、

鶯の聲にさとりをうへきかけ

きく嬉しさもけかなかりけり  
とあり、其の歌意を案じて見ると古徳が、山籟を聞いて悟り、又は瓦の破る、音を聞いて悟れる例あれども、斯る妙にやさしき聲に、今悟を得んとするも得べからず、其の故は法を聞けよと鳴けども、聲のあまりに妙なるゆゑに、却て聞く嬉しさに、はかなく愛着するを以て、是空の悟を得難しと云ふ心ならんと思はる。既に大徳西行法師にして然りであるから、我等の如き俗人である以上、其の鶯の妙音に愛着して、我を忘るゝことも強ち無理ではあるまい。古老の語に、本邦で鶯を技巧的に愛翫した旺盛時代は、何といつても徳川中世期以後であつたらしい、江戸の町人の資産家又け藏前の礼差しなど、當時社會的地位を得んが爲に、今でも例のある買位買勳の筆法と同様に、公然と御家人の家柄を買込んで、士族高家の生活に均しい、門地を張らんとすることが、一種の流行を極めた、其れ等の人々が、老後隱棲の地を、閑靜

の所に卜して、鶯花雪月の風流を誇つたことは、恰も現代の資産家が別荘を營んで、虚榮に腐心するのと同調であつたと言ふ。

人も知る通り上野公園には鶯坂がある、其の頃は下りて左側に鶯春亭といつた有名な料理屋があつた、中根岸の御行の松から笹の雪、其れから谷中の鶯谷の方へ通ずる、兩側の一帶が、前述の所謂樂隱居連の別荘地の跡である。

明治二十年頃、私等の書生時代に、よく或る方面からの歸路に雀の雪の豆腐料理で、一杯ひきかけたものだ、本誌愛讀者の中には同じ道筋を辿つた同好の士のあることを信ずる、但し靑壯年諸君にはなからうが、其の時分に此邊を徘徊して見ると、まだ徳川時代の遺物や風習が、道端にゴロ／＼して居た。特に鶯の時節になると格別に此邊の往來が繁昌して居た、其れと云ふのは、到る所の樂隱居殿の支關には、お定りの二枚折の金屏風が立てられて、其の前には朱塗りの腰高の机上に、朱總さの太と打紐で、中央を化粧括くりにした、鳥屋箱を載せてある、警澤なのは、蒔繪銀金具の鳥屋箱を見たことがある。其の中の本尊は言ふまでもなく鶯だ、勿論各自が其の名鳥を所有して居ることを高慢するのである、閑人の多き東京の事だ、此鳥屋箱から鳴き出す、妙聲を聞き較べんとして、朝からうちこちの支關前に佇立する、有象無象が後から後からと踵を接して来る、中には刺を通じて主人に面會を求めて、頻りと名鳥たることを譽めちぎりてお世辭を並べるものもある。主人は鼻高々喜んで、見ず知らずの客に茶を酌み出す家もある、香を灑ゆらして接待する



内もあつた、随分と呑氣な沙汰ではあつたが、周圍の空氣が何んとなく暢んびりした所があつたものだ。星移り、物換り、四十年後の世路幸き今日でも、驚だけは少しも變らずに、居てくれるのが私は嬉しい。

◆無駄はなし

漢江漁郎

○教育界の『大御所』といはれた赤木萬二郎(京城師範)氏も、トウ／＼退官したが、氏が校内校外に揮つた勢威といふものは、實にスバラしいものであつた。

○氏に睨まれたら、如何に有爲有能の士でも、一日もその地位が保てぬし、氏のお氣に入つたが最後、立身榮達は、順風に帆を揚げるやうなものだとさへいはれた。

○先づ校内を巡視する時、無数の扈從が、つき従ひ。シート／＼と警陣の聲の懸らんばかり、何百といふ生徒は、いつ遍にスクミ上つたものでした。

○また赤木サンが地方でも視察すると、目的地は、いふも更らなり、沿線の各學校の先生は、仕事を捨て、競つて停車場へ参向。

『ハハ、校長！いつも乍ら御健勝で』、さういふところを、無数のとり巻きを連れ、昂揚として闊歩するのが、アノ人の壇場でした。

○よくいふものもあり、悪くいふものもある。是非は知らぬ。但し向後、どつちによ、アレほどの利ケ者が、また教育界に、再現しやうとは思はれぬ。

× ×

鱻の洲乾

磯部桃果

(養正高普)

缺もて小包とけば銀色の鱻の洲乾はこぼれ出でにけり  
ける／＼と伊勢よりくれし銀色の鱻の洲乾をうれしみにけり  
うづだかく盆に盛りたる銀色の鱻の洲乾をめでにけるかも  
鱻の洲乾あふりてあれば伊勢の海のうしほの青も目に浮ひ來る  
この朝食鱻の洲乾を火にあふり妻が並ぶる瀬戸物の皿  
燒きたての鱻の洲乾ののぎをとりむらさきつけて食ふがうまし  
鱻の洲乾見つゝしぬべむら肝のこゝろを吹きぬ白き秋風  
洲乾食うてのきにおよびを刺されたる少年の日を思ひけるかも  
.....  
もだしつゝ壁のすきまゆしのびよる夜の寒さは砥に似る  
寂しさは鵲の古巢の懸りたる冬木の末の夕ぐれの風

○南山荘で使つたビールの空瓶を、一つところにためて置くこと、それが山のやうになつた。

○一度に賣拂ふと、この代金六十何圓也。

○赤荻氏の夫人が、何に使はふかと思案中、人にすゝめられて、アノ邊の土地を買つた。

○これは、十年年も前の話さ

うする中、だん／＼地價が上つて來て、買手が出來て、トウ／＼二三年前、何千圓とかで手放した。

○夢のやうなことなので、大に皆に御馳走したといふが、アノ邊には、チヨイ／＼土地暴騰のためには、『俺アいつの間に、そんな金持か』と、自ら驚くやうなことが往々あるやうな。

日光寫眞を再現

は左の恭親王自筆の別録で分ります。



利ヶ者が、また教員に、再理  
やうとは思はれぬ。

アノ邊の土地を買つた。  
○これは、十何年も前の話。さ

持か」と、自ら驚くやうなことか  
往々あるさうな。

# 放光寫經を拜觀して

## 清谷 惠眼

(西本願寺布教所)

は左の恭親王自筆の別録で分  
る。

日本國皇后藤原氏手跋唐人書  
放光經卷

此卷爲唐高宗皇帝時日本使者至  
中國請求名家書此放光經歸國後  
獻於庭 經藤原皇后光明子御筆  
親跋其後時爲日本國天平十二年  
五月謹齋藏東大寺後又送至中國  
距今一千三百餘年誠大寶也

日本國皇后藤原氏手跋唐人書  
放光經卷爲恭親王邸之寶藏重  
物

己巳四年四月朔 恭親王末印  
かゝる珍寶を拜觀すると同時に予  
は如何に光明皇后が三寶を崇敬し  
四恩を感謝せられた事實を此の願  
文の上に拜覽して敬慕猶く能はざ  
る次第である。

因みに光明皇后は天平二十一年  
正月に聖武帝皇太子と共に沙門行  
基より菩薩戒を受けさせられ帝は  
勝滿、后は德滿、太子は滿福と法  
名を申し上げた。此日戒師行基は  
帝より大菩薩の勅號を賜はり行基  
大菩薩と稱した。

### 法曹風聞記

三木 一彦

○覆審法院の筆并檢事が、出で  
ゝ京城地方の檢事正となつた。

○これは、どの方面でも、頗る  
好評を博してゐる。

○剛正な人で、しかもたつぷり  
と人間味がある。斷じてヤボな、  
石頭ではない。

○給仕までが、ホク／＼、「今  
度のコレ(親指)は、いゝ人です  
よ。僕等も、大に元氣ついていま  
す」

昔し法相宗の北寺傳の祖と仰が  
れた沙門支助僧正は、元正帝の勅  
命に依り靈龜二年に入唐した。居  
ること十八年、聖武帝の天平七年

四月に歸朝し、佛像を始め經論章  
疏凡そ五千有餘卷を持ち歸り之を  
獻上した。其獻上した中の一部と  
隨かに想像される放光經第二十二  
即ち摩訶般若波羅密經六十五、六  
十六、六十七、六十八を書寫した  
卷き經を去る十一月下旬京城清水  
氏邸に於て拜觀した。

當時自分は鎮護國家の三經とし  
て奈良朝時代に於て尊信されてあ  
つた金光明最勝王經を閲覽してゐ  
たが、一層になつかしく嬉しく、  
且つ有りがたく思つた。聖武天皇  
は佛教を尊信して諸國に國分寺を  
創立せしめ、天平十三年に僧寺を  
金光明四天王護國寺と號し、尼寺  
を法華滅罪之寺と稱せしめられ、  
各寺に金光明經及法華經を各十部  
づゝ書寫し納經安置せよとの勅命  
があつた。其前年天平十二年五月  
一日に光明皇后が願文を認めて寫  
經の後尾に自筆を染め東大寺に奉  
納された。其願文は左に

### 放光經卷第二十二

皇后藤原氏光明子奉爲 尊考贈  
正一位大政大臣府君尊批贈從一  
位藤原太夫敬寫一切經論及律莊  
嚴既了伏願遼斯勝目奉資冥助永  
庇善根之樹長遊般若之津又願上  
奉 聖朝恒迎福壽下及寮采共盡  
忠節又光明子自發誓言弘濟沈淪

勤除煩障妙窮諸法早契菩提乃至  
傳燈無窮流布天下聞名持卷獲福  
消災一切迷方會歸覺路

天平十二年五月二日記

如是にして特に東大寺に納經され  
たのは其當時唐よりは高僧道璿律  
師が來朝して、華嚴宗の章疏を多  
數齎し來り、又新羅よりは沙門審  
祥大德渡日して天平十二年に我國  
の良辨法師の特請によりて東大寺  
にて華嚴經を講說せられた。其時  
聖武帝は大に御崇敬遊ばされて終  
に東大寺を華嚴宗の本寺として盛  
んに華嚴宗を弘通せしめられた。  
故に光明皇后も此寺に納經せられ  
たのであらう。

其後東大寺に納經された本經が  
再び支那に渡つたのは別記に依り  
て萬曆年間即ち足利時代と想像さ  
れる。是れは多分支那の一切經本  
を求めめる爲に亦日本の珍藏せる本  
經を土産として獻納したものでは  
なからうか。卷尾に亦左の記録が  
ある。

右放光經第二十二卷日本天平十  
二年倭后光明子施之華山知恩古  
刹者按天平值中上唐永徽間當時  
倭使至唐必求書佛經以歸其佳  
者獻於國主此其一也自唐迄今千  
有余年而殘墨如斯首尾完善亦希  
有之品也

萬曆二十五年四月記

斯くて此の珍寶が京城に居ながら  
拜觀出來たことは實に光榮であり  
然かも恭親王邸の寶藏であること

# 屠蘇機嫌

津田常男

(遞 信 局)

【一八】

題して屠蘇機嫌といふ。ほんとうは屠蘇機嫌以後である。正月になつてアルコールから開放されたのは今日が初めてである。そこへ、女房と女中とが簾入を一句早くして、活動へ行きたいといふから、早速出してやる。零下何度の寒さに御苦勞様と思ふが、お蔭で家中は極めて静謐、雑筆のペンでも握らうかといふ気分になつた。

暮の忙しい電車の中で、パツタリ出遇つたのが、雑筆社のA君。やあ、やあと言ふうちに、A君何を感じたか、今度は無線の記事を書いて下さいといふ注文。オーライと引受けたは引受けたが、考へて見ると餘りいい氣持ではない。雑筆は雑筆であることが特色である。眞の雑筆であらうが、偽の雑筆であらうが、鍍金の雑筆であらうが、凡そ如何なるものも總稱して雑筆と稱する。特に無線の雑筆などと制限されると、甚だ書き難くなる。A君は無邪氣で言つたのかも知れんが、従來の私の雑筆が何か御氣に障つたのでもないか、などと餘計な邪推も起つて来る。

が考へて見ると、伊藤憲明さんの法廷雑筆などは、常になかく傑作が多い。海軍の福永恭助さんはローマ字論から、三等水兵マルチンとだんだん男を上げて、今は、『軍艦物語』に軍縮會議當て込みの際物といつては失禮な、堂々たる雄筆でしかも興味津津たる記事

を朝日新聞に連載して居られる。陸軍の櫻井忠温さんは、午年に因んで、軍馬の思ひ出など、相變らず『肉弾』の餘威を示して居られる。して見れば、如何に役者が二枚も三枚も下だからといつて、私にも無線雑筆が出来ぬ筈はない様だが、之は私が悪いばかりでなく無線といふことがどうも雑筆の種類になり難い。短波長がどうの、長波長がどうのといふと大抵の人が先づ目を障つて了ふ。尤もアマチニアなんていふものも決して馬鹿にはならぬもので、現在無線界の寵兒とも見られる短波長は元來米國のラヂオ、ファンから發達して來たのである。日本でも小數のファンの中には、我々の企及し得ない研究家もあることは事實である

此の間、學務局の友人から電話が掛つて、キロサイクルといふのは何かと聞かれたときには、どうも電話口では説明に苦しむと思つたが、どうやら話の用件だけは足せ

たやうなこともあつた。軍艦に無線が必要なのは、日本海海戦の信濃丸以來歴史的に證明された事實だが、毎日新聞の軍艦物語を讀んでも、今後の海戦といふものは、海戦に先立つて先づ航空戦が起り、飛行機と艦との間の無線連絡といふことも重大事になる。飛行機ばかりではない。潜水艦からも無線連絡が必要である潜水艦が敵艦に肉搏して自ら攻撃

するのみならず、氣付かれぬうちに敵の艦影を撮影して、之を無線電送によつて後方の主力艦に傳へる。艦影の見えない處から彈丸が確實に飛來する。といつた具合で今後の海戦は、主力艦が絃々相觸するといふ前に既に戦の離離は決せられなければならない。科學の應用は益々鋭化する。従つてその戰禍を事實に證明する前に、益々軍縮會議の成功が必要である。現代はこの二つの相反したチレンマ的傾向のうちに相進む。

話が大大大掛つて來たからもうと手近い話をする、内訌を飛ばし旅客飛行機にも無線をつけることになつてゐる。その爲に、内地では箱根、龜山、福岡などに飛行機連絡用の無線局が出來た。今年は朝鮮の蔚山にも出來る。飛行機旅行は益々安全になる。

こんなことを並べて居ると、矢張り綿々として盡きない。結局雜筆位ぢや追付かないのである。最後に極く卑近な話をする、京城無線電信局ぢや昨年十二月二十八日の日に取扱つた電報の總數が二千四百四十五といふレコードを示した。實に開設以來のレコードだといつて、従事員は鬼の首でも取つたやうに喜んだ。二千突破が何故そんな嬉しいかといふことは、前後の事情關係を知らなければ解らぬことだが、若し詳しいことを知りたければ、一度無線局へやつておいでなさい。何時でも御案内して説明してあげます。博覽會のとき作られた京城の虫瞰的繪圖面に、三百尺の鐵塔のある龍山の送信所の存在を示してなかつたのが私には残念であつた。まだまだ京城の人は無線に冷淡なのではなからうか。

曼 十

ソとだんだん男を上げて、今は、『軍艦物語』に軍縮會議當て込みの際物といつては失禮な、堂々たる雄筆でしかも興味津々たる記事

の無縁連絡といふことも重大なる。飛行機ばかりではない。潜水艦からも無縁連絡が必要である。潜水艦が敵艦に肉搏して自ら攻撃

# 支那趣味

松田學鷗

(總督府文書課)

元且や床に傳家の四書五經  
酒一斗詩百篇や松の内  
立春や大吉と書く紅唐紙  
寒む空に梅看る人や東坡笠  
観梅を兼ねて開きの南畫會  
春の雪黄鶴樓は糝糊として  
若草や石馬黙せる古王陵  
二日灸南京襦子の帯解いて  
何事ぞ瀟湘をあとに雁歸る  
江南に鶯啼くや酒旗の風  
秦淮の畫舫ゆらくや春の水  
青柳や夢は西湖の上を飛ぶ  
柳垂るゝ陶氏の門をたゞきけり  
蘆芽もよし鱈魚も美なり酒酌まむ  
春風に躊躇として醉李白  
神農の未だ嘗めざる木の芽かな  
草けぶる楊妃の墓や雉子啼く  
日麗らゝ圖南の鵬か飛行機か  
春の宵豚饅頭を賣る聲す  
潯陽に琵琶聴く春の雨夜かな  
茫として霞む吳の山越の山  
簫吹くや二十四橋の春の月  
巖採りて夷齊の故事を語りけり  
仙源を漁夫指さしぬ桃の花  
高陽の酒徒もまじれる花見かな  
南山に對す欠伸や菊根分  
老儒者の易を講ずる日永かな  
散る花に僧は微吟す杜牧の詩  
春の海筏にのりて浮ばんか  
仰向けば春の雲吐く香爐峰  
蝶々や莊子が睡むる枕元  
何事も巫山の夢ぞ春の暮

# 鰻井

五拾錢

## お寿司

定評あり  
先づ御試  
食願上候

本町五丁目

阿波文

(電本一八三七)

## ◆世間はなし

北漢山人

○宮崎ペーチカの主人公宮崎吉太郎氏は、日清戦役の當時、吳市に住んでゐた。

○或る時、賞銀問題が何かで、吳工廠内がゴタつき。今にも大罷工が始まらうとしたことがある。何萬といふ職工大衆が、工廠の前で、ワーツと氣勢を擧げる。形勢は、刻々險惡。宮崎氏愛國の熱情にたえず。覺えず身を挺して、正門の柱の上に直立、『諸君々々先づ私の一言を聞いてくれ……』斯くて、滔々として日本の急機を説き。各自の責任を説き。『この國を生かすも、殺すも、諸君の氣持ち一ツぢや』、潜然として、宮崎さんは泣いた。大衆は、胸をうたれた。シーンとなつてしまつた。遂に問題は解決した。

○若い、エライ男がある、これが宮崎さん出頭の始め。

○今でも、上々機嫌の時は、折々この話が出る。『アンタも、大隈侯よろしくをやりましたネ』、宮崎氏額を叩いて、『ヘツへ、誰もがさう申しやす。ウフツ』



# 金の話

## 島村新兵衛

(地質調査所)

金は地球上に甚だ廣汎に亘り分布して居つて又其存在量最も少き元素の一つである。地殻を形成する各種岩石中には勿論のこと海水中にも微量ながら含有してをる。人類の始祖と言ひ做せるアダムとイブの住みしエデンの花園には己に金ありと記されており、其の後人文漸く開け智識次第に進歩するに従つて金鑛業は次第に進歩發展し、西曆紀元前既に多少の繁榮をなした模様である。亜米利加發見當時は全歐洲を通じ金の産額は二億二千五百萬弗で、現時世界一ヶ年の産金額より遙かに少なかつた日本で金銀の事を記載されてあるのは實に素戔鳴尊に初まり、日本書紀に素戔鳴尊五十猛の神を帥ひ新羅國に至り給ひし事及び『韓郷の島には金銀あり若使吾兒御の國に浮寶あらば佳ならじ』との尊の神言ありしことを掲げてあり、これが朝鮮に金銀のあることを本朝に傳へし初めである。其の後神功皇后の時に至つて朝鮮より金銀を買にしたことが日本書紀、扶桑略記及水鏡等に見えて居り、これが日本に於て金銀を見ることを記載せる初めである。前記の様に朝鮮では金銀を産する事は古くより傳へられて居り、高麗文宗三十六年(今より八百四十八年前)には既に金銀鑛の匠が起つて地方官は鑛業を以て好個の財源として居つたのである。

金は大體地殻中どんな處に存在して居るか云ふに、(一)各種火成岩中、(二)變質水成岩中、(三)石英脈及河床の砂礫中に含有せられ、其他海水の一部分として存在する。而し海水のものとは極く微量で集金しても經濟上引き合はない。古來人類は(一)(二)及び(三)即ち各種岩石類及河床の砂礫中より金を採集して居り、今日でもそれを續けて居る。砂礫中の金即ち砂金は岩石及び石英脈中に含まれる山金の風化分解により土砂礫と共に河岸等に漂積せるもので、これは洗滌淘汰により簡単に金を採取する事が出来るので大古より此の種の金鑛業は存在して居つたが、其の後砂金より溯りて遂に岩石中の金即ち山金を取る事を發見したのである。又砂金鑛床存在せる流域の上流には必ず山金が存在するもので、砂金が金鑛の賦存を指示し、有名なる金山發見の端緒をなした例は少くない。例へば威鏡北道慶源郡龍德面附近の河域には砂金鑛床あり大正十年頃には砂金のみを採集して居つたが其の後上流に山金のある事を發見し、今では立派な金鑛地帯になり又最近では威鏡南道端川郡に金鑛脈の非常によいものが發見せられた様だが、此の附近は昔より有名な砂金地帯であつた。明治四十四年には此の地方で重量二百四十匁目と云ふ砂金の塊が發見された

【110】

事があり當時日本領土内では最大で、之は大正十五年に寺内總督より宮内省に獻納した。ついでに世界で砂金の大きなものを擧ぐれば一八五八年に濠洲ウキクトクヤ殖民地ダノリーより發見した重量十二貫百三十三匁目の砂金塊や、一八五四年北米カリフォルニア州より産出した重量十九貫四百二十匁目の砂金塊等がある。

金の全世界の年産額は八億圓内外でトランスバールは其の半を産して居り次に北米合衆國、日本は第九位を占めて昭和三年には年産二千萬圓餘を産出して居る。朝鮮は昭和三年には七百三十萬七千八百八十六圓を産出し、平安北道は其半を産出し、其次が黃海道、忠清南道、全羅南道の順序である。

### 鯨を食ふ話

三木一彦

○旭町の今本病院長と大浦貫道師とが、どつちも初めて『フグ』を食へました。

○だが、『初めて』といふのは大に通士の估券に關します。ソコで、一人が『當節は、これに限りませう』といふと、相手も『左様々々、拙宅などでは、三度くこれにキメてみます』

○だが、その晩は、氣持が悪くて、おち／＼寝られない。令夫人を捉らへて、『オイ、俺の顔色はたしかゝらう』

○朝起きて見ると一命無事……うれしきこと、この上なし。双方早速電話口『イ、ヨー、御無事で』『アンタもおまめで』『フフッ』『ウフッ……』

# 樽で酒を判断

逐年著く増加して、現今の生産量は數年前に比べて殆ど倍加するに至つた。マルクスの所謂『消費が

に金銀採鑛の匠が起つて地方官は鑛業を以て好個の財源として居つたのである。

な砂金地帯であつた。明治四十四年には此の地方で重量二百四十匁目と云ふ砂金の大塊が発見された

「アンタもおままで」「フツツ」「ウフツツ……」

# 樽て酒を判断

## 三木清一

(京畿道財務部)

酒の神様バツカスは酒の醸造技術に長じて居たばかりなく、萬有還金とも云ふべき不思議な技術を有つて居た。當時リデアのミダス王がバツカスに「自分の手に觸るものは何でも悉く金になるやうな方術を教へて呉れないか」と頼んだところ、バツカスは快く之を教へたので、ミダス王の喜びは非常なものであつた。一夕知友を招いて其の還金術を試みる爲に披蓋宴を張つた。卓子や皿やナイフの類が悉く金になつた迄はよかつたが、パンを取れば其のパンは直に金となり、最愛の子供に手を觸るや、これ亦金と化して仕舞つたので、ミダス王も之には妙からず驚いた、とのことである。しかし酒の神様たるバツカスとしては、萬有還金術は一つの餘技に過ぎない。萬有アルコール化こそ其の眞使命であつたのであらう。

バツカスの萬有還金はギリシヤの一神話として残つて居るに過ぎないが、酒の方はバツカスの創造した葡萄酒の外に、硬酒、軟酒等多種多様の酒が生産され、酒の原料としても葡萄の外に或は林檎、莓などの果實類、或は米、麥、高粱の如き穀類、或は甘藷、糖蜜など孰れも酒の原料たらざるはなしと云ふべき情態である。

○ 現今朝鮮で一年間に生産する酒

類は百八十萬石内外であつて、清酒あり、黄酒あり、白酒あり、味淋あり、林檎酒あり、杏實酒あり、梅酒あり、藥酒あり、燒酎あり、高粱酒あり、ワインあり、ブランドーあり、ウイスキーあり、ペパーミントありで、品種別にすれば十數種に上る。生産價額は約六千萬圓を占め、工産總額三億の中に比肩すべきものはない。

鮮産酒類の中清酒の生産量は六萬五千石内外であつて、之と内地より移入の一萬石内外と、合計七萬五千石内外(二、三千石は海外に輸出する)で以つて、鮮内在住の内地人の左黨と鮮人の上層階級の需要を賄つて居る。而して近來鮮産酒類の品質が著しく向上し内地銘醸酒に對比して何等遜色なきものが各地に生産され、京仁兩地に於て生産されるもの、如き内地物を凌駕しやうと云ふやうなものも妙しとしない。動もすれば地物だからと云つて一概に之を品隔せんとする向もなしとしない。しかし鮮産品と雖も其の上物と内地産の上物、鮮産の据物と内地産の据物とを比較したならば甲乙なく、兄弟なしと云つて宜いやうである。然るに漠然と鮮産物と内地物とを對比して、宜い悪いとの批評では兩者共に迷惑千萬であらう。

○ 鮮産清酒の品質の向上に伴ひ一般に其の需要を喚起し、生産量は

逐年著く増加して、現今の生産量は數年前に比べて殆ど倍加するに至つた。マルクスの所謂「消費がなければ生産はない」と云ふことを鮮産清酒が如實に示して居るやうだ。

○ 良い酒樽、良い酒壺に盛られてある酒だからと云つて、内在の酒が必ずしも本質的良酒だとは斷じ得ない。然るに内地ものだと云ふ其の酒銘に囚はれて、直に之を誦歌禮讚するに至つては不見識も甚しい。獨り酒のみに限つたことではない。世上之に類する事例は澤山あるやうだ。吾人は銘と傳統とに囚はれないで、各箇の本質を吟味甄別して良否善惡を判定したい。デンマルクにも「樽で酒を判断してはいけない」と云ふ方諺がある。

### ◆晚酌風聞記

漢江漁郎

○ 醫界の大先輩安東貞一郎先生は、本年七十一歳である。

○ しかし、鳥渡見たところでは四十七八に見へる。

○ 「先生、どうです」といふと「イヤもう、斯う年をとつては」といはれる。

○ 但し昨年までは、晚酌の定量四本。客があれば、限界なし。

○ 「イヤもう、斯う年をとつては」といはれる理由は、今までは四本で、物足りなかつたのが、七十一になつて、四本でホロツ……とするやうです。

○ 先生曰く、「人間四本で、ホロツとするやうぢやノウ」





のY君がセイの一族の事を書かれたので、もしやと同君にたづねた所が、同君は佛人の運送店に托し

入りました」  
○「Mさん、あなたの御子息は中耳炎か何んかをやりましたネ」

○萬事この調子。先生は、この點では神様以上ですね。

# エボの話

## 今井眞太郎

(大阪朝日支局)

僕の頭には碎米位の小さなエボがある。何んでも生れた時には根入夢のやうな細い長いものであつたらしい。技術の進歩しない十九世紀の外科手術であつたため只今でもその痕跡を止めてゐるのだと親父にきかされたことがある。

× × ×  
理髮店の兄さんが意氣な手付きでレザーの音を立てながら頭の角張つた邊を剃り下すのはカミソリ持つ人も腕の牙へをみせる得意な場面であらうし、剃られる人もバリ／＼と耳觸りのよい音をきゝながら夢うつゝに遊ぶクライマックスの瞬間である。

× × ×  
が悲しいかな、僕のその時の情態は顔面の毛細管が収縮し腹の筋肉が強直し神経系は極度に尖つて運を天に委せ觀念の臍をきめてゐる時だ。エボのために、粟粒の奴のために、その碎米が無慘や紅の血にまみれることを想像して正に心臓の血が逆に脈を打つてゐる時なのである。

× × ×  
暖かいタオルに蒸されそれから理の毛の刷毛で石鹸が塗られて泡を立てゝゐる時分、理髮師は廻轉椅子の後でレザーを磨き立てゝゐる音がする。やがてその薄いレザーの刃が僕の頭にヒヤリと當つて上から軽く撫せてエボに止る。止る瞬間ハツとする。間もなくエボ

の邊が滋味を帯びる。やられたナと思ふ……そんな事を想像する。

× × ×  
だから僕は餘程の理由が存在しない以上決して理髮店を變へたことがない。そして理髮店では小さな坊主にまで、愛憎を言ふことを忘れない……にも拘らず、店員が代つてゐる事を發見すると妙に暗い氣持になつて、その店が嫌になる。始めての店員に顔を剃られる苦痛は皆さん御想像して下さい。

× × ×  
別に實物でもないから二十世紀の醫者にかゝつて削り取つて仕舞つてはどうかと思はれるがそれが妙に愛着がありエボを切られる度に今度こそは外科の御厄介になろう——といつて會つて手術に行く決心したことがない。

× × ×  
多年の経験によると雨天の日やドンヨリ曇つた日や夕方は時に碎米をやられる。それから石鹸をつけて頭の邊を撫せ廻す時に必ず今日は切られるとか、今日は安心だとかハツキリ判る。それは石鹸をつけた細い指が頭の邊を彷徨してゐる時、エボの箇所に来て指の廻轉が運くなるとか、乃至は全く運轉が中止した時には「氣がつたいな！」と思つて心神が安らかになりその時は必ず碎米が無事の日である。

からこの邊で止めるが、餘得(り)として僕は床やさんには仲々評判がいい。だから碎米のエボを理髮店に晒すその時の覺悟を常に持つて處世を行はふかとも思つてゐるつまり世間の人を凡て床やさん並に取扱はうといふのである。  
(五、一、一三)

◆書壇風聞記  
北漢山人

○朝鮮の出した水彩畫の天才孫一峰君は、今東京美術學校で、勉強してゐる。

○最初朝鮮側の或る資本家が、學資を出してやるとのことで、喜び勇んで東上したのだが、ソレにはいろいろの條件もつき。またその人の令嬢も、現に東京で勉強してゐるといふやうなことで、孫君不満を感じ、何んでも今は、苦學してゐるとの評判だ。

○君は、京城師範では、スペテの學科につき、概してよく出來たが、二年頃までのところでは、繪など普通の出來であつた。どういふところから、アンナに繪道に全身的に打込んだか、學友さへその動機は判らぬといつてゐる。

○しかし繪に志して以來は、それこそ「天才は、努力なり」で、夜もロク／＼眠ないほどに、精進したものださうな。

○卒業した時、押入れ(寄宿舎の)に何千枚といふ書きつづしがあつた。先生も、寮友も、アツと贈を漬したといふ話がある。

○若き天才よ、幸運であつてくれ。

# 慢性醫病初期症狀

天野利武

(城大法文學部)

大して丈夫でもない癖に、なあと大丈夫々々と強がる人が世間にはある。また之とは反對に、大して弱くない癖に、何うも工合が悪くて困る困ると獨りで苦勞してゐる人もある。私は此等の中の後者に屬してゐる處の一種病的な存在であることを自分でも認めてゐる。強ひて病名を附するならば慢性醫(學)病とでもいはうか。

ことは一度もないので、精々七度五分止りである。これは助からぬと思ふ位でやつと八度五分。そこで此驗温器はあてにならぬといふことになり、別な驗温器を買つて来る。大小色々集めた中で一番水銀の昇るのを使ふ事にする。寧ろ其反對の方が正確だといふ事は承知してゐるのだが、萬一然らざる場合があつた時には取返しがつかぬと思ふ處に此病の特色がある。

といふ富山の賣藥を私がひそかに愛用してゐるのは、それが絶對に偉効を奏すると信じてゐるからではなくして、寧ろ其反對であるから、従つてまた、大して毒にもなるまいからといふ事の他に、それが如何にも藥らしい味がするからといふ事が加つてゐるのである。

## ◆鑛業風聞記

漢江漁郎

半可通の醫學的知識に自己流の註釋を加へた半ば迷信の如きものを土台として自分の體のアラ探しに憂身を費すといふ厄介な病氣で、近代文化の特色たる民衆化運動の中に醸された色々な病的副産物の一つである。もつと詳しくいへば民衆化された醫學のかげらを呑み込み過ぎて精神的中毒症狀に陥つて仕舞つたもので、やはり近代的精神病の一に他ならない。

自分が全き健康状態にある等といふことは決して有り得ない事と思つてゐる。喉か胃か腸か何處かに少し故障がなければ却つて安心出来ない位である。だから何處といつて申分のない時には、私の頼りない醫學的知識を頼りにして、何處からか故障を探し出すか、或は何處かに有るものと思ひ込むかする。弱い弱いと苦にし乍ら、體の何處かに病氣を持つてゐないと氣が済まない處が妙である。斯うして體のことを始終心配してゐながら醫者にかゝる事を好まない。

○鑛業家の中川漢氏は、誰をでも眞正面からヤツつけるので、皆閉口してゐる。  
○但し口は悪いが、感情には脆いところがあつて、殊に後輩の人などには、なかく親切。冠婚葬祭などには、ビツクリする位奮發してやる。

私などはまだ極めて初期の輕い方であるが、その自覺症狀の一斑を紹介すれば左の如きものである。始終脈搏に注意してゐる。七十以上あると少し變だぞと思ふ。時計を出して脈を測るのが面倒な時には、じつと心臓の鼓動に耳を傾ける。ドキンドキンといふ音が少し大きいと病氣だと思ふ。平常驗温はやらないが、僅かな體温の變化でも之を正確に感知することが出来ると思つてゐる。尤も實際は、確かに八度以上はあると思つても驗温の結果がその通りだつた

非常に悪いと云はれるのが恐いばかりでなく、何でもないと云はれることも少なからず自尊心を傷けるに相違ないからである。  
さういふ譯で益々婦人雜誌などに出てゐる民衆化された醫學や、色々な賣藥類に並々な興味を感ずる様になる。新聞に出る賣藥の廣告などは決して見逃すことはない。けれども『引風即効散』

○但し先輩、金持と来ると、そんな時の贈物は、一切省略。『貧乏人から貰はんでもよからう』  
○鑛山のことで、よくダメしに來る。先生始めは、黙つて聞いてゐる。ウツだと感づいたら、大喝一聲、『この大ウツつき。俺がダメせると思ふか』、永樂町中に響き渡る。……臍をツツして、椅子と一緒に、ヒツクリ返る奴もある。

○それでも、ヨソ／＼歸りかけると『オイ、これを持つて行け』  
『……』、『持つて行けといつたら、持つて行け』、『……』、『少いが、今のビツクリ料をやる』

○それでも、ヨソ／＼歸りかけると『オイ、これを持つて行け』  
『……』、『持つて行けといつたら、持つて行け』、『……』、『少いが、今のビツクリ料をやる』

る、その第一現象として氣象狀態、夏は風雨激しく冬は寒く數年に亘つて天災地變を頻發

新藥「自惚くたし」



變化でも之を正確に感知すること  
が出来ると信じてゐる。尤も實際  
は、確かに八度以上はあると思つ  
ても驗温の結果がその通りだつた

色々な賣薬類に並々ならぬ興味を  
感ずる様になる。新聞に出る賣薬  
の廣告などは決して見逃すること  
はない。けれども『引風即効散』

と『オイ、これを持て行け』  
『……』、『持つて行け』といつた  
ら、持つて行け』、『……』、『少  
いが、今のビツクリ料をやる』

# 新薬「自惚くたし」

岡村介石

(明治町小唄版)

濱口内閣は陰性大氣が産んだ自  
然の政府で、同時に介石豫言の實  
行者である。と斯う申すと甚だ失  
禮に聽へるが、私の云ふ心は、濱  
口さんが私の豫言に鑑みて、緊縮  
政策、金解禁方針を樹てられたと  
云ふのではない。緊縮政策、金解  
禁は民政黨宿年の政綱で、誰知ら  
ぬものゝない天下の金看板である  
然るに従來時非にして世上に之を  
光らす機會を得なかつたのである  
夫れが本年何故光らすことが出  
来るやうに成つたか？、政友會内  
閣が倒れたからだ、然らばその政  
友會内閣が倒れた譯は？、それは  
云ふまでもなく我黨不斷の打倒運  
動が奏功したのじやと、一概に自  
惚てはいけない。

前内閣の倒壊したのは、所謂天  
下の識者と雖も知り難い、自然の  
志に對する無理な政策を強行した  
反動作用が、同内閣自體の行詰を  
余儀なくする運命を齎した結果で  
必ずしも民政黨の打倒運動が主な  
原因とは断定できない。

假にその打倒運動が奏功したと  
しても、當時まだ其功に依つて後  
繼内閣のお鉢が、必然的に反對黨  
へ廻ることに定つてゐなかつたも  
のが、美事に民政黨へ廻つた譯は  
如何？、また御下問に奉答する元  
老の決心を、其處へ導いたものは  
何んであらう？。

兎角人間は古今東西を通じて戦  
ひに勝つたもの、難事に成功した

ものは、殆んど皆自力を過信して  
成功の理由を自力に歸納するもの  
であるが、それは人智以上の自然  
の志を知らんからなこと、若し  
宇宙がアノ偉大な自然ラヂオで、  
世界のフワフワに一々人語で事の理  
由を説明放送したら、世界の英雄  
豪傑乃至名政治家名裁判官の名譽  
人爵は、遺憾ながら多分の光輝を  
失ふであらう。

抑も事の成敗吉凶は自然の數に  
合致すると否とに由るもので、人  
間の智力は唯その成敗吉凶の原因  
と結果の中間を働く縁の作用に過  
ぎないものであるから、若し茲に  
自力以上の原因結果の理由が判明  
したら、此頃の緊縮風で一切の物  
價が下落するやうに、一般成功者  
の自惚の自己評價も自然に下落す  
るであらう。

論より證據、左に人智以上の自  
然の理由に就て最も適切な一例を  
御覽に入れる。

## 去年の賀狀(一節)

所謂時勢の變化は自然界の變化  
に内來する、科學上の發見や人  
智人力の新規發達が促進する時  
勢の變化は、恰も因の動力に對  
する縁の車に比すべき作用であ  
る。不肖の稱ふる大氣學の理法  
に依ると、本年は陽性大氣の末  
期にして陰性大氣の初期に當る  
本年八九月からこの陰陽大氣が  
自然の消長法則に順つて新陳代  
謝し、陰性大氣の所領期間とな

る、その第一現象として氣象狀  
態革り、夏は風雨激しく冬は寒  
く數年に亘つて天災地變を頻發  
する。この頗る不穩の大氣作用  
は一面海陸の生産物を損害し、  
吾人の生活を脅す代りに一面精  
神方面の變化を促進して、年來  
極度の時弊に情した人心を改心  
的に緊張させ、働かなきや喰へ  
ぬ、と云ふ眞面目な思想の根幹  
を培養助長する。隨て今後政治  
經濟其他社會の各方面に涉つて  
革新的狀況を望見することゝな  
る。この見地に於て不肖は昭和  
四年の新政を謹賀す。

以上の豫言を年賀狀として、當時  
の總督、政務總監、其他府内の各  
銀行、一般内鮮知友へ呈上した、  
然るに例年不肖の豫言に就ては相  
當共鳴の聲を聴くに不拘、當年の  
豫言に限つて懇親の間柄なる友人  
までが、一人として同感の意を表  
したもなく、殆んど怪訝な口吻  
を漏すものゝみであつたのは、當  
時積極政策をモットーとする政友  
會内閣時代で常識から考へると木  
に竹を接ぐやうな殆んど有り得べ  
からざることであるから、共鳴し  
かねたのは無理からぬ次第である  
其後現内閣出現して緊縮政策強  
行、金解禁斷行の發表を見て、始  
めて合點が參つたと告白した友人  
がある。以上の如く現内閣は陰性  
大氣の作用が産んだ自然の政府で  
黨の打倒運動は偶々自然の赴きに  
向つて知らずく善處した、幸運  
兒の大道を往くに等しいのである  
隨つて現内閣は偉大なる自然の  
大氣作用に使喚され自然の志を行  
ふ時勢の政府であるから、遠い將  
來は兎に角近年この政府の緊縮政  
策に向つて反抗的運動を爲すもの  
は悉く失敗に終るであらう。

# 献酬廢止に就て

鮫島宗也

(京城日報社)

【三六】

僕は一昨年二度この問題に就て  
雑筆誌上に書いた。これで三度目  
である。相當識者の注意は惹いた  
やうであつたが少しも實行されて  
ゐないのは遺憾である。贊成して  
ゐても永い間の習慣から脱け出づ  
ることの出来ない人間共の事であ  
るから、哀れと申すも愚かである

しかし愚かな人間共には理くつ  
ばかりでは駄目であるから、自ら  
實行して範を示して見やうかと考  
へ、昨年の忘年会で僕が幹事をつ  
とめたものには實行して見た。先  
づ盃洗を一ツも出さないこと、盃  
妓にも杯を持たせることにして、  
絶対に盃のやりとりを禁じて見た  
酒のすぎな藝妓(殊に中老組以上  
)は大に喜んだ。イツモの宴會な  
ら自分が欲しくても『お盃ち  
よらだいな』を連發する譯にも  
行かず、のどをキュー／＼鳴らし  
てゐたものが、この新式の宴會で  
はめい／＼盃があるのだから誠に  
都合がよい。御客の前を廻つては  
乾杯／＼で盛んに引懸ける。すて  
きたと大賛成だつた。中婆族の連  
中大にメイトルをあげて盛んに浮  
れ出し、座敷は馬鹿にはつんだ。  
お客の方はと見ると或る時刻迄  
はしんみよりに乾杯で済してゐた  
が、ダン／＼酒が廻り出し、聊か  
精神に異状を呈してくると、上戸  
同志は盃のやりとりも始めてゐた  
しかしこれは已を得ない、精神病  
者は法を以て罰することも取締る

ことも出来ないのだから。

我々は或る時刻迄御附合して引  
下れば宜しいと思ふ。萬一それも  
出来ない所謂不可抗力の場合——  
是非其益を受け又は返さなければ  
ならない場合——も生ずるかも知  
れないが、これは狂人對手と思つ  
て諦めることである。

こつちいふ場合を豫想して我々同  
志は宴會の最初から自分等の主義  
を會食者一同に明にして置く必要  
があるので會員章を制定してこれ  
を宴會の席上で胸に着けて居るこ  
とを始めたいと思つてゐる。

この記事は試みに見本として作  
つたのでいろ／＼の批難もあるだ  
らうが、今僕の手許に届けられて  
あるのは一個五十錢で御分ける  
ことになつてゐる。澤山の申込が  
あれば一個參拾錢で出来るそう  
である。記事はよく人の目につく  
大ききで『献酬廢止同盟會員』と  
書いてある。

宴會毎に之をつけて行つて精神  
病者どもを追ッ拂ふまじないとす  
るツモリである。

京城の紳士諸君も残らず我々の  
趣旨には御賛成であらうと存する  
第一に盃洗に洗す酒の節約と第二  
に衛生的見地から。

反對論者の中には献酬を廢して  
は日本式宴會の親しみがなくなる  
と言ふものもある。

これは愚論である、あたかも西  
洋人のように握手をしなければ友

情が表はれないと思ふのと同じで  
ある。日本人には握手をする習慣  
はなかつた。しかし親しみを表現  
する方法はイクラでもある。言葉  
とか表情とか言ふのがあるではな  
いか。握手をしないからとて日本  
人同志の友情は西洋人同志のそれ  
に比して劣ると言つたらどうであ  
らうか。西洋人は中々交際がすぎ  
である。午餐會とか晚餐會とか交  
際の季節には盛んにやる。これら  
の宴會で献酬を全くやらないから  
と言つて來賓は大に愉快に時を過  
すのは間違ない事實であつて日本  
式宴會よりも色々の點で勝れてゐ  
るとも言へるであらう。ツマリ凡  
ては習慣の問題であつて中々急速  
に改まることもあるまいが、良い  
と感じたことはお互に少しづつで  
も實行したらどんなもんですと申  
したい。

## ◆筆のしづ／＼

三木一彦

○内務局の横井技師の將棋の強  
いことは、今に巴里で、一ツ話に  
なつてゐる。

○山田新一畫伯が、巴里に着く  
と、その横井氏の友人だといふの  
で、早速歓迎將棋會。

○畫伯悠然として御出席。先づ  
一番へタなのから相手にする。と  
これはシタリ……初ッ端からコロ  
リ……と負ける。さては、道中の  
疲れかと、次ぎのとやると、また  
もコロリ……。

○忽ちお里がバレてしまふ。

○スルト一人のいふのがいふ、  
『オイ、京城にもやつぱりナツプ  
ンはあるんぢやのう』

筆

雜

城

京

上肉

成程K君如何にも下等肉、いく  
ら體面考へて呉れても貧窮以上の  
評語は上げられません。だがK君

# 上 肉

佐々木清之丞

(黃海道師範)

精神に異状を呈してくると、上戸同志は盃のやりとりも始めてゐた。しかしこれは已を得ない、精神病者は法を以て罰することも取締る

は日本式宴會の親しみがなくなると言ふものもある。これは愚論である、あたかも西洋人のように握手をしなければ友

○忽ちお里がバレてしまふ。  
○スルト一人のいふのがいふ、  
『オイ、京城にもやつぱりナツメンけあるんぢやのう』

成程K君如何にも下等肉！、いくら體面考へて呉れても貧弱以上の評語は上げられません。だがK君道の達人と見えて、懐工合は私とは全く正反對らしい。私は懐を望まず、たゞK君の細つそりした下等肉を望んだのです。

## ◆若き燕の話

北 漢 山 人

○山梨前總督の晩年を、アノ通りにしてしまつたのは、全くおろく夫人の心得違ひから來てゐるといふ評が高い。

○夫人は、權勢が好きで、山梨氏が浪入してゐると、盛んにその意氣地のないことを、責め立てたものださうな。

○夫人は、また天理教の信者でその方面へ金を出すことを、何とも思つてゐない。ムヤミに天理様へ金をバラ撒いた。

○も一ツ、いけないのは、若い燕を愛することだ。二三年前も、或る燕をつれて、たつた二人で、箱根の或るホテルで、でれ／＼してゐるところを、或新聞の寫眞班に、パチンとやられた。その種板が、或るユスリ屋の手に入り、何んでも故池上總監の東上中、『閣下斯ういふ珍ダネの、名寫眞があります』と來た。流石の大腹總監も、『ムーン、これア……』、二の句がつけず。先方のいふが種板代を拂つたといふ噂もある。  
○妙におろくさんに、頭の上らぬ陸軍大將で、普段の對話でさへ夫人が何かいふと、『ハイ々々』と、まるでお附きの、高等ボーイといつた態度ださうな……。

私は未だ増てK君を見たことはなかつたのです。しかし未見の友でも前以て數回ならず互に書信けしたので、その文字なり文章なりはた又思想なりから、K君の風貌をば大体想像がつき得たのです。頭の恰好鼻の工合顔の色差、かうした人だらうとの概念をば、私自身の勝手な構成ながら、まさか月籠の距離も無からう、ひとり極めの安神、だが、先方肝腎のK君も私に就ての豫備智識が無い、誠に困つた。若しも器量持ちだつたら一度位は節穴眼きも受けようものを……、ところが火急の場合、そんな戲嘩では間に合ひませんから大坂へ着く前、急にK君に手紙を出したのです。×日×時×分感々着きます。人相書次の通り、青切符の霧降上衣に白ズボン、上肉中背で持物は細巻洋傘黒革バツク各一。大概これならK君も見付けるだらう。安心して梅田驛に下りたが下りるが早いか、K君私を見付けて遠方から私を呼ぶ。たしかに見付けたので、呼んで見付ける計略でないらしい。私はこは全く手紙の効果と敬服感謝。しかし外交的辭令で、ヤア君早やう見付けたすつて、懇限敬服。白は人の耳目を惹きますなア、白のズボンこれが君の目標でしたらう。K君初めの程けモジ／＼、やゝしばしたつて眞面目な顔でイ、エ、先生の上肉なのにとやらかす。こゝに於て

私は日本式宴會の親しみがなくなると言ふものもある。これは愚論である、あたかも西洋人のように握手をしなければ友  
か私は喟然として歎じた。私も細つそりした中肉中丈になりたいとは過去數十年來の念願。しかしこの難答の大阪若しもそうした並大抵の體面ならK君も見逃さうものを、上肉の私それが見當の標準？すべて世の中には無用の物更に無した。自分の嫌ふところにも何かの効益がある。梅田驛では中肉よりも上肉だ。ソアラ梅田に限らず鋤機ならば萬里同風中肉よりも上肉です。人を牛馬扱にするとヘンに思つたが、しかし事實は事實です。  
K君の案内で驛から餘り遠からん小綺麗で可なり大きな旅館に着いたが、K君要件をば話さず、頻りと私の上肉を羨んでゐる。先生太つてますなア、失禮ですがと後に廻はつて私をだいて見る、しかしてハハアと驚く。風呂には入つては肺を押へる。こんな事をばうさく續ける。ヤア君止し給へ。そうおさへたりだかれては困る。運動度に適へば益々太るじやないか、太り過ぎては本尊が困る。K君今度は長太息して恨めしうに言ふ。有無を通するこれ商業の本旨、公平なるべきがこれ神の道、先生の要らん所は私がこれを欲する、私け先生とは全く正反對で上肉ならんの所願です。しかしこのためには過去數十年間の苦心、たゞ／＼細るだけです。始めてK君の體面に氣が付き一瞥を下げば

# 支那水仙

## 名越湖風

(城大豫科)

玻璃窓に西日をうけてあたたかに 支那水仙のきよき青き芽

水仙の緑葉みればあらたなる わかき命のこもらく思ふも

年のくれ水仙の鉢と鹽鮭と わが支那にとどけられけり

すく／＼とならび立ちたる水仙の 緑葉みればをこころのゆく

水仙の鉢前にして新年の 日記書きそむ螺鈿の机

初春ののぞみはわかし水仙の きよきに似たるわかこころかな

手絲編むにひまを惜めるわが妻の 水仙の水はわすれざりしを

火なき部屋にをきわすれたる水仙の わがあやまちにこほりかれぬる

あたためつ水やりたればこほりたる 支那水仙のあはれに咲きぬ

あはれなる支那水仙の白い花 やめる乙女ににてもとびしき

凍傷のすがたいたまし水仙の 小さな花のあめるもあはれ

はらからは皆殺されて後宮に 泣ける妃か支那水仙の花

望月寺の秋

としよりの額の皺を見るごとき おいほれ岩をなでてわが過ぐ

獅子潭に顔をあらひてうち仰ぐ 獅子岩のあごに日のかげろへり

袁世凱の額かけし寺のうしろなる 高嶺の紅葉あか／＼とてる

崖上の法輪の塔ゆ紅葉せる 山すそはるか河原白うみゆ

姫路白鷺城

黄葉せる森のうへなる朝雲に ほの／＼ひかる白鷺の城

鷺あまたなきさわぎみる老松の 梢見おろす天主閣かな

白鷺の城にのほれば秋はれの 播磨の海のちかくかどやく

なまぐさき陰惨の氣にうたれつゝ腹切丸の土間の土ふむ

風さむく空はくもりて南山の 松かげあはく日はしづむなり

冬枯のバゴタ公園さびたれど 塔にはほふ春の日のかげ

清涼里にて

ざら／＼と北漢山の雪ひかる 枯木林にかちがらすなく

# 金儲けとローゼニズム

四ヶ月後に突然死亡し、その遺族から大層御禮を云はれた覚えがある。この道のみけ別して至難だと



あはれなる支那水仙の白い花  
にこころもびしき

ちがらすなく

# 金儲けとローゼニズム

岩田運三郎

(セール商會京城支店)

今、東都の某新聞の經濟部長を勤めてゐる知人が、先頃何んとか云ふ雜誌に、面白い金儲け仕事に保險の勧誘云々と説いてゐた。それを見た或人が、どうも迂な話だね保險勧誘が有利だなんて以つての外さ、この人等は保險の實際を知らない人だ、素人が外から想像する様なナマヤさしいものじやないんだと、浮世の辛酸を甜め盡した様な五十面の諸顔をイキリ立てゝゐた。

成程京城では左程でもないが、内地に於ける保險募集の實狀はなかく辛酷である、一度勧誘を受けて生温い挨拶でもしようものなら、根強い勧誘は續けられ、全く閉口させられる事がある。さればヒドイ處では保險勧誘員入るべからずと立札を出して居る家がある位である。實際當節は、この位行かねば成績は上がらぬさうであるが、如何に業界が行詰り競争が劇甚であるかは、想像出來得る。従つて前述の五十面先生のように、悲觀的な弱音も出るのである。が、彼も畢竟生存競争の敗北者なのである、何んとなれば、難しいと稱せられる保險で、巨萬の富を積み成功の凱歌を擧げつゝあるものは點々と見出されるからである。

小生曾て保險に關する著述に著目して東都の保險會社巡りをやつた事がある。其時或大生命保險會社の重役は、私など收入の點では

募集に従事して居る社員に敵ひません、某君なぞ大したものです。と謂つて居たが、當時既に百萬以上の産を成し、現に同社北海道支部で活動を續けて居るさうである。ずつと以前物故した、某外國會社の神戸支部長の如き遺産數十萬、未回収の立替へ保險料三四萬あつたさうである。

斯る話は各社に相當あるらしいが、こゝに一つ實例を米國にとると紐育生命保險のローゼン氏は一外交員に過ぎないが、數名の事務員を使い、毎月百萬ドル以上の仕事を纏めるのは、左程難儀でないさうである。同氏はローゼニズムなる小冊子を配付してゐるが、その中に「予は同じ人を二度以上絶体訪問せぬ、二度の會見に先方を説き伏せねば、正しく失敗であり追拂ふための申譯契約は眞平御免」「人の望まぬものを無理に買はしめぬ、その代物の必要を覺らしめる」などと説いてゐる。如何に眞剣味を發露してゐるか、窺はれると共に、所謂生活苦のために外交をやり、成績のみに焦るといつた人々にとりては良い戒めではないかと思ふ。

小生は勧誘の仕事は別にやらぬが、或時頼まれて、關西の某瓦斯會社の工場で晝食の時間を利用して、その従業員に保險の説明をやつた處が、數人の希望者が現れた而して二千圓許り契約した人は三

四ヶ月後に突然死亡し、その遺産から大層御禮を云はれた覚えがある。この道のみけ別して至難だとされてゐる保險の募集も、ローゼニズムを以てすれば案外容易なのかも知れぬ。さすれば、其の邊に日々新聞紙上に、幾多保險勧誘員募集の廣告が目につくが、金儲けの道が澤山目前にブラ下つてる事になる理である。失職に青息吐息の連中、唾手一番、運命開拓を試みるまた面白いではないか。

## ◆廊下風聞記

三木一彦

○大學病院では、至つてブツキラ棒のやうで、その實親切なのは小川善先生(外科)ださうな。

○『先生が一番人間味がある』と或る患者が大に禮讚してゐた。

○松井博士(外科)は、とても勉強家で、本を讀むさうだ。

○廣田博士(皮膚科)は、その有名な日本的の俳句も、長い間中止!。何をやつてるかといふと、妙心寺で座禪!

○小林靜雄博士(耳鼻科)は、毎日唾の患者とサシ向ひ。『アー』『アー』『オー』『オー』……『先生、それは何んですな』『今に見給へ、この患者に、放送局から大演説をさせるから』『大事業!、何年かゝります』『何、百年を要せんよ』

○世界的醫家岩井博士(内科)兩三年來麻雀にうき身を賣してゐる。麻雀必勝理論を起稿したい自信はあるが、いかんせん實際の勝負の上では、『君、思ふに任せんことが多くてナー』

# 巴 畫室の思出

山 田 新 一

(洋 畫 家)

【 110 】

だが夏は各畫室の入口に、ダリヤが叢咲いてゐるのだ。  
荒れ果てた畫室の鐵扉に迄亂れ咲くダリヤの花に、じつと郷愁を覚え乍ら、私の煙突が、天の青空に迄もと紫の煙をたなびかせる。實に幸福である。

だが或時 それも不可能だった  
朝眼の醒めた、枕許の小卓の上  
に、五仙の穴明き白銅が悄然と  
光つて居る。

僕も一度眼を閉ぢた。  
もう金を貸してくれるような友  
人の名前などは頭に浮んで来ない  
最小のパン(四分一斤)が三十  
仙であること。牛乳は四分一リッ  
トル(五十仙)以上でなくては賣  
らないこと……等々。

そして吾が哀れなる、五仙白銅  
の一枚が巴里に於ける何物をも買  
ふに値しない、小粒な、名ばかり  
の貨幣であつた。

人間、動くとお腹が減る。  
僕は寝てゐた。斷然、寢臺から  
動かうとしなかつた。

そして時々うつらうつらと眼を醒  
ましては、小卓の上の五仙を見る  
のだった。

別にこの通用しない憐れな小錢  
が憎くは思はなかつたし、怨めし  
くもなかつた。唯何となく眼が開  
くとそれを見るだけの事だつた。  
そのうちに、畫室の光線窓も眞  
黒になつて了つひ、夜になつたのだ  
らう、七時か、八時?

『ユン／＼／＼』扉を叩く音  
『お入り!!』  
女!!! 美人!!!

れど、

卓の上の五仙をじつと見てゐる  
と、遠い故郷の妻子が、矢張り同じ  
やうな、林しやうき(まはら)……

## 1、煙 突

門番のマルグリット婆さんが  
僕のことを『煙突』と尊稱した。  
有難いことであつた。  
然るに、僕の體格は煙突どころ  
か丸太棒に彫刻した豚のやうなも  
のだ。

それじゃ、婆さんは何故、僕を  
煙突と稱したかと云へば、もつと  
適切な風景寫實からなのである。  
即ち僕の畫室の煙突から、煙の  
揚がらない日はあつても、僕の鼻  
の穴から煙のたなびかない五分間  
が見出し難いからなのである。

巴里一ヶ年八ヶ月の畫室生活の  
うちの大部分、一ヶ年三ヶ月を、  
リユー、ダゲール十一番で、過し  
て了つた。

そして黄色い紙製のシガレット  
マリランは、僕の畫室を燻すばか  
りでなく、畫室中到處を灰皿た  
らしめ、洋服は勿論、日本から持  
つて行つた、浴衣やどてらの裾に  
至るまで、名譽の焼こがし貫通傷  
を負はざるならしめて了つた。

或朝、婆さんに叩き起された。  
そして七十三年を、やかましや  
門番で通して来た、マルグリッ  
ト婆さんが、しみじみと、やさし  
く僕を説教するのである。

『お前は此頃毎晩、夜中にセキ  
をする、若し煙草をやめないと、  
きつと、大病に襲はれるにきまつ

てる……』

『煙草を完全にやめるなら、勳  
章としてシヨコラを一箱進呈する  
……』

まるで三才の小兒をだますやう  
な、眞實の老婆心に、其時ばかり  
は、僕も煙草をやめやうかと、隨  
分心を動かした。

けれど、煙突は煙突の使命を一  
層紫に吹き流すばかりであつた。  
しばらくぶりで、家庭や子供を  
離れての、書室生活、殊に世界の  
大家天才雲の如き巴里の一角に極  
東の豚兒が、畫架を据えた以上……  
……萬一徒らに焦慮したのでは、何  
が出来るか?

先づ、我々は煙突となつて、徐  
ろに我々の過去を宛め、然して將  
來を考へなければならぬ。

思ふやうに運ばない畫面を眺め  
て、ふかす一本のマリランは時に  
思ひがけない良案を與へてくれる  
況してや光線窓の幕を終日閉ちて  
畫室中の思案に餘つて暮す時など、  
僕は僕の煙突たる事によつて、再  
び生きる勇氣を求めるのだった。

## 2、踊子と白銅

製作に疲れて、一本のシガレッ  
ト、マリランをくわへたまふ、畫  
室の外へ出る。

十一番リユー、ダゲールは既舎  
と人呼べるが如く九戸の小さな畫  
室がつましくも地上に居並んで  
ゐるのだ。

彼女の眼は微笑みました。

『ヤマダ、腹刺しだね!!』

『うん……』

『財布の腹刺しでせう!!』

く僕を説教するのである。  
「お前は此頃毎晩、夜中にセキをする、若し煙草をやめないと、きつと、大病に襲はれるにきまつ

と人呼べるが如く九戸の小さな畫室がつくましくも地上に居並んでゐるのだ。

「コン／＼」扉を叩く音  
「お入り!!」  
女III 美人!!!

扉が明くと同時に、得も云はれぬ香水の匂が、フンと鼻をつくのである。

それもその筈、モンマルトルの彌子ロゼットの御入来である——  
讀者方よ、此處でみなさんが早速氣を廻して一場の戀愛場面を想像されたのでは此の、世にも誠實なる一片の美談は臺なしです。僕を信じて下さい。彼女は、僕の彼女ではないのです、斷じて違ひます何となれば、彼女の良い人は即ち僕の友人S君ですから。——

『どうしのヤマダ!!病氣...?』

『然り、病氣』

『お腹悪くした?』

『然ら...』

『可愛さうに...』

さうして彼女は私の寢臺に近づき私に手を與えた後、手袋を脱ぎ乍らフト小卓の上の五仙を見ました

彼女の眼は微笑みました。

『ヤマダ、腹納しだね!!』

『うん...』

『財布の腹納しでせう!!』

『うん...』

『一寸お待ちね...』

そこで彼女は脱ぎかけた手袋をまた、はめ直し、欣然と戸外へ出て行きました。

それから...僕の小卓上に並べられたものは...ペン、牛乳、卵、乾酪等々...。

だが食欲が満足させられた時に僕は思はずつとやきました。

『煙草が欲しいな...』と。

彼女は亦欣んで出て行きました。やがて、僕は、僕の煙突から紫の煙を立昇らせ乍ら、ふと卓の上の五仙白銅にも一度眼を映しました。其時異國娘の機智と、同情が、僕の心を美しくとらへてはゐたけ

れど、  
卓の上の五仙をじつと見てゐると、遠い故郷の妻子が、矢張り同じやうな、淋しさを味はつてゐるのではないかと思はれて...

こみあげて来る郷愁をどうすることも出来なかつた。

3. ママンジャン

アマンジャンは七十三才の老癩をいとふこともなく、月に三度位は僕の畫室を見舞つてくれるのだつた。

サロンチユイレリーの副會長で佛蘭西派の巨匠のアマンジャンではあるけれど、僕に取つては繪の方の先生であると同時に、煙突の方の大先生であつた。

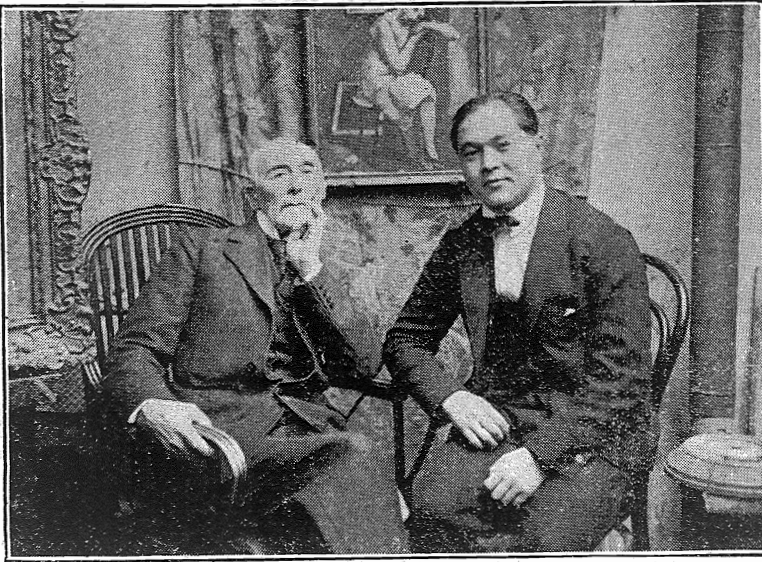
先生の畫室で灰皿がないのでまご／＼することがあると、先生はいつも、  
『何處でも...』と云つた。

一年に二回しか掃除をさせないと云ふ先生の畫室は云ふ通りの『ナンポトケル(何處でも)』であつた。

『暖爐の周圍、安樂椅子の脚の下到る處煙草の吹殻で埋まつてゐた

さて煙突の講釋も大分退屈になつて来たから、此長頸鶴の如き老煙突先生と、丸太棒の弟子煙突との珍なる師弟の屈出に及びませう  
去年の一月でした、ニースの寫生旅行から歸つて来た、僕の畫室をアマンジャンが訪ねて来た。

先生の巴里畫室と、僕の畫室はほんの五六丁しか離れてゐないので、先生は、何時も畫室の仕事に疲れた時、繪の具だらけの仕事服のまま、僕の畫室を訪れるのが習慣だつた。



右山田新一畫伯左佛國畫壇巨匠アマジン氏  
七十九・九二・一八八〇年巴里山田畫室



處で其日に限つて、先生は、いつも畫室で巻いてゐる、首巻ではなくて、淡桃色の絹の首巻をしてゐるのです。

七十三歳の、白髪の老人に淡紅色の首巻は、却つて、いやみと云ふことは毛頭感じさせなかつたけれど、いつもの茶色の毛糸の襟巻とは全然、感じが違ふので、どうも變であつた。

だが、當人はすましたもので、

愛用のパイプで大いに煙突振を發揮しながら、僕の新しい作品に批評を試みるのだつた。

だがやつぱり氣になるので、先生のお歸りを見送る時に、思切つて聞いて見た。

『先生、今日は素敵な首巻ですね……』

『何、首巻!!、あゝこれか……實は今日出掛ける時に、いつもの首巻を家中探したんだけれ共見當

らず、丁度家人も留守だつたので手當り次第と云ふわけだね……リヌ(お嬢さん)の下着……』と外套の下からつまみ出して見せるのを見れば、成程、レースのハリの取つてある女のシニミーズである。

私は黒檀の杖をコツ／＼とついて、歸つて行く老師を見送つてからひとり密に微笑む事を禁じ得なかつた。(一九三〇、一、二二)

# 贅六の辯

濱口良光

(敬新學校)

落語に入さんが似非物しりに色々の語原を聞く處があるが、それ

『ではらなきとはどうして云ひますかね』ときくと、

『うんあれかあれはその……つまり何だね……いつか鞆がないたことがあるのだ。それからうなきと名けたのだ』

『へえ昔は鞆でもなきましたかね』、なんてこんなのは語原の探案にも罪がない。

徒然草にはある僧正がある僧の顔を見てしつらうりと云ふ名をつけた。處がこのしつらうりが誰にもわからない。そこで『とは何ものぞ』と尋ねた。すると僧正『われもさるもの知らずもしあらましかばこの僧の顔に似てむ』と人に頭をひねらせた擧句涼しい顔をしてから答へてゐる。この僧正

直にわれもさるもの知らずと云つておいてくれたからいゝがもし云つてなかつたら、後の學者のせんさくの種となつてうなき流に解纏されたかも知れない。

處で四五年前大阪驛を夜汽車で通過した時のこと、隣のある男、その隣の友人に向つて云ふ。

『一體贅六つて何のことだ』するときかれた男、

『あれかあれは中々むつかしい御々關東に小僧と云ひ關西に丁稚と云ふ皆今云ふ小店員だ。丁稚と云ふは丁兒のことならんと云ふがそれはどうでもいい。何れの時代にも階級の低いものは人前でそれを呼ばれることをきらふ。丁稚だつて人前——ことに遊びに行つた時なんか丁稚々々と呼ばれるのは心よくない。そこでこれに隠し言葉が出来た。これがさいりくなん

だ。しかしこれはよくつけた隠し名だと思ふよ。何故ならば。君はあのばくちの賽の目を知つてゐるだらう。あの賽は一の裏は六ときまつたものだ。そこででつちこれを延音にして出る「ろ」ろとして出る。一の裏の賽は六だから賽一六、どらだ。うまい隠し名だらう。この賽六が久しうしてだらしない發音にかはつたものがせいろくなんだこのさいりくがせいろくと變つてゆく處に上方人の氣持があるんだ。恰度江戸人がべらぼうめいをべらぬめに變へてゆくやうな氣持だ。な。こんな言葉の變化にも江戸人と上方人の性質の相違がよくあらはれてゐる』

『なるほどなあ。それぢやそのべらぼうめにけどんな語原があるんだい』

『そいつはわけがないよ。べらぼうとは籠の棒の意義、籠は飯をつぶしてそつくひを作る。つまり穀つぶしの意味なんだ』

『はい……』

聞いた男は感心したやうな感心しないやうな返事。僕も心の中で二人は大垣で下りてしまつた。今でも時々贅六の辯と云ふなどの辯とを奇妙に一緒に思出す事がある。



しかばこの僧の顔に似てむ』と人  
に頭をひねらせた擧句涼しい顔を  
してかう答へてゐる。この僧正

時なんか丁稚々々と呼ばれるのは  
心よくない。そこでこれに隠し言  
葉が出来た。これがさいろくなん

二人は大垣で下りてしまつた。今  
でも時々警六の辯とうなぎの辯と  
を奇妙に一緒に思出す事がある。

ふぐ料理

お座敷金婦羅

川 長

旭町一丁目

茶いろいろ  
茶器いろいろ

**青々園茶舗**

京城本町二丁目  
(電話本局二二二番)

外科 皮膚科

**瀬戸醫院**

院長 瀬戸 潔

京城旭町二ノ八  
電話本局二四九八番

内科 小兒科

**中島病院**

明治町二ノ七七  
(電話本局三七八番)

お二人で一つの保険に  
はいれる然も保険料は二人保険  
普通の一人分餘ですむ

**東洋生命京城支店**

一萬圓契約で八千五百  
圓の現金定期配當の外  
不老保險に普通配當がつきます

M式巻上日覆  
ホロ形日覆  
各種テント  
諸車用雨覆  
非常用袋  
フットン袋  
其他帆布製品  
製作販賣

京城 西中  
前 會商ト  
八四八二本電

京城永樂町二

**西井清久病完**

金物類

**金物類**

一萬圓契約で八千五百圓の現金定期預當の外、不老保険に普通配當がつきます

其他帆布製品  
製作販賣  
前  
會  
八

京城永樂町二

酒井婦人病院

院長 酒井一郎

(電話本局一八番)

金物類

近藤商店

京城本町三ノ三三

電話本局三五六二番

内科  
小兒科

木村醫院

院長 木村文三郎

京城府吉野町九一

(電話本局七二五番)

京城本町二丁目

一番瀨醫院

院長 一番瀨慶次郎

(電話本局四〇〇五番)

明治町二ノ七五

利根川齒科

院長 利根川清治郎

(電話本局二八六七番)

# 或る夜の歌

今村 鞆

(南米倉町)

マツチ溜れば燃へ盡くる時微かなる音のす  
るなり耳に澄む音

酔しれて唯譚もなくあばれ居る小者はいと  
し羨しくもある

唯居るを何か濟まぬと考へてあてども無し  
に今日も家出る

玄關に聲あり見れば乞食なり人相のよし錢  
一つやる

歳古りて力の失せし爆弾を我むくるなりと  
思ふことあり

窓凍てる冬の厨は寒からめ敷板動く足音聞  
こゆ

鏡見て我かんばせの拙なさに今日は人訪ふ  
ことを止めにき

世渡りの巧みなりてふ人見れば尾を振れる  
人牙バむける人

黙想は怠惰に似しと考へて手拭擽けて鏡湯  
に行く

古への聖り人等が言の葉のどこかにブルの  
匂ひありけり

今日會ひし世盛り人が敬遠の顔まさくと  
想ひ浮びき

【三六】

蜘蛛の團に疣を巻切る如くして傾巢てふも  
の取らまほしと思ふ

蠻人の穂槍に似たる大つらゝ石の館に垂れ  
並び居る

詐りは身を衛るへき楯なりと覺り覺りて世  
をばはかなむ

盆裁に水を絶やして枯らし居て何とも思は  
ぬ人を憎みき

煉炭の値など考へくべ半ら猶凍へざる身の  
幸思ふ

指尖の小さな傷に砂が入り痛むが如き世相  
なる哉

現し世は罪災ひの世なること萬古漱らずの  
ろはずにあれ

つまづきし人を喜ぶ心もてひとやのおとと  
そしるあさまし

獨り居れば鍼瓶の音たぎるなり無心になれ  
ば快きかな

斯くするが可しとて妻の言ひしこと卑近な  
れども理りのある

手は空し空し此の手に力籠め握り合はする  
鷲き手なきか

雪の日に巫女棲む家を眼へば狐に似たる犬  
出で、吠へぬ

勵めども家風に合はぬ婢にも似し永樂町人  
が社會奉仕よ



今日會ひし世盛り人が敬遠の顔まさくと  
想ひ浮びき

勵めども家風に合はぬ婢にも似し永樂町人  
が社會奉仕よ

# 拳骨の遣り場

## 浦田多喜人

(三巴酒造合名)

一、産業合理化と云ふ言葉が新し  
き言葉のよふに思ふ人もあるま  
いに新らしく云ふのは言葉の新  
らしきにあらずして言ふ人の新  
らしきなり。故きを温ねて新ら  
しきを知るなるべし。昔より働  
かなければ食ふ事の出来ぬ國民  
がブルジョアの悪風に感服して  
働かないでブルジョアの眞似を  
する氣になるから貧乏になる。

ブルジョアを悪むべきか、働か  
ぬ國民を惡むべきか。拳骨の遣  
り場に困る。産業合理化は今も  
昔も變らぬ。働けや國民諸君。  
一、學校に行き學問するのは役人  
になる爲めならず、自分の人格

に肥料を與へると同様なり、農  
科大學を卒業して肥桶を擔ぐも  
皆産業合理化の智識なり。此頃  
の學生のストライキは馬鹿の骨  
頂なり、拳骨一つ食はして遣り  
たし。

一、先頃友人の新年宴會に招待せ  
られ出席したるところ宴席に  
侍したる藝者が紙治か何か唄い  
たり。目出度宴席にて心中する  
唄などシヤクに障り藝者に拳骨  
一つ喰したり。イカニ藝術とは  
云ひながら目出度席にて心中咄  
常盤津の明けからず、いざよい  
心中などシヤクに障り鐵拳をグ  
ワンと喰はしたくなる。

### ◆番茶の匂ひ

三木一彦

○辭銀の東京駐在理事色部さん  
は、將棋の研究家であり、同時に  
奇想天外的な十七字詩を、即席的  
に連發するので有名である。

○丁度客臘入城中、色部さんは  
一夕棋筵を設け、同行幹部を招待  
したが、その席上での即興

加藤總裁  
何のこと勝たうくで負けるな  
り

木本監事  
あがつた氣元の儘なら違つた氣  
古田氏  
十口、口口口口、口で勝つ

松田理事

王手飛車待つたくはヨシなは  
れ

河口兩氏  
兩側で口と口とが指して居り

近藤氏  
こんどこそ勝つて見せるはい、  
元氣

長谷井氏  
長驅して敵地馳せ入る槍の功

○但しその色部さんも、當夜長  
谷井氏には、コロリと負ける。オ  
ーヤ……勝つたものも茫然。負け  
たものも茫然……。

○大晦日の夜のラヂオで、淺草  
寺の百八の鐘が聞へ、次いで東天  
紅の、いさましい鶏鳴が聞へる。

一、昨年十一月二日、十二月十  
七日、四月三十日の三回友人の  
不幸に葬儀委員長を務め、年末  
にやれやれと思ひしに一月元日  
に店員の死亡、友人の母の死亡  
友人の宅を訪問すれば葬儀掛り  
の役割に又も委員長との張出し  
怒るに怒られず、拳骨の遣り場  
に困り、苦笑して正月早々四日  
と七日に葬儀委員長を務めまし  
た。依て年末年始の欠禮をお詫  
び致します。

一、苦しい時の神頼み、借る時の  
佛顔、惠方詣に出入の多きなど  
借金は返さぬ貰取網、酒代も拂  
はず、家賃は高いと標準もなし  
にヌカシ上る。急がぬ人が自動  
車に乗り、急ぐ下役人がテクル  
線香代には車賃も加へ拂ふ御客  
がテク／＼歩む。どうしてこん  
なに世の中がシヤクに障るのだら  
う。誰かに鐵拳食はして遣りた  
い。

スルト鶏小屋の先生、さ、しつた  
りとこれも高々と鳴き出す。

○高橋草之助氏、『これア實に  
愉快!』と、左の新作をものす。

東都に住みし幾歳に  
聴きしことなき淺草の  
百八煩惱消滅の  
除夜の鐘こそ珍らしき  
今京城のラヂオにて  
昭和四年の大晦日  
これを聴くこそいみぢけれ  
向その他に新記録  
鐘と共にぞ傳へくる  
東天紅の鶏鳴に  
まことの鶏と思ひしか  
鶏舎の鶏の相和して  
鳴き立つるこそ面白き  
昭和四年の大晦日  
昭和五年の元旦と  
これぞまことの去年今年

# 或る死體の話

池部 義雄

(李 王 職 醫 寮)

【三八】

遇した事は、恐らくこれが空前にして絶後だらふと思はれます。

私は直覺したる先入観から、斷然他殺と自信して居ますが、片鱗の的證もないといふのに、涙のにじむ程悶へましたが、斯る事件に直面しては如何なる大家と雖も、一

必らずや迷はざるゝ事と思ひますソレは一人斃すのに無傷にして殺すといふ事は、殆んど不合理であり又不可能であるからであります。連行の警部は三本目の煙草も吸ひ捨て、

「疑ひはないでせふ、引き上げませふや」

と促し、來合はせて居つた〇〇の主人公も

「モウ屍體を引取つてよふ御座いますか」

と催促します。薄身寒風を浴びて双手をポケットにつき込み乍ら默然と思考して居つた私は

「マア一寸待つて下さい」

と、兩人に答へて、最後に「今一度」と、百万苦心して檢案しました結果、辛ふじて一つの確證を發見しました。ソコで私は

「これは他殺です」

と、凜然として言ひ放ちました處

兩人は、これ又最大限の驚異の目を見張つて、殊に主人公の如きは

「他殺！、ソナナ事はありませんまい、他殺と云へば、他より怨みを買ふ様な事があるか、懷中にカネでもあつて強盜にやられたか、此二つでせふが、當人は品行方正忠實と云ふ點で、昨年

も本年も模範店員として表彰されて居ます。又財布は昨夜自宅

に置いたまゝで一錢も持つては居らない筈です。他殺なんてそんな馬鹿な事があるものですか

現に昨日も二三回家の内で眩暈

「ホ、ウ、シテ何にか變死的著症でもありますか」

「イ、エ、何んにもない様です主人の話では一週間前から腦病とかで總督府醫院に受療されて居たとの事で、現に昨朝の如きも眩暈がして階段よりころげたといい話です」

「さふですか、では病死ですか」

「勿論當方でもソナナ考です」

ヤレ／＼助かつた、それ程歴然たる既往があれば検視も易々たるものだと、聲もやゝ遅緩して來た私はT君と連行しつゝ、人生も節季位緊張すると能率は倍加します

ネとか、正月の様に終始サボつたら、忽ち滅亡するであらふとか雜談を交はしつゝ、雪の如き朝霜に

けふの初一步を地上に印しつゝ、現場に來て屍體を見した時、倏忽として第二の聲を餘儀なくされました。と云ひますのは、屍體の位置が、ナント云つても、病死者とは受けとれぬからであります。

ソコで私は、先づ其周圍、次で着衣、最後に軀幹と方式通り順序を追つて檢査しましたが、一點の變異……針で刺した程の傷も、悲しい哉見出す事が出来ません。コウ

なると私の聲は相親の變はる程最大限となつて來ました。内地で

以來多年警察に關係して居りました以上、相當澤山ナ屍體檢案も試みましたが、當面の如き問題に遭

憐憫みたやふナ、失敗みたやふナ事件で、筆にすることは進みませぬが、稿材冬枯れの今日、責盡きのお詫びまでです。

ソレは併合の事業も大した波紋もなく完行された年の十二月で、

しかも中旬過ぎとなりますと、いよく一歳の縮圖は眼前に擱げられて、世相は日を追ふて多角形となり 所謂猫の手も借りたといふ暮れの一日でした。曉まではまだ一睡と思ふ頃、隣室の電鈴がけたましく薄闇の空氣を振動させます。

「〇〇さんですか、コチラは△△警察です。只今相生町に内地人の屍體がありますから、直ぐ臨檢して下さい」

事實を告白すると、同じ屍體でも鮮人なれば時節病大部分は凍死位で簡單に鼻がついたもので、もし又爾餘の變死にしろ内地人に比すればソコに緩急のあつたものですから然るに今内地人といふ電告に接した自分は先づこれが聲の皮切りです。

まだ明けやらぬ街は死の如く沈黙して殘燈囁く道を走らせ、やがて〇〇署のストープに嚙りついた私は、宿直のT警部に向ひ、

「君、一體屍體はどんな状態ですか」

「屍體ですか、ナンデも北米倉町の〇〇といふ家の店員たさふで、廿五六の屈強の若者です」

して倒れた事があるんですもの

ナンと云つても病氣に違ひありません」

「僕は幾年間此商賣はして居るが、觸れねば素痕が判らぬ様ナ事で殺人の目的を達したといふ

力家でせふネ」と追及する。

「ナニ少し柔道を心得たものは

町の〇〇といふ家の店員ださふで、廿五六の屈強の若者です」

た以上、相當澤山ナ屍體検案も試みましたが、當面の如き問題に遭

んな馬鹿な事があるものですか現に昨日も二三回家の内で眩暈

して倒れた事があるんですものナンと云つても病氣に違ひありません」

「僕は幾年間此商賣はして居るが、觸れねば案痕が判らぬ様ナ事で殺人の目的を通したといふやふな事を聞いた事がない」

と追及する。「ナニ少し柔道を心得たものは譯はないです」

と、私の苦心も「馬鹿げた」に葬つてしまはふとする。又連行のT君も

「ナニ他殺ナもんか、立派ナ病死だよ。癩痕があるナンテ醫者の神經だよ」

と逃げる。此窮地に於ける此窮詰『柔道』の二字こそ抑も天網を織る經緯の糸となり……腰間の捕繩となつたのであります。げにや天は微妙ナ處で人を以て言はしむるものと、今日迄も感心して居ります。

『どの點でソナナに認められるのですか、他殺とは少し……』

「これ程の大男が殺されるには相當騒いだものだらふ。オイ、S巡查、此近所で尋ねて見玉へ昨夜コノ邊で異常な騒音を聞いたかどふか」

一應の審問が了へた後判公は、『解剖の必要はありませんか』との事、左なきだに先刻から斷續性の冷笑を浴び、蔑視の標的となり、恥かしいやら賴ナやらで、潮時を狙つて居るんですもの、此上引ッばられては堪へられぬと考へましたから、

『直ちに本署に報告して下さい一切は其上説明しますから』

「この家でも知らぬと申します。別けて某家の如きは終夜看病に起きて居つたが何事も耳にせぬと申します」

『更に其要は認めませぬ』と毒血的の強さです。『それでは至急鑑定書を添附して下さい』

やがて商人風や労働者風などをした多數の探偵を伴ひ、署長や警部、次で總監部よりも四星の兩班最後に書記を随へた判官と、關係員の頭数は揃ひました。

「聞かれる通りですが、ソレでは少し辻褃が合ぬ様に思はれるが、此點はどんな意見ですか」と、眞正面から切り込んで来ました。誠に合理的ナ尋問で、私としては抜き差しならぬ苦しさです。然し人間といふものは窮地まで追ひこめられると兎角桀狗の勇を起すもので、背には冷汗三斗を浴び乍ら、極めて涼しい顔で

『君、けふ屍体を検案したか』

やがて判官は一同を見廻した後『では鑑定上の説明を承りませう』

「ソレは私がいよく鑑定に要つた最後、示指に唾をつけて屍體の頸部を輪狀に觸れた處、だぶくしたる襯衣なるに拘はらず、絲目の癩痕を、皮膚面上に明に觸知し得るではありませんか、デ私はこれを絞殺と鑑定しますと申告したのです。處が多くの探偵連中は、

『アン、實に弱はらせられたよ不可解千萬の奴でネ。然し君はどこで聞いたか』

と極めて丁寧であります。私も頗る謹嚴に周圍の状況や、屍體の位置に就いての考察を、縷々陳述した後、斷案の主因たる左の證據を力説しました。

「ソレは私がいよく鑑定に要つた最後、示指に唾をつけて屍體の頸部を輪狀に觸れた處、だぶくしたる襯衣なるに拘はらず、絲目の癩痕を、皮膚面上に明に觸知し得るではありませんか、デ私はこれを絞殺と鑑定しますと申告したのです。處が多くの探偵連中は、

『アレが午後總督府病院に送つて来たよ。解剖して呉れつて』

と極めて丁寧であります。私も頗る謹嚴に周圍の状況や、屍體の位置に就いての考察を、縷々陳述した後、斷案の主因たる左の證據を力説しました。

「ソレが午後總督府病院に送つて来たよ。解剖して呉れつて」

『さふか、して結果はどふだつたのか』

と極めて丁寧であります。私も頗る謹嚴に周圍の状況や、屍體の位置に就いての考察を、縷々陳述した後、斷案の主因たる左の證據を力説しました。

「ソレが午後總督府病院に送つて来たよ。解剖して呉れつて」

『さふよ、どの點から見ても病死と認める處は露程もない。が解剖の結果歴然たる反證が上つ



たと云へば是非がない』

これは當日の夕べ總督府醫院勤務の友人が來訪しての會談です。嗚呼ナンテ呪はしき一日だらふ。コソナ時は夢にして消すに限ると、早々褥中にもぐり込みました。夜警の折疊が三四回の頃又例の電鈴がチリンです。妻の取次ぐ處では、××署から下刺者があるから直ぐ來い、とのこと。一睡して聊か溜飲の治つた際、又た今の電告で逆戻りの不機嫌で、罪もない妻子に入つ當りしつゝ、マント眞深かに、誤診の不面目を包みて泥棒の如く足音をしのばせて宿直室に廻り、K警部に

『今晚は……』

の挨拶も病み疲かれの細聲です。『オ、之は御苦勞です。ナニ大した病人でもありませんが』とのこと、それ程なら此眞夜中に呼ばねばイ、と、口まで出かけましたが、敗將のいま其の勇氣も出ません。

『ア、さふですか』

『すぐ御案内しますが、マア少しお温まりなさい。時に今朝は御苦勞をかけました』

まだ蒸さるゝかと思へば身を切らるゝ様で、

『イヤどうしまして』

といよく晩秋の蚊の滅入る聲です。

『速かに犯人のあがつたのも貴下のお蔭だと署員一同感謝してして居ます』

『ナニ犯人が捕りましたつて』俄然蘇生しました私は、マントの袖がストーブで焼けるも知らず、積りし雪をハネ返した竹の勢で、

『ソレは眞實ですか、そしてイツ捕へましたか』

『眞實ですとも、ユ、にぶち込

んだ時は日暮れ頃でした』

『さよでしたか』

やれと胸撫で下した私は、眼前には百花癡亂、耳底には糸竹管絃の音色です。靜かにポケットより取り出した煙草に點火した後、

『友人の話では、解剖の結果病死と決定し、捜索中止になつたと聞いて居ましたが』

『ソレナ事實もないではありませんが、或る探偵が貴下の『柔道』と云はれた證言を確として被害者の平素出入の知る邊を調べた結果、偶然事件が判明して捕縛するやふになつたのです。御見込の通り柔道の達人で、堂々たる有難者です』

コ、迄は申分なき僥倖感には、笑んで居ましたが、大團圓に近づくにつれ、K君が次の但書を物語つた計りに、さんぐの味噌をつけて、消えかゝたストーブに曉の風の二しは寒く、身に沁みくんと失敗に終りました。

『ソレは、犯罪場所は北米倉町の某家で、絞殺した後、かますに入れてチゲで運ばせ、現場に遺棄して、如何にも病死らしく装はしたものだ』

との但書きです。遺棄、成程私に、わざと遺棄するやふな、愚者、智者？はあるまいと思つたがさては一杯の思慮のスキ腹に喰はされたかと、今更齒がみをしても間に合はず、只管慚愧恐縮する計りです。があの時強辯の結果、偶然にも『柔道』の二字に逃げを張つたばかりで、これが天網の糸口になつたと思へば、疎にして漏さ

【四〇】

る天意には、時に豪強附會の言も御用立つものと見へます。

構罪の概括は、某一婦人に、加害被害の兩人が關係して居つて、犯罪の當夜偶然二人鉢合はせを演じ、口角泡を飛ばした結果、鍛練の腕にまかせて、斯くの始末ださふです。模範店員など云ひましても、他人の全量は、なか／＼判らぬものと見へます。(終)

### ◆首を斬る話

三木一彦

○辯護士高橋章之助氏、老來元氣よく旺盛。

○その正月の追憶談にいふ。『群馬縣は、明治の初め、岩鼻縣といつてゐたが、當時の縣令に、大戸龍太郎といふ人があつた。この人は、思ひ切つた人で、百姓が自分の田畑に、草茫々とはやし、耕作に力を致さざるは、これ罪惡といふので、全縣に逮捕狀を發し、ドシ／＼引ッ捕へて、首を叩き落ししかもこれを獄門にかけた。これには、百姓共震ひ上つて、忽ち田畑を大切にするやうになつた』

○記者問うて曰く、『で、この筆鋒を、朝鮮で應用すると、四民勤勉になると、先生は、斯ういはれるのですか』、阿々大笑、『マサカさうも行かんが、幾分眞理はあると思ふんです。政治は口頭宣傳だけぢや、何の利目もありませんからネ』

○マダ黒々としてゐる例の美髯を、ひとしごき。昂然としてあたりを見廻はすのであります。

## 緊縮夜話

衣食住足りて始めて禮節を知り得るのが一般だ、朝鮮の加俸官舎は如實に之を物語る、内地程官吏に不正がなく、實數俸半がよ、つゝ



「ソレは眞實ですか、そしてイッ捕へましたか」  
「眞實ですとも、コ、にぶち込

然にも『柔道』の二字に逃げを張つたばかりで、これが天網の糸口になつたと思へば、疎にして漏さ

りを見廻はすのであります。○マダ黒々としてゐる例の美輪を、ひとしごき。昂然としてあたりを見廻はすのであります。

# 緊縮夜話

## 長郷衛 二

(總督府内務局)

一割減俸、加俸半減の低氣壓が事なく過ぎ去つた或夜、官舎の應接間で主人A氏は、會社員B氏と對談中である、若造りで派手な夫人は時々御茶だの菓子を運んで居られる。

B「低氣壓も無難に過ぎて御芽出度り、物價は下るし俸給けへらず、此處君達社會は萬々歳だね、うらやましい事だ」

A「御挨拶で恐れ入つた、今度といふ今度は大いに考へさせられたよ」

B「何を考へさせられたかね……、内閣の方針に従つて大いに緊縮節約を勵行して、國庫へ獻金する……」

A「おい、僕のところの内情を好く知つて居る君が、そんな皮肉を言つては困る、國庫への獻金どころか、郵便局への獻金すら出来ない僕じゃないか、君の處とは違つたよ」

B「そりや分つてるさ、しかし此應接間の飾り立てである處や、流行の尖端を追ふ與様の御様子を見見すると、獻金位やれそうに思ふな、だが主人公のマガイ銘仙の洗ひざらしはチトひどすぎるなアハ、ハ、ハ、」

A「いや、それだ、官吏でも大官なら兎も角、我々風情が今の様な生活を續けて行く事の危険や、無意味な事は萬々承知して居るので、何とか改良したいと思ふのだ

が……」

B「善き半分の方様が駄目だと言ふのだから、大いに同情するが又一面君の妻のろ振りをなじり度いね、君だけではない、京城といふ處が一般に其調子だ、本町を歩いて見たまへ、何處の大官か重役の奥様かと思ふ様な素晴らしい容姿の方の後から、子供を持つてトボトボと歩く亭主の貧弱さ、博覽會の裝飾みたいに飾り立てた女を連れた、セイラーパンツの殿方、誠に興行のないレビュウの連續ばかりだ。

女ばかりじゃない、男も其通り判任が奏任然とし、奏任が助任然とし、社員が重役然とし、すべて皆らしくないね」

A「そう悪口ばかりでは恐縮する、併し多少其非難はあるが、中には實に立派な人格者も多いよ」

B「そりや我輩も認める、又それうなくては京城も闊だが……しかし一般的に言へば、内地に較べて此の傾向が濃厚だと言ふのだ、朝鮮では金の節約、生活の緊縮よりは、此らしくない事の緊縮節約が第一義的に必要と思ふね。若しそれが出来ないならば、加俸半減、官舎廢止の擲手戦法で已むを得ずらしからしめる手段も悪いとは言へないと思ふ」

A「ちよつと待ち給へ、その議論には少々異論がある、衣食足りて禮節を知るは昔の事で、現代は

衣食住足りて始めて禮節を知り得るのが一般だ、朝鮮の加俸官舎は如實に之を物語る、内地程官吏に不正がなく、瀆職事件がないのも一面加俸官舎の制度に負ふ處大であると思ふ、之だけは内地へも移し補へたい制度だ、大官は別として、中以下の内地官吏は實際悪まれない境遇にある」

B「成程……」

A「僕の友人でも警視廳の或課長を勤めて居たのが、其述べたが……。警視廳の課長室では相手が如何なる大官でも重役でも自分の頭一杯に應對し得るが、郊外の自宅では余りに其貧弱さに氣おくれがして思ふ事の半分もやつてのけられぬ、そこで職務柄自宅にての面談一切謝絶といふ口實を設けて、此ジレンマを切り抜けて居るが相當の官舎は實際必要だよと言つた事がある」

B「大いに同情するね、東京邊では恒産なくしては好く官吏としての體面と職責を完ふし得ないとは聞いて居たが……」

A「僕は朝鮮の官吏の待遇そのままを内地に移し得る日の一日も速かならん事を、實際眞面目に希望するものだ」

B「自分を悪くしないで他を良くしてやる主義だ、フォードの經濟論と相通するものがあるね、此主義には僕も賛成する、しかし僕の言はんとする處は朝鮮に於ける現實の實相にある、今假りに君の場合をとつて考へると、こんな立派な官舎に住んで警澤に暮して居る事が、君自身は兎も角として女や子供の爲になると思ふかね、出でては榮達のために狂奔し、入りては妻君の虚榮と享樂の犠牲となる君現在の生活が、一度終局を

◆特許權の話

三木一彦

告げねばならぬ時機に到達したら  
……そして不幸恩給だけで生活せ  
ねばならぬ様になつたら、君達夫  
婦や子供が果して之に堪へ得られ  
るか。現在が華やかで無自覚なだ  
け其時は殊の外悲慘だせ』  
A「今度大いに考へさせられた  
と言ふのは夫れだよ』  
B「大いに宜敷い、現在の平安  
なる生活に對する感謝と反省、そ  
してこれに對する奉仕の念を君は  
じめ家族一同が各々其分に應じて  
起す事だ、此現在の生活に對する  
感謝反省奉仕の念は自づから緊縮  
節約、自己をして、らしからしめ

る要諦である。いたづらに貯蓄と  
いふ物質的節約のみが現下の國難  
を救ひ、自己を救ふ道ではあるま  
い、濱口首相の意向も此邊にある  
のではなからうかと僕は思ふね』  
A「有難ふ、大に悟る處があつ  
た、君の直言と忠告を感謝する』  
B「官吏は宜しく湯淺倉平氏の  
如くあるべしだ、やあ今夜は少  
言ひすぎたが悪く思つて呉れ給ふ  
な……』  
扉の外に之を聞く細君の其涼し  
き目から、後悔と感謝の涙がポタ  
リと床に落ちた。(完)

○京城新聞の柄澤氏が、お正月  
に、中島病院長のところへ年賀に  
行く。

○つくづく院長の横顔を見ると  
濱口ライオンそっくり。

○「先生、似てゐますネー」と  
いふと、向き直つた院長、「皆、  
さういふので困る。ワタシは、昔  
からこの通り。似たのは向ふぢや  
特許權の申請を、ツイうっかりし  
てゐてのう』

長句二篇

工藤武城

(京城婦人病院)

送後藤瑞巖老師

秋闈菊花儘傲霜。雁啼蛩老動九腸。  
地合暮煙增寂寞。天欲黃昏何耐情。  
寒砧萬戶月如水。落葉翻風撲屋簷。  
歲華似夢去不歸。千里離愁逐難止。  
錫留舊域二十年。弊衣穿履耕福田。  
孤峰頂上幾來去。十字街頭座草蓆。  
踏破一萬二千峰。讀書五千四十卷。  
拄杖排月古鷄林。鉢盂入道檀壔電。  
熱喝噴拳真風鳴。濟家僧響響京城。  
敗蒲七重痴漢集。願兒牽友煮菜羹。  
破家散宅日相接。衣架飯廳屍屜々。  
幸解擔雪填井方。又得河頭賣水貼。  
奔放無礙水自流。行雲出岫信自由。  
東吳春潮浮蘆葉。西竺秋旛吹鐵牛。

碧蹄館懷古

三更鷄鳴天未曙。倒却禪床留偈去。  
期々打耳不見姿。不識陳迹在何處。  
別酒重傾難同携。人到這裡轉凄々。  
天地南北分袖後。豈期再會迎歸蹄。  
山連三關和心斷。水帶離愁長又短。  
不堪蕩々作鐘聲。空望東方登樓巔。  
文祿二年春正月。吾兵驍天慕華發。  
勇氣凜々滿渾身。一萬五千無勇卒。  
先登第一立花軍。鎮西碧蹄眞拔群。  
斬人斬馬戰必勝。鎧袖觸處奏殊勳。  
第二陣將是隆景。占得越川望容嶺。  
相競毛利及高橋。諸將雜盡無敵影。  
明軍總將李如松。五萬將卒似懶蜂。  
不交一戰氣已怯。亂算敗走棄劍鋒。  
眼中無敵何論數。三倍明兵騎鶴奔。  
一騎當百又當千。旗幟堂々鳴金鼓。  
追擊相次至暮天。首級如山血如泉。  
殘雪忽變化紅雪。絳砂坪名今日傳。  
昭和己巳晚秋夕。孤笳飄然弔戰跡。  
四顧峰巒皆紅楓。回想當時地亦赤。  
豐公雄志正堪憐。春風秋雨四百年。  
八道今蒙皇國治。枯骨可限碧蹄邊。

品川雜記

解散は變たとの議論もあるが、我  
等は寧ろ政界浄化のために解散を  
歓迎する。黨利黨略を算盤に入れ

奔放無礙水自流。行雲出岫信自由。  
東吳春潮落蘆花。西竺秋聲吹鐵牛。

豊公雄志正堪憐。春風秋雨四百年。  
八道今蒙皇國治。枯骨可瞑碧蹄邊。

# 品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

## 日記をつける

數年來怠りなく日記をつけて居る。ずつと舊くから記しては居るが、或は懷中日記に春秋の筆法もて極く簡短に片付けた年もあり、或は細叙的であつても連續してない年もある。併し此の四五年間は精粗一様ではないが、一日も飲かさず怠らず日課として誌し來つた今後も亦たさうする積りだ。

平々凡々にして、何の變哲もなく、何の風情もない凡人の凡生活であるから、毎日々々おんなじやうな事を書き綴るばかりだ。時々は何のためにこんなくだらない事を書き留めるのかと、聊か莫迦らしい感じを抱くこともあるが、さらばと云つて今更らやめる氣にもならない。三百六十五日毎晩そのくだらない日記をつけつゝあるのだ。

總ての物には歴史がある。總ての物目から歴史をつくる。星も、石も、樹も、魚も、獸も。況して人間に於てをや。平凡なる私目からの生活ではある。併しながら、私は一個の人間だ。兎に角肉体的にも精神的にも動くところの人間である。蓋世の英雄でなくとも、種代の偉人でなくとも、苟くも人間である以上、たとひ無名の一市民たりとも、其の座作進退、感情恩愛、すべて一個の人間記録となるべきで、私自身の生活は絶對に

他人のそれとは同一のものでなく斷して私以外の人の生活記録とは違ふのだ。かるが故に、私は私自身の歴史を私目から日録することに、それが他人にとりては一向に興味も利益も與へまじき仕事であるにせよ、私にとりては相當意義ある仕事としての重要性を認めて居るのである。私自身の生活を記すばかりでなく、私の家族の行動を筆にする。一昨年生れた幼児の生ひ立ちから言葉の進化までもすべて私の日記の材料だ。

記し來つて今日可なりの分量になつて居る。丹念に書き積もつた日々、月々、年々の『自樂草舎日記』は、筆者たる私自身すら再び通讀するには餘りに多量で且單調だ。況して私以外の誰が之を一々點檢讀過するであらうぞ。考へて見るといふ加減な仕事でもある。

## 投票に惑ふ

一月十二日の休日の朝東京はほんのりと雪花粧をした。此日湖南へ行つたら梅が咲いて居た。

前日即ち十一日には朝野緊張の裡に金解禁が斷行されたのであるが、此の一大經濟記念日の翌朝に淨めの雪があつて、何となく幸先きのよい感じ、明るい氣分にさせられて愉快だつた。

議會の解散、従つて總選舉も今は必至の運命にあるやうだ。野黨が積極的に反對しないと云ふのに

解散は變だとの議論もあるが、我等は寧ろ政界淨化のために解散を歓迎する。黨利黨略を算盤に入れずに、純なる憲政の大義名分の上よりして、解散は當然であると思ふ。そこで愈々選舉となつたら、扱て何れの政黨に向つて吾人は清き一票を投すべきか、政友か、民政か、將又無産か、其の何れにすべきかに惑ふものである。相對立する二大政黨と云ふも、民政黨と政友會と共に格別頼りになりさうもない。無産黨にしる同様だ。と言つて棄權するのは立憲國民として恥辱だから、結局比較的國家社會に忠實で國民に親切な、さうして惡事の少ない政黨を支持するより外はあるまい。政界が淨化されない限り、吾人は欣然として投票場裡に出入する氣になれぬ。政治家よ、政黨よ、冀くは陛下の赤子をして惑はしむる莫かれ。

## 江畔の別莊

三木 一彦

○殖銀の守屋氏が、漢江々畔……漢江神社の邊に、一草舎をつくり、ソユで本を讀みたいといふ希望を持つてゐる。

○スルトあの邊の地主、『アンタが来てくれるなら、坪一圓でよろしい』『イヤ、五十錢で結構』『拙者は、タダで進上する』

○三葉氏の人氣、思ふべし。  
○スルト御本尊いよ〜我儘。  
『ついでに別莊を、タダで作つてくれるものはないかナ〜』

○願書を出すなら、今ぢや……と申すことあります。



# 萬年筆の思出

工藤武城

(京城婦人病院)

【四四】

出来ない。現に此原稿も、東京下  
巢鴨平松の並木製造所製の、自動  
吸入式第二號、メヂアムペン先を  
使用して書きつゝあるが、充分満  
足が出来る。

『本年の誕生日のお祝には、醫  
學と方針を極めたぞうだから、腦  
の寫眞器を贈つてやらふ……』と  
當時龍動に居た友人から手紙が來  
た。

エツキス光線の装置ではまさか  
あるまいが、何しろ有名なニューモ  
リストで通つた男だから、奇抜な  
品が来るに相違ないと待つてると  
萬年筆が届いた。成程これは腦の  
寫眞器に相違ない。

其のペンは、龍動、ド、ラ、リ  
ニュー會社製、オフト、零號であつ  
て、時價三十圓計の品だつたそ  
うで、校中で萬年筆を所有してゐるの  
は拙者一人、大に威張つたもので  
ある。

此話は已に三昔前、自分と萬年  
筆との因縁は、そろ／＼甲羅に若  
の生へる頃である。其次に手に入  
れたのは、佛蘭西、ブローニユー  
製のステログラフで、ペンでは無  
くてイリヂウムの管の中に小針が  
通つて居て、書く毎に、接觸した  
部分からインキが出る構造である  
従つて其手あたりが鉛筆と同じ  
く、面白味がなく、此ステログラ  
フは流行を見るに至らず、到頭日  
本の戒名も附かずに世の中から消  
へて仕舞つた。

第三番目はライフチツヒ製のケ  
リオと云ふ萬年筆。軸側に吸子が  
あつて、所要のインキをポンプで  
壓出し、不要となれば餘剰のイン  
キを吸込ます仕組で、當時にあつ

ては、非常に面白い考案であつた  
が、尖端のイリヂウムがあまり良  
質でなく、暫く使用すると片べり  
がするので、此れも餘り流行しな  
かつた。

亞米利加に居た時には、紐育製  
のウォーターマン、ムーアを使つ  
た。ウォーターマンは主としてノ  
ルマル型、ムーアは繰出し式一  
點張りである。

何れも相當の出來榮へであるけ  
れども、軸に使用せるエポナイト  
の酸化褪色が早く、龍を失ひ易  
い。

自分の萬年筆狂は段々嵩して、  
文房具屋の店頭で購ふのみでは興  
味がなく、態々其の製造所迄出懸  
けて、技師を捕へて研究してから  
で無ければ買はぬと云ふ程度にま  
で進んだ。以上の英國のオフト、  
獨逸のクリオ、佛蘭西のステログ  
ラフ、米國のウォーターマン及び  
ムーア、何れも其製造所を實地に  
見學したものである。

十年前迄は、エポナイトの細工  
が甘く出來なかつた爲に、日本製  
は何れもインキ漏れがして、夏な  
どは白いチョッキや上衣を眞黒に  
して、一として縁なもの無く、  
如何な愛國家も、萬年筆だけは日  
本物を使ふ氣になれなかつた。

然るに、今では外國製を凌駕す  
る勢ひで、エポナイトに漆を混じ  
たラツカナイトの發明以來、其褪  
色もなく此點では外國製も眞似が

日本の筆の原字は聿であつて、  
手(又)に筆を持つたる形象文字  
で、日本のふでも、朝鮮の呉も其  
轉訛では無いかと思ふ。今でも書  
や律は筆の古文字の聿と組合して  
其面影を残して居る。秦の時代と  
なつて、草の纖維を使用する様にな  
つて草冠を附し、竹管を軸とす  
るに至つて竹冠となり、獸毛を使  
用するに至つて筆(ふで)と云ふ  
字も出來た。支那の時文を讀むと  
聿、筆、筆、筆、筆の四つのふでの字  
が無差別に使用されつゝある。

西洋の筆の字も、長い間羽毛軸  
が使用された爲めに、獨逸語のフ  
エーデル、佛蘭西語のブリニーム  
兩方共羽毛と云ふ字を其儘ペンの  
字として使用され、英語のペンも  
羅丁語のペンナの略であつて、同  
しく羽毛の義に外ならぬ。先端の  
磨減を削るナイフは、今でもペン  
ナイフと稱する名が残つてゐる。

萬年筆と云ふ名稱は、比較的此  
頃出來たもので、始めは英語のフ  
アウンテン、ペンを直譯して、  
泉筆と稱して居たが何時とはなし  
に萬年筆と代つて仕舞つた。獨逸  
語のフェル、フェーダー(充たさ  
れた。ペン)佛蘭西語のブリニーム  
レセルヴァール(貯藏されるペン  
)であるが、英語が最も詩的で、  
語呂もよろしい。夫れでも英國人  
中には、ファウンテン、インク  
ホルン(泉の如く墨汁の出る角)  
と云ふものも相當に多い。

萬年筆が生れる迄の、ペンの歴  
史を回顧するのも、中々に興味が  
深い。

羽毛軸が物を書くに使用された  
のは相當に古い。フェニキヤ、ア  
スシリヤ、ギリシヤ等には、四千



第三番目はライプツヒツヒ製の  
リオと云ふ万年筆。軸側に吸子が  
あつて、所要のインキをポンプで  
壓出し、不要となれば餘剰のイン  
キを吸込まず仕組で、當時にあつ

羽毛軸が物を書くに使用された  
のは相當に古い。フエチキヤ、ア  
スシヤ、ギリシヤ等には、四千  
前に已に此れを使用された事が歴  
史に残つてゐる。

然るに、千九百七十四年前に、  
シーザーが元老院に於て、カスス  
以下四十餘人の叛逆者に襲はれた  
時には、一本の鐵ペンを以て此と  
戦ふたことが歴史にあるし、千八  
百六十一年前地中海に埋れたポンペ  
イから掘出されたのには、青銅の  
ペンがある。ネアベルの博物館に  
陳列されてある。羅馬王朝時代は  
銀や眞鍮のペンがあつたが、屢々  
人を傷くる道具に使用さるゝので  
千八百四十五年前に、時の政府は  
奇抜な法律を出して、國民に金屬  
製ペンの使用を禁止し、此れを犯す  
ものは嚴罰に處し、角、骨を使用  
せよと諭した。

万年筆が始めて發明されたのは  
今から百二十一年前で、發明者は  
英國のフレデリック、ビー、フォ  
ルシュと云ふ人である。

六十五年前、亞米利加大統領の  
リンコルンが、芝居小屋で暗殺さ  
れた時には、其ポケットに万年  
筆が入つて居たそうであるが、未  
だ一般の人には使用さるゝに至ら  
なかつた。いや万年筆計りでは無  
い。普通の今日ならば一個一錢位  
で買へるのさへ、千八百九九年に  
ヨゼフ、ブラマーが金屬ペン先を  
削る專賣特許を得、夫れより九年  
を経てチャールズ、ワットが鍍金  
法、千八百廿二年にはハウキ  
ンが今日の龜の甲形の專賣を得た頃  
迄は、ペン先一本の價が、驚く勿  
れ一本五圓もしたさうである。

万年筆をして、今日の發達を見  
せ、八百屋の御用聞きの小僧さん  
迄使用せしむるに至つたのはイリ

本物を偽り氣にたれた  
然るに、今では外國製を凌駕す  
る勢ひで、エポナイトに漆を混じ  
たラツカナイトの發明以來、其體  
色もなく此點では外國製も眞似が  
深い。

と云ふものも相當に多い。  
万年筆が生れる迄の、ペンの歴  
史を回顧するのも、中々に興味が

## 或る友

—友は新聞人なり—

徳野眞士

(朝鮮鐵業會)

無害無益なきにひとしき不思議なる存在なりと吾  
といふ友なり  
圖拔けたる大きな聲で笑ふ友その笑ひこそ油斷な  
りがたし  
こともなく聞き過ごしたるふりをして重大事をば  
しかとつかむ友  
成し遂げし事の鮮やかさ腹の底になにかこたま  
藏し居るらし  
朝鮮に怖き者なしといふ強き自信をもちて働く彼  
なり  
しみじみと吾を無害の友といふその友の心われ知  
り難し  
どうも人は實際以上に自分をば買ひかぶれりと友  
はいふなり  
友をばむる人の言葉はあながちにお世辭とばかり  
云ふ事を得ず  
一度でもしてやられたることなき友の心はいつ  
も緊張れり  
うかくと遊べるが如く友を見る世間の人のほゝ  
けたる顔  
何に俺が負くるものかと小氣味よくどの事件でも  
きつとかつなり  
こは大事と素早く放つ弓の矢けまだ新らしき的を  
射ぬけり  
頑丈なからだだけどんな難事でもやつてのくるにふ  
さわしく見ゆ

デニームの發見と、エポナイト製  
造の發明と、毛管作用の應用とで  
あらう。

一般の人は、文房具屋に行つて  
いきなりにペンを取つて、氣に合  
へば其儘買つて仕舞ふ様であるが  
我々万年筆狂は、尖端の大小、構

造に因つて、

コース、メデアム、スタツプ、  
オブリック、ファイイン、シグナ  
チユーア、マニフォルド、ダ  
エグリー、  
と、先づ大別して入つばかりにす  
る。

此度は其構造の變遷迄述べることは差控へるが、科學の一たる醫者として飯を食つてるので、今自分の握つてる萬年筆に就て、科學的の記載をお目に懸けやう。

此萬年筆は自動吸入式で、其吸入率を八〇とし、インキの含有量〇、七四立方釐、此原稿紙に八千九百字が書ける。インキが一立方仙迷とすれば、一萬二千字が書ける。自分の體温が平温で攝氏三十七度であるから、其温度の手で握つて書けば、軸内にある空氣の膨脹の爲めに滴下するインキの滴數は、十五分にして〇、七、三十分にして一、四、四十五分にして二の割合となる。

然して此インキの一滴は、今温度が攝氏六十二度にして、粘度〇〇一一〇七として、直径〇、四四三〇センチメートル、體積は〇、〇四五五立方釐。

軸内の空氣の膨脹率は、初めの容積に、初めの絕對温度を以て、温度の上つた時の絕對温度を以て除したものを乘したものに等しい。

インキを止めて温を與ふときの軸内の空氣の壓力は、初めの絕對壓力に、初めの絕對温度を以て上昇せる温度の絕對度を除したものを乘したものに等しい。

故に、善き萬年筆は、此公式を甘く應用したものでなければならぬ。

尙ほ最後に一言したきは、將來我日本は、世界中の萬年筆を一手に引受けて製造する時代が来るであらうといふことである。

何となれば、今世界にペンの尖端に使用するイリヂウムを産する地は、濠洲タスマニヤ島と、露西亞のウラルと、北海道の北見天鹽

の雨龍川天鹽川の流域の三ヶ所ばかりはない。此内タスマニヤ産は三五プロセントで、北海道産の六二、五プロセントの半分にしか當らない。ウラル産に至つては二、三プロセントでテナデ問題にならない。即ち世界中最良質のものは昔日本にしか無い。

◆巴里の踊子

北 漢 山 人

〇一月十六日の晩に、山田新一雷伯フランスより歸る。

〇その山田さんの話で、ヨーロッパに於ける横井(内務局技師)さんの人氣の、逆もく／＼スラバしいといふことが判つた。

〇横井さんに、一寸ソツちへ向いてみて貰ひませう。

〇横井さんモトより將棋は強い。そこで、横濱を解纜するところ、船中の天狗を相手にし、片ツ端から總管めをした。

〇一同憤恨やる方なけれども、コレばかりは、如何とも方法がない。

〇さてまた、巴里に着くと、此處でも、大天狗、小天狗を、向ふに廻し、一人々々鹽をした。

〇ソコで、在佛の有志等、何とか仇を討たんと、タバランといふ巴里第一の踊場に、横井さんを案内し、『君、踊れるか』『イヤ踊れない』『ウフツツ、さうだらう。まあ我々の巴里スタイルといふ奴を、一つ篇と見學し給へ』一同美人を擁して、終夜踊る。横井さんたつた一人で、ポカン……

【四六】

次は軸に使用するエポナイトであるが、此には、日本産の漆を和したラツカナイトが最も上等である。

最後には指先の器用な日本人のハンデキャップがある。此れに朝鮮産の金でも使用すれば全く鬼に金棒であらう。

〇それから三週間、一度英國へ渡つた横井さん、また戻つて來た。そして今度は、横井さんの方から、一同を踊場に招待する。行つて見ると、『諸君、先日は難有ら。今日は僕も踊ります』『へへへ、何が踊れるものかと、高を括くつてみると、イヤ驚いた。敬服した。その踊りの美態にして艶麗なることよ。本場の巴里の踊子さへ『あれ／＼……』といひ乍ら、タラ／＼涎を流した。一同呆ツ氣にとられて、『オイまた、總管めとは情けない』

〇蓋し癡り性の横井さんは、倫敦に渡るとから、晝夜熱心に御稽古。天分も手傳うて、忽ち天才的光芒を發揮したものである。

〇で、巴里タバランの踊場では極東日本の天才を忘れず。山田氏が行くと、踊子四方よりやつて來て、『あなた、天才横井を知つてる』『ア、知つてる』『彼は踊りの妙手たるのみでない。實に／＼心のうつくしい人である』

〇いきなり禮讓の雨に、山田氏ビツクリ敗亡、『待つてくれ、俺ア何も知らん』『蓋し最初の横井さんの踊らざるは、全く紳士の謙讓——美しき心のアラワレと信じてゐるのである。

内地見學餘談

(承前)

する不安さが感じられました。かと云ふて帝展に堅實見るべきもの

何となれば、今世界にペンの尖端に使用するイリヂウムを産する地は、濠洲タスマニヤ島と、露西亜のウラルと、北海道の北見天鹽

一同美人を擁して、終夜踊る。種井さんたつた一人で、ボカン……

さん、の踊らざるは、全く紳士の謙讓——美しき心のアラワレと信じてゐるのである。

## 内地見學餘談

(承前)

### 多田毅三

(洋畫家)

帝展と藤田氏の個展とを東京で見、二科を大阪で、院展を京都で見ました。先づ帝展はとも一日仕事で見る事は出来ません。

色彩は帝展の中に實に多數見出されました。多數と云へば槐樹社張りと稱さるべき作も少數ではありません。奥瀬英三氏も今年からは審査員で百二十號に『伊豆の海』と題する力作を出品して居りました。辻永氏は赤つばい『人形のある静物』、小見寺八山氏の奈良の風景も面白く見受けました。朝鮮からは美術學校に入つた孫一峰君の水彩は益々進境を示して居り、佐藤貞一君の初入選も探し出しました。其他高木背水、福田義之助兩氏も去年今年と入選、間部時雄池上浩といふ連中の作もありました。日本畫では僅かに大木豊平君が朝鮮の舊知でした。

私に池邊貞喜君と招待日の帝展を見ました。重要なものばかりを三時間ばかり見てゐる中に友に話ぐれたので心配して外に出ると居りません。其處で山下で二時間ばかりかゝつて食事を済して再び會場に来るとやあと云つてその友が出て來ました。外に出てゐたのか待つてたぞといふのです。先生五時間位は當然だといふ様な概念があつたのでせう。帝展日本畫は概して東京は深く味に食ひ入り京都は上に浮いて技巧的であるやうです。勿論大家とされる顔觸れの中には例外がありますが——恐ろしい大作ばかりの中に平福百穂氏の作など四尺角位のものでした。洋畫では先づ青山巖治氏の『朝』が本格的な落着きある雄大さの感じられる作だと思ひました。それに田邊至氏の『黒裳』は上白下黒の朝辭服の婦人像で六尺に八尺といふ大作で氏の格式ある仕事で靜かに力を加へて行く様が尊く見られました。南薫造氏の『鶴渡る』は批評家が皆氏の復活だといつて讚辭を呈して居りましたが私も上品な壁畫らしい色彩が美しくもの優しいと思ひました。前田寛治氏も病中三百號の出陳で努力作でありました。さうして此前田式の

また東京は小説のサシエなどで必要があるので地理や建物も見て置く必要があり、カフエーは山下の三橋や菊屋、それに銀座のフネのクロネコ、イナイナイバー(これは此處の抱へみたいになつてゐる詩人の下田惟直が竹馬の友で度々行きました)タイガー、プランタン曰く何々、それに郊外の四五軒見物しました。或夜クロネコで友人が『千束町に行かう』といふので少々たぢろいで『さあ』としぶると『まあ來てみる』といふので自動車飛ばしますと、その友人の友人の家が藝者屋で、そこから案内されて行きますと實際これは善い見物をしたと思ひました昔の千束町とは似てもつかぬもので、御待合とされてゐるその家の庭なり建物、池、一本の樹木、さては壁に貼られた浮世繪、又或部屋は清元かなんかの稽古本の頁等實に趣向あるもので驚いてカプトを脱ぎました。此處で面白い話は『三橋』の主人の後援する十三人とかの美術家が今年は何りしてか全部帝展を落ち、又クロネコの主人の後援する山口謙哉も落選してそのアトリエを追はれる約束だと

## 京 城 雜 筆

院展は作風の類似などから甚だ心弱く感じましたが、小林古徑、前田青邨、安田靉彦、中村岳陵各氏の作は人氣を集めて居りました

また東京は小説のサシエなどで必要があるので地理や建物も見て置く必要があり、カフエーは山下の三橋や菊屋、それに銀座のフネのクロネコ、イナイナイバー(これは此處の抱へみたいになつてゐる詩人の下田惟直が竹馬の友で度々行きました)タイガー、プランタン曰く何々、それに郊外の四五軒見物しました。或夜クロネコで友人が『千束町に行かう』といふので少々たぢろいで『さあ』としぶると『まあ來てみる』といふので自動車飛ばしますと、その友人の友人の家が藝者屋で、そこから案内されて行きますと實際これは善い見物をしたと思ひました昔の千束町とは似てもつかぬもので、御待合とされてゐるその家の庭なり建物、池、一本の樹木、さては壁に貼られた浮世繪、又或部屋は清元かなんかの稽古本の頁等實に趣向あるもので驚いてカプトを脱ぎました。此處で面白い話は『三橋』の主人の後援する十三人とかの美術家が今年は何りしてか全部帝展を落ち、又クロネコの主人の後援する山口謙哉も落選してそのアトリエを追はれる約束だと



か聞きました。クロネコでは別に彫刻家の堀進二氏を後援してゐるようですが、これは盛運です。

大阪では阪神國道を自動車で走つては兵庫縣側のダンスホールに四度ばかり案内されました(大阪府では許可されない)、然し何うも踊つてみる氣にはなれず、禁じられてゐるアルコール分を特別に注文して見物してゐると、あれが何々黨主の令息だとか、あれが百萬長者の若主人だとか、あれが阪神バスの社長だとか、あれが何處大學出で英國に四年、あれがアメリカに三年と云ふやうなわけ

でケチなバラツクのホールに似合はず、入つてゐる人間は大層なもので、ダンスカーなるもの、バラツク趣味にもいやな氣がしました。

踊つてゐる連中の中にも總督さんみたいな體の人もあつたり、小男で材木を運ぶやうに女を擔いでゐるものもあつたり、接觸ばかり大事がつて踊りの下手なガンモドキも居つたり、踊り自慢でバツタバツタ釘の打つた靴をガタツカせるセーラパンツがあり、やたら美人を探しては踊り中にイヤラシク話しかける毛唐がゐたり、出鱈目なジヤズバンドが格好似合で御座らう

【四八】

位に鼻をくくつたが、ぼんやり眼上の撮像として見てゐると探光の變化が美麗で甚だ美術的でトンゲンの繪の生れる處もさとれまじつた又斯うしてボンヤリしてゐると、部屋中を狂ひ廻る色緑々な光の粉が美しくいりズムを作りついうかろかとする氣にもなるのでした。(昭和四、一一、一五)

易  
小 唄 岡  
石 介 村

### 寒天に立つ

角田不案

(北米倉町)

寒天の路傍に薪を割り居るをこの國人から見つちおちつけり

凍り乾く一本の道の遠く風のありて寒の埃の吹きたつが見ゆ

寒の埃のときおり風に舞ひ上る路傍にかがまり人等ののどかなり

明太魚を賣りてよびゆくひげながきこの國人の顔ただに見難し

悠然と煙草を燻らしかかはりもなく眞木を彫るをみる人人なりけり

崩れたる土塀の庭に寒空にシーソーに遊べる子供等にてあるなり

寒國の人の鬘屋の晝の廻り畑の古木は杏にかゝるらし

この古木の杏に花の咲きたらばと冬日のなかにみつち立ちにけり

凍てし畑の杏の古木みつたつ年ほく酒に酔ひにけらしも

この上になす業もたぬ人人のまさりゆきなばいかにとならむか

この國のちまた路あはれなす業をもたぬ人人のそこにもここに

饑飢に泣きことをもあげずばうつそみを牛の如くに生むとすらむか

業しなくさりとてもの思はずば愛きこともなからむか豚のごとくに

(五、一、五)

### 夢で見る女

である。二度目三度目も……けれども共多少其夢に興味を持つようになつてから私は回心と云ふ現し



# 夢で見る女

森 二 郎

(京城日日新聞社)

おかしな事があるもので、私は茲十年程一つの女の夢ばかり見て居る。いつも暗い雨戸の隙間から其女が私を覗いてニタリと笑つて消えて了ふのだが、十年程前威鏡北道へ旅行中元山港を出帆した船の寢臺の中で初めてこれを見て以來六七回、いつも旅行すると其の女の顔を夢に見る。肩の薄い、頬骨の上がった、どす黒い皮膚の女で、丁度阿片窟あたりでうごめいて居る女を想像させられるような顔であつた。

元來私は熟睡するたちで、夢と云ふものは、物心ついてから餘り見た事がないのに、不思議にもこの陰惨な女の顔丈は七八回に亘つて夢見て居る。今年も奉天から乗つた夜行の一等寢臺の中で又この顔を夢に見た。然かも九度が九度、いつも同じように雨戸を五寸程あけて、ぢいつと私の方を覗いてニタリと笑つて消えて行つた。多少氣になつて居たものと見へて、夢を見ながら『あゝ覗くな、よし、こんどと云ふこんどは引つ捕へて正體を見届けてやらう』と思つて居た事を眼を覺してからも記憶して居た位であつた。

こう云ふ話を或友にしたら『こいつ散々極道をやつて來た揚句だから、女の怨にとり狹れて居るんだらう』と云つて氣味悪る相な顔をした事がある。まあ例へばそう云つた粹な結果としたならば、誰

か今までに知つて居る女の顔が夢の中に現れそうなるものである。見ず知らずと云ふよりは全く自分の知つて居る範圍で、その顔にどこが多少でも似寄つた女と云ふものは、一人もない位である。その女か雨戸をあけて、ニタリと笑ふのである。それがこゝ十年程殆んど毎年一度か二度、然かもいつも旅に出た時に限つて夢の中に現れるのである。

私は生れ付の樂道家で、どんな事も苦にせない男である。ましてこんな夢の事など別に氣にもせず何年も経過して居たが、余りに度々、然かも其都度寸分違はぬ夢を見るので一昨年頃から多少氣にし始めて來た。氣になつて來たと云ふても氣味悪るいとか恐ろしいとか云ふのではなく、所謂夢の其女に對して一つの興味を以て來たのである。考へよりに依つては其女も余程怨めしい事か心残りの事があつて誰かを追ひ廻して居るものと想像が出来る。そうすると、さしずめ其男が私と瓜二つと云ふ譯で、其夢の女は私と其男とを感違ひして、いつも覗きに來るに違ひない。尤も判然と其男だと云ふ事は自信がないらしく、従つて覗いた丈けで消えて了ふのではなからうか。

どこから見ても美人ではない、然かも凄惨な其顔を初めて見た時私は矢張りゾツとさせられたもの

である。二度目三度目も……けれども多少其夢に興味を持つようになつてから私は何んとなく親しみを感じて來た。どうかすると『今夜あたり、一つあの女が出て來れ、ばいゝな』なんて考へるようになつて來た。

その日、丁度奉天の街を散々歩いて、黄昏頃私は支那芝居の前に立つてゐた。細い横丁が右側にあつて其小路の奥に焼肉や蕎麥の屋台のやうなものが幾つも店を張つて居る。乞食だの、穢ない勞働者のやうな男女が、ごちや／＼と湯氣の立ち昇る屋台の附近に群つて居る。

私はフト、いつも夢に見る其女の事を思い出した。何んだかそう云つた女が其小路の中で寒さと饑に震つて居るように思はれてならなかつた。私はすか／＼と小路の中に入つて行つた。そして焼肉屋の屋台の裏にうづくまつて居る女を食らう一群れをかきわけて其女を探し出そうと努めたのであつた。勿論それに似た女の顔も發見は出来なかつたが、それでも私は軽い失望の中にも何んとなく一つの勤めを終つたやうな氣持になつて小路を出て來た。

其夜寢臺車の中に其の女が現れたのである。今年の一月の七日の夜の事である。はつきりといつてもよりは四五寸雨戸を廣くあけて、いつもよりは四五分長く、ぢいつと私の方を覗いてから、ニタリと笑つて消えて了つた。はつと眼を覺まして寢臺のカーテンを捲つて私は列車内を見廻した。勿論夢であるからそこに女の居らう筈もなかつたが、私は洗面室のカーテンが、今誰か入つたばかりのやうにゆらく／＼と揺れて居るのが氣に

なつたのである。私は飛び出して洗面室に行つた。あけ番のボーイが何か洗ひ物をして居るらしく、白い上着の手そから黒いスポンの尻がそこに見えて居た。

私は徳ふやつて見ず知らずの女と夢で親しくなつて行く。もう十年経過して居るのであるから、恐らくは之れから先き何年も、或は一生を通じて夢見る事となるであらう。その代り、私もいつか此夢の女を生きたる世界に發見しなくてはならないと思つて居る。どこかで、いつか必ず此女に巡り合ふ機會が出来るように思はれてならない。何十年の後かも知れない。けれど共私は一年々歳とつて行くが其夢の女付十年前も今も同じことである。

私は此話け十年の間誰にも語らず秘めて置いたものである。

◇うわさ雜記

北 漢 山 人

○棉引博士くらゐ、散歩する人はあるまい。

○眼のあいてゐる限り、テクテクと歩いてゐる。

○遊動生活が實に好きで、その下宿の如きも、年中轉々である。

○科學者の西行法師とは、この人の諱名である。

○若い時から座禪をやつたものである——下谷の兩抱庵の、宗活和尚に就いて——それで、今でも妙心寺に行つて、年中ムンゾと座つてゐる。

○但し半眼で、斯うごつと轉えてゐると、仁川のボラヤ、ハゼが目先きにチラ／＼するさうだ。

○釣は上手で、『君、ライマンの

鳩

徳野鶴子

(櫻井町一丁目)

霜とくる米屋が前の日だまりにこぼれ實ひろふ鳩の一むれ  
入うすきあしたの道にむれ鳩の落實はみつゝなごみ遊べる  
來る人のあるをも知らず四温日の日かげうれしみ鳩け遊べり  
ころよく空は晴れたれ風牙えて街角に見る山の雪日ろし

初春の日のうら／＼かさ少女等は袖ふりはへて羽根をつきをり  
きり／＼とまひてのぼりし紅羽根のしまらくは見へず日のかゝやきに

瘴の梅散りてひそけき部屋ぬちにすひさしの煙草けむりあるかも  
近き山は雪もとよめず遠き山はかすめるまゝの日よりつゞけり  
うどん華のはなさきたりと見しあした羨しきたより東都より來し  
立ちかへる春の初めのことぶきを先づこそ君にさげまつらな

ボラヤでも、ハゼでも、僕には實に聊つてゐたぞー！

○西鮮日報社長長谷川義雄氏は胃病に罹り、正月五日手術を受くるために、福岡に向つた。

○その途中、沙里院から京城まで、丁度旅行歸途の權藤氏(朝新副社長)と會つた。  
○『ヨ、どこへ行く』といふ

やうな話から、長谷川氏胃病のことを話すと、權藤氏『何、その元氣で、胃病ナンテことがあるものか。何、手術をするツテ。よし給へ。君……ガンかカモか判るものか』、大病人の長谷川氏も、フツと吹き出した。  
○序に記しておく。十六日着の手紙では、手術後の経過極めて良好であると、切に本復を祈る。

目光きにチラ／＼するさうだ。  
○釣は上手で、「君、ラインの

副社長」と會つた。  
○「ヨ、どこへ行く」といふ

手紙では、手術後の経過極めて良  
好であると、切に本復を祈る。

# 私の渡鮮當時の思出

## 井上 要 一

〔京城女子技藝學校〕

私は明治四十二年に京城に参りましたが、今に忘れぬ興味ある思出は宋故秉峻子より直接に聞きましたことで、それは故伊藤公と童子の御兩人で内鮮學生の共學をさせると言ふことが相談されて、宋子は早速其れを實現する考であつたことでもあります。

私の渡鮮當時の事でありまして京城に於ける教育史の或る裏面の一挿話として稍々面白味ある話であり、又た私の生涯の一つの思出として教育上に聊かでも盡し得た一端であると思つて愉快に感じて居る事でもあります。私付或る關係により故宋子（朝鮮の政黨一進會の顧問であつたと、聞いて居ります）の招聘によりまして一進會員の子弟を養成して居る光武中學校なるものを擴張刷新するといふ責任ある使命を帯びて渡鮮したのであります、それまでには數回渡鮮もいたしまして故宋子とは其度毎に會見し、種々の點に於て打合せもして居つたのであります、然るに恰も私が愈々渡鮮といふ時に宋子は伊藤公と共に急に東京に行か

るゝことになりました。しかし私はそれは一時的の御出張であると思つて安心して所定の任務に就くべく郷里秋町を立下關に参りました。時丁度宋子は伊藤公と共に

同地に來られ、宋子は大吉樓に伊藤公は春帆樓に宿泊されて居られ其附近道筋など嚴重な警戒をされて居りました。私は喜び早速宋子に面會を申入れました。ところが宋子は面談することは承知したから此の宿に泊つて待つて居てくれとの事で、宋子の隨員及護衛の人員と一緒に優遇されて、日々御馳走で相濟まぬと思ひながらどうも致方なく面談して下さる迄待つより途なく三日四日と待つて居りましたが面會して下さらぬ。一方宋子は毎日伊藤公と互に相往來して居つて私には仲々面會して下さらぬ。

然るところ漸く一週間目の夜面談する事が出来ました、段々話を承ると前の話とは違つて要點は次の様な話を直接に致されました。

『君を京城に招聘するのは光武中學校の刷新擴張といふ考で居つた處、少しく話が變更した、といふのは京城の日本人居留民團に於て中學校を創設する問題が起つて來た、然る處民團では急に校舎を造る事が出来ない、そこで今回君をよんで擴張するといふ考であつた其の學校の校舎をそれにあてる事にした、同時に朝鮮の學生即ち光武中學校の學生をも一緒に收容して學ばしめることに談合した、日本と朝鮮とは將來一國にならなければならぬ運命を持つて居る。そ

れには年若き學生を共學させ相親しましむるといふことが最善の策であると思ふ、伊藤公とも協議したことであり、公も大賛成であるから君はこれから往つて大に努力をして貰ひたい、豫算なども其考で編成してくれ』と申されました。私は其れを聽き自分の責務の重大なる事を感じまして、次の様に返事をしました、『私は朝鮮人の學生を指導するといふ考で閣下の御趣旨を體して、一私立學校を都合よくやればよいと單純に考へて居りましたが、問題は中々そう單純に考へられぬやうに思はれますが私が閣下の命を受けて渡鮮する事を日本人中學校創設の事務を執る方々に能く話をしておいて下さいましたでせうか』と申しました處『それは十分に話してあるからしつかりやつてくれよ』との事でありました、私は朝鮮人の一私立學校を宋子といふ其の當時の顧問の命を受けて經營する考であつたのが、完全なる中學の仕事をせねばならぬといふ事になつたのは悦ばしくも感ぜられませんでした、又一面には朝鮮における教育上に何等智識もない者が京城で中學校の創設事務に全責任を負つて従事するといふことは、何となく責任觀念の上より恐怖心を抱かざるを得ませんでしたが、兎に角己に中學校教諭の職を棄て、朝鮮に乗り出すことにした以上には、出来るだけの努力をするより他に致方はない、誠心誠意を以てやれるだけの事をやるといふ決心で宋子に暇を告げ支海難を渡りました。

回顧すれば今を去る二十二年の昔、春とは申せ未だ寒さ身にしむ二月十三日の朝、京城に着いたのであります（つゞく）



# 維摩去つて後 親鸞あり

山本吉久

(南大門小學校)

佛教が學問であり又は山林佛教に終つたら、ほんとの宗教としての價値を有つたものとはいへない、況んや大乘の精神である人を救ひ世を濟ふといふ佛教精神の顯現には遠い距離を有つものである我國中世の佛教が相當に高僧大徳が輩出して居るに係らず佛教的勢力即ち一般民心の内面生活を左右する勢力の微弱であつたのも此の譯ではあるまいか。

我國に佛教の傳來して眞に佛教の研究であり又修業者である聖徳太子は如何に觀ぜられたか、太子は大乗佛教中諸法實相の法華經を至極無上の經典と御覽になつてゐる。花は咲く々々、紅葉は散る々々、その事が常住である、諸法はありのまゝで商人が算盤を持ち農夫が鋤を執るも又男女が家を成して子を養ふも、之皆世の實相である。その實相を覆んで生滅々已の爲樂世界を内成するその事が佛教の要諦で太子の法華經を禮讃されたのも尤もである。次に太子は維摩經と勝鬘經を御珍重になつたといつてゐる。維摩居士は出家せないで所謂肉食妻帯のまゝで佛教の修行者であり、勝鬘夫人は又在家のまゝで夫を持ちながらの修行者である。太子が自ら世俗の生活を營みつゝ佛道三昧大乘精神を味はれたのも又所以ありではあるまいか。親鸞は俗諦の行儀を太子に

學び、眞諦の信仰を法然にもとめて眞俗二諦の生活を一身に具現せられたのである。而も親鸞はその勢至讚に「大勢至菩薩、源空上人の本地なり」といひ、太子讚には「救世觀音大菩薩、聖德皇と示現す」といつてゐる。即ち親鸞の觀る所太子と法然とは觀勢二菩薩の化身であつて此の二菩薩の引導に準じて眞俗二諦の生活を踏まれたものと斷すべきである。

肉食妻帯の親鸞宗を以て世俗迎

合の情落宗教といふのは冒斷の極である。佛教を民衆化して人と社會との改造完成に資し大乘精神の顯現に努めたのは親鸞である。不斷煩惱は吾人の世界であつてその中にゐながら涅槃を得せしめたいのが親鸞の行である。

〔五二〕

## 都鳥

鳥 割 水  
烹 焚

旭町二丁目  
電本三三六六

## 近詠三首

關本幸太郎

(京城中學校)

京中の學風を思ひて  
打ち見れば慶熙が岡に日の照りて  
緑いや濃く松に力あり  
教へ子大槻正俊の死を悼む  
時に降雪紛々たり  
ながらへば正しく高く育つなる  
若木はあはれ雪に折れけり  
新春我願  
雄々しくも高くも育て緑濃き  
慶熙が岡の若松の末

こもり居のわが窓ちかく親しげに  
鶴來なく夕まくれかな  
○ 中島貞信



を營みつゝ佛道三昧大乘精神を味  
はれたのも又所以でありではあるま  
いか。親鸞は俗諦の行儀を太子に

慶熙が岡の若松の末

# やまと歌

## 國風會京城支部

### 早梅

○ 工藤 武城  
かをらずは雪かとはかりみまかへ  
むはや咲きいでし庭の梅か枝

○ 松 田 甲  
草は未だ萌えぬ垣根に春またでか  
をるもうれし梅の初花

○ 安東貞一郎  
雪とのみおもひし枝に香をたて、  
早や咲きそむる梅の花かな

○ 浅井佐一郎  
鶯も來鳴かぬ梅の梢にはけるまぢ  
顔に花さきにけり

○ 松寺 竹雄  
雪霜をおそれず春にさきだちては  
や咲く梅のみさを尊し

○ 安東都天子  
珍しく咲きそめにけり梅の花また  
春ならで雪のふる枝に

○ 中島 貞信  
うつみ火はさながら春をもよほし  
て鉢の梅が枝はや咲きにけり

○ 同人  
日に向ふ軒はの梅は鶯の來鳴くを  
待たではや咲きにけり

○ 田中秀一郎  
冬こもる人の心をなくさめてはる  
よりはやく梅のさくらむ

○ 佐々木杏造  
鶯はまた谷の戸を出てぬまにはや

### 咲きそむる庭の梅が枝

○ 今村 雲嶺  
ふりつゝもる雪をしのぎて雄々しく  
もはや咲きそめし庭の梅が枝

○ 西田 明松  
白雪のふりつゝ中に庭の梅ほころ  
びそめて花の香ぞする

○ 濱野 鍾太郎  
庭の面に雪はつもとれど梅の花はる  
待ちあへず咲きそめにけり

○ 足立丈次郎  
うぐひすの聲をもまたで春まだき  
匂ひ出てたる庭の梅かな

### 鶯

○ 足立丈次郎  
夕まくれ庭樹に巢くふ鶯のこゑか  
しましゝなになさわくらん

○ 濱野 鍾太郎  
風寒み庭の銀杏は落葉してたゝ鶯  
の巢のみ残れる

○ 西田 明松  
村端の立木の上に鶯の巢のみ残り  
てさむぎ風ふく

○ 今村 雲嶺  
訪ふ人もなきかくれ處の庭松につ  
かひ睡みて巢くふ鶯

○ 佐々木杏造  
歸り來ぬ子やたすぬらん夕まくれ  
もりの梢にかさゝぎのなく

○ 田中秀一郎

こもり居のわが窓ちかく親しけに  
鶯來なく夕まくれかな

○ 中島 貞信  
わが朝いゆるさしとてや庭に來て  
聲かしましく鶯のなく

○ 安東都天子  
鶯の聲ほがらかに鳴きにけり何か  
うれしきことのあるらん

○ 松寺 竹雄  
朝日さす松の木の間をゆきかへり  
こえたからかに鶯のなく

○ 浅井佐一郎  
霜白くおける古木にかさゝきの友  
よぶ聲の今朝もきこゆる

○ 野田 新晋  
逝ける友を送りし野邊の歸路に夕  
ひかたふき鶯のなく

○ 安東貞一郎  
よきことの有りつつぐるか軒ちか  
く聲ほがらかに鶯の啼く

○ 松 田 甲  
よきことのあれば鳴き來と高麗人  
は朝なくくに鶯をまつ

○ 工藤 武城  
なにことかわれにつぐへきさまを  
して軒はにちかく來鳴く鶯

### 旅中霰

○ 浅井佐一郎  
草枕旅塵の宿の軒はうつあられの  
音に夢もむすばす

○ 松寺 竹雄  
ともしなき旅のやどりの夢さまし  
軒端たゞきて霰ふるなり

○ 安東都天子  
はら／＼と風にみだれてふる霰旅  
塵の夢をさましけるかな

○ 中島 貞信  
さなきだにいねかてなるを旅館板  
のひさしに霰たはしる

○ 田中秀一郎  
いそぎ行く旅の小笠に管たてゝあ  
わた／＼しくもふる霰かな

○ 佐々木杏造

ゆきくれて今宵の宿はほと遠し道  
急げとや霞たけしる

○ 今村雲嶺

たび衣夢をうつゝにかへすまで寒  
さ身にしむ小夜霞かな

○ 企 人

旅まくらまたるゝ鐘の聲はせで軒  
はをたゝく玉霞かな

○ 濱野鍾太郎

寒き夜を旅につかれて寝しかどあ  
られの音に夢さめにけり

○ 足立丈次郎

来る駒の鈴の音たかく夕ぐれをい  
そく旅路に霞たげしる

○ 清水正徳

風さむく霞ふりきぬ旅衣日も夕  
れの山中にして

○ 工藤武城

ふるさとの夢もやふれぬ旅やどの  
板戸をたゝくあらはれけし

○ 松 田 甲

ひとり寝の枕さびしき旅やかた夢  
驚かし霞ふるなり

○ 安東貞一郎

古里の冬もさむくやなりぬらんた  
びの衣に霞ふるなり

○ 野田新吾

もののふの屍さらし跡訪へは矢  
玉のごとく霞ふり来る

庭 雪

○ 雲 嶺

わかめつる庭の松が枝たわめども  
はらひもあへぬけさの白雪

○ 武 城

けふはかり門をとさしてこもりな  
むふまゝおしき庭の白雪

○ 竹 雄

けさはかり塵も芥もかけきえて清  
くもつる庭のしら雪

○ 甲

しぼらくは箒手にしてながめけり

◆酒のはなし

三木一彦

○ 京城で、『菊正宗』をおろし  
てゐる店は、本町の前田商店であ  
る。

○ 『櫻正宗』は、山邑の京城支  
店が、堂々と明治町でやつてるこ  
と、皆サン御承知の通り。

○ それに、明治屋で『月桂冠』  
を賣つてゐる。

○ いくら朝鮮の酒が盛んになつ  
ても、この三ッはそれ／＼の分野  
それ／＼のお得意先があつて、ビ  
クともしないのは、矢張りエライ  
ものだ。

○ 朝鮮では、論山で出来る『朝  
の花』といふのが、博覽會などで  
好評を博してゐるが、概していふ  
と、酒は、馬山がいゝといはれて  
ゐる。原料米と、水との關係であ  
らう。『寒牡丹』、『平井正宗』  
など、ワザ／＼馬山に注文してゐ  
る人もある。

○ が、近年グツとよくなつたの  
は、仁川の酒だ。朝日醸造の『金  
剛鶴』、深見さんの『誠鶴』など  
年一年うま味を見せてゐる。

○ 酒は、遠方から持つて来ると  
どうしても味が落ちる。馬山など  
は、さうした損がある。で、だん  
／＼仁川に釀食される傾向がある

○ 京城の地酒では、難波の『福  
迎』、『リットル』三巴酒造の『三  
巴目慢』、大島氏の『常の壽』等  
々、第一流のものであるが、それ  
らの酒造家は、いづれも全力的に  
改良に志し、出費と努力を惜まず  
それこそ獅子奮迅の勉強振である  
ために年々見違へるほど、實質を  
よくしてゐる。

○ 難波の『リットル』(新釀)  
などは現に『これが朝鮮の酒か。』  
ホントの話か』と、感嘆され位、  
なか／＼上等ださうな。

○ コンナ風で、酒の世界位、競  
争の激しく、醸造の苦心されるも  
のはなく、またそれだけ、グイ  
／＼販路の擴がつて行くものもない  
さうな。

窓の戸をあくれば朝日かゝやきて  
みるもまはゆき庭の白雪

○ 新 吾

朝またきたちいて見れば庭松はあ  
さ日にはえて雪おもけなり

○ 秀 一 郎

珍らしくながめられけり目馴れた  
るわが庭ながら雪のつもれる

○ 杏 造

玉たれのおすをかゝけてめてにけ  
り庭白妙につもる深雪を

○ 都 天 子

おやみなく降りつむ雪に我庭の木  
々の梢け花と見えけり

○ 丈 次 郎

睫が屋のあれにし庭も今日は又雪  
のつもりてめずらしきかな

○ 鐘 太 郎

たゞひとりみらくはおしきわが宿  
の庭めつらしくつもる白雪

○ 眞 信

如何ばかり降りくる雪か絶え間な  
くはらへと庭に山とつもれる

○ 佐 一 郎

尋ねくる人もあらねばけふよりは  
いく重もつもれ庭の白雪

○ 眞 一 郎

今朝ふりつみし庭の白雪

トルストイ原著

と、それは一人の驍騎人が馬に乗  
つて牝牛を追つて行くのであつた  
驍騎人は其の驍勇り過ぎてしまつ

くもつる庭のしら雪  
○ 甲  
しぼらくは勝手にしてながめけり

■ 國が屋のあれにし庭も今日は又雪  
のつもりてめずらしきかな  
○ 丈 次 郎

おやみなく降りつお雪に我庭の木  
々の梢け花と見えけり

# トルストイ原著 高架索の囚人

(その一節)

瀨野馬熊譯

(朝鮮史編修會)

## 十二

終に逃亡者等は山の頂上に達した。そうしてユリアヌが豫期した通り森の邊に來た。彼等は數多の厚い藪の中を突き進んだ。それが爲に彼等の衣裳は切れ々々になつたが終に道を發見する事が出來たと、不意に彼等は何かカラ／＼と鳴る音を聞いた。そこで彼等は立停つて耳を傾けたが其の音響はどうやら馬の蹄によつて爲さるるものゝ様で不思議にも逃亡者等が停まれば音もやみ、彼等が歩き始めれば其の音が又聞える。それで彼等は立ちとまつた。と其の音もやんだ。

ユリアヌは靜かに這つて道の方に進んで行つた。と其處に彼は馬の様な恰好をした暗黒い物を見つけた。ユリアヌは「何んだらう」と獨言つてひくい口笛を吹いて見た。と影の様な動物は俄にかけ出してザワ／＼鳴る木の枝の中に恰も疾風の如くに駆け込んだ。ユヌチルヌは驚いて其處にへたばり込んでしまつた。ユリアヌは笑つて叫んだ。「鹿だよ／＼、おまへはあの角で草や木の枝をかき拂つて行く音を聞かないか、きやつが俺達を驚かせた様にきやつも又俺達

の爲に驚かされたのであらう」、彼等は再び道を進んだ。

其の内にだん／＼東の空が白らんで來た。併し此の二人の逃亡者は果してロシヤの陣營の方に進んで居るかどうかと云ふ事は甚だ不確實であつた。終に彼等は平地に出たが、ユヌチルヌは其處に座つてしまつて、「俺はもう一步も歩るけぬ。足を互ひちがひに出す事さへ困難だ」と云つた。ユリアヌは彼を勵げましたが、ユヌチルヌが答へて云ふには、「イヤ俺はもう全く力が盡きてしまつた。この上はもう動けない」、ユリアヌは氣がいら／＼して彼の仲間を叱りつけた後に「よしそれなら俺は一人で行くばかりだ。左様なら」と言つて言葉を切つた。とユヌチルヌは俄に飛起きて又歩き出した

彼等はこういふ工合で、五六里の道を進んだ。霧はだん／＼深くなり、見得るものは但だ大空に輝く星ばかりであつた。突然、彼等は後に馬の足音を聞いた。ユリアヌは地に横たわつて耳を傾むけた。そして獨言を言つた。「騎兵がやつて來たのではないか」、彼等は急に道から離れて樹木の蔭に隠れた。暫くたつてユリアヌは道の方に這ひ寄り、そつと向ふを見る

と、それは一人の驢鞍人が馬に乗つて牝牛を追つて行くのであつた。驢鞍人は其の儘通り過ぎてしまつた。ユリアヌは再び彼の仲間の所に歸つて來た。彼は言つた。「神様が我々を助けて下さつたのだ。さあ立上つて出掛けよう」、ユヌチルヌも立上らうとしたが忽ち其處にへたばつてしまつた。「俺はもう一ヤードも歩けぬ、俺はもう一步も進めないと云ふ事をお前に斷言する。俺には力と云ふものが全く無くなつて仕舞つたのだ」、ユリアヌは荒々しく彼を引き起したが彼は苦しいと言つて大きな聲を擧げて泣き出した。ユリアヌは彼を抑へて、「そんな大きな聲をするな、あの驢鞍人がまだ近所に居るぞ。立上れ、もし歩けないなら俺の肩に細れ、お前を背負つて行つてやらう」、遂に背中にユヌチルヌを負つた。「俺の肩をしつかり掴まへてゐろ、併しそんなに俺の喉を締めてはゐるけぬ」

### ◆寺尾氏病逝

三木一彦

○公天寺尾猛三郎氏の病歿は、實に惜しいことであつた。  
○書畫の方面では、氏を寺尾學館主人と諱名したやうに、學問識見、得易からざる人物であつた。  
○本誌の如きは、創刊以來、陰に陽に、氏の鞭撻、推挽を受けたものである。  
○岡山市小橋町の産、明治十八年明治大學を出つ。爾來引續いて請負業を以て、終始した。享年六十歳、謹んで哀悼の意を表す。



# 馬の智慧

吉田雄次郎

(總督府農務課)

東京は九段の坂下に燒賣店があつた。私の家内の母が或寒空の日暮れ頃通り合はした所が、空車を挽いた馬が寝て居つてどうしても起きも動きもせぬ。馬子け恰も人にもを言ふ如く、『オイ起きて呉れ歸りが遅くなつて困る、今日は都合が悪いから勘辨して呉れ、オイ頼むから起きて呉れ』と頭を撫でたり體をさすつたりして頼りに頼むけれど、馬は馬耳寒風と聞き流しどうしても起きぬ。母は病氣でもあるのか可憐そうにと思ひ、馬子に譯を聞けば、『實は私が毎日の馬を曳いて此道を通つて歸るのですが、あの燒賣屋ではいつも燒賣を少々づゝ喰付すのを癖にしてやらないとどうして歩かないので困るんです。今日はお恥かしい次第ですが懐具合わるいので馬に頼んで居るんですが、とうとう寢轉びやがつて仕末に應ひのです』、母も可憐想にと思ひ五錢の燒賣を買つて與へた所、咬みつきが早いかガダン／＼と飛び起き、馬子のお禮も馬耳東風と聞き流し、平氣な顔付してカラン、カランと空馬車を挽いて獨りで歩いて行つた。此の光景を見て居つた流石の江戸子連も馬の聰明な智慧には皆感心して居つたとの母の話である。

私が京城黄金町の乗馬俱樂部から馬で本町二丁目まで來ると必ず村木時計店の横へ左曲し、松園の前で右曲する、而して南山町新田氏の前で右の道に這入る。又喜樂館前から來る時は片山醫院の前で天真樓の方へ行くかと試して居ると必ず右曲する、而して自宅の門前で止つて私が家に這入ると必ず隣の錦水の石壁から首を伸ばして待つて居る。之は家内が來る毎に入參を與へるから、之をよく覚えて居るのである。誠に覺えのないもので可憐がらずには居れない

義兄が清州に居つた頃、同郡加徳面の某氏から可愛い仔馬を手に入れ名前も産地の名を取つて加徳號と付けて可愛がられて居つた。春は花爛漫の頃はひ一家揃ふて郊外にお花見を備すべく、赤毛布、重箱、瓢などを加徳號に背負はしてやつとさる地點に到着したので一同は今を盛りと咲いた櫻が下に位置を占めて毛布を敷き、加徳號をば稍遠く離れた重咲き散る松が根に繋ぎ止め、花の下駒をながめて宴は開かれた。稍久しくして駒はヒンヒン、ヒンヒンと叫びながら狂ひ廻るので何事ならんと驅け着けると、こはそも如何に穴蜂の巢を掘り起したので總攻撃に逢ひ顔も脊中もお髯もところかまわず刺されて、隣れや加徳號はお化けの様に腫れ上がったが、彼の柔順は先天的で歸りには再び毛布や重箱、瓢、櫻花、連翹の花革の束まで背負ひ、愛する者の命令には痛さを忍び、喜び勇んで家

【五六】

路についた。然し彼は悪戯盛りの子供であるから家に居るときは随分悪戯もした。ある日彼れを暫らく留守にし、皆が外出先から歸つて見ると、驚くなかれ坐敷の青畳を掻き破つて其の穴に放尿し、客用の坐布團の上に疊の糞を糞に咬へ集めて、寢轉んで居る。子供(初葉)が使に出掛けると跡から追隨けて清州の町中を犬の様に付纏ひ。八百屋の店頭で入參を一寸失敬するなど其の行爲は如何にも無邪氣で罪がない。

## うき草物語

漢江漁郎

○土師商工課長は、二三年前までは、馬の上の存在で、サーベルをピカ／＼させたものである。

○ところが、突然海軍課といふところに、早變りし、磯臭いことばかり研究し出した。

○當時人あり、早變りの御感懐は?と叩くと、フン……とあつて左の俗語。

浮草や昨日は東今日は西、春の假寐の夢を載せ、風のまに／＼移りゆく、人生吏と爲る亦風流  
○ところが、今度はまた、商工課長……といふ前垂懸け。「なか／＼テンポが早うござりますナ」といふと、早速鉛筆とり上げて

左様!、目下の業け前垂がけ、永當／＼の御ヒイキ偏に願ひ上げ奉る。さてこの次は、土木か山林か、斯くて官界一週。いゝ加減な頃ほひ、『後進のため』とあつて腹でも切れば、先つ世話はなしと存し奉り候。

# 歐米を旅して

分る筈だつたのをツイ面倒がつた譯けです。而し今度××さんに會へば種々と面白い話するには會



私が京城黄金町の乗馬俱樂部から馬で本町二丁目まで来ると必ず村木時計店の横へ左曲し、松園の

とあつて腹でも切れば、先づ世話はなしと存じ奉り候。

# 歐米を旅して

木塚 常三

(竹 添 町)

松本詞兄大人、本月十四日夜小生は貴青年記者君との約束を守らんとて或蛇の話を書き居たが馬の新年に蛇の話は縁起でもないといふ傍人から苦情を持たれ小生としては遺憾ながら止め申候幸にして今夜在歐米十年の愚弟から思掛なくも面白いと思はるゝ書面荆妻宛に参り候。私事に亘る所丈切を切抜き覽覽に供し申候。御取捨被下度候

(四、十二、十八日夜)

## 外國人の感なし

長い間御無沙汰して仕舞ひました。

アメリカとか歐洲とか云へば一寸外國じみてさてさて面白い事もあるだろうと思つた時代は何時の間にか過ぎ去つて最早や十年間も歐米の方に居て仕舞つた私には歐米人が外國人といふ感じが全くなくなつて仕舞つて一寸會つて話したり挨拶する時などは反つて日本人に會つた時、氣分に何か不安見た様な感じがする様になつて居ます、と云つたとて私の英語の會話がそんなに自由になつたと云ふ譯けではありません。たゞ顔を見馴れた心の感じ方が氣安くなつた様です。

姉上様よりの御便りは四月頃の五月頃伊太利のゼノア港に居た時拜見したのが最後であつたやうです。その後私の方では無事な航

海と先きに申上げた様にこちらの港からあちらの港と渡り歩いた丈けで別に面白い事を御知らせする材料もなかつたから失禮して仕舞いました。その時の御便りでは辻サンが六ヶ月間歐米見學に歩かれの事を書いてありましたが私が住所不定の生活でしたから御目に掛かる機會がなかつた譯けです。

## 會はぬが優し

住所不定としても若しも私の方面の職業の人なればすぐ分りますが一才他の方面の人には氣付かないのも無理ありません、と云ふのは歐米では海運に關する雜誌か新聞を見れば何月何日にどの港を出てどんな港に何日頃着くと云ふ風に船の名前がちやんと出て居ます、のみならずロンドンとニューヨークには國際汽船の出張所が何れも目抜きの一に一番に分かる様なロンドンではリーズンホールスツリートのバルチックハウスにあり、ニューヨークでは世界に有名なブロードウェイ一番地ですから、ロンドン、ニューヨークではそこに行けば何月何日何時にどこを出帆して何月何日頃どこ着とすぐ分りますけれども。

いや私の方から云つても夫れはズボラした譯です、と云ふのは今は既に堂々たる陸軍大佐の××さんですから行く先の日本の大使館公使館領事館に行つて聞けばスグ

分る筈だつたのをツイ面倒がつた譯けです。而し今度××さんに會へば種々と面白い話するには會はずに居つた方が反つて種が多くてよいかも知れません。

## ラテン系のダンス

私はどうもダンスをやらずには居られない位にそれが好きで仕方ありません、妙に好きになつたものだと思ふ事もありますが生れつきそんな事が好きだつたでせう。東京でも近頃は太分盛んな様ですが此度歸つたら少し踊りにも出懸けたいと思つて居ますがどうせまだ幼穉なものだろうと思ひます或は日本人は藝術の方面では世界で一番その趣味が一般的に發達して居るから歐米よりも將來は立派な踊り手も出来るし、オーケストラも良くなると思ひます。

歐洲即ち白人種でも南方ラテン系のものでどうしてもダンス丈けは上手です。現代ではラテン系がチユートン系に壓倒されて居ますがダンスが上手だから謂はゞ藝術的だから獨敗的だといふ理由にはなりません。日本では一國の興亡を目前の状態を見てもどうの斯うのと云ふ様な、輕率な斷定をする様ですからダンシングホールの方は大阪でも東京でも問題になるかと思ひます。

## 幸福といふ事

皆さんどうぞ御達者で幸福に御暮し下さい、要するに人生は幸福を感じ得る者が幸福だと思ひます。女としてはどんな風でその幸福が感じ得られるかは無論その人、その人に依りますが男としてはどの方面の者でも誠意を持つて働く事にあります。人々は心に幸福を

感じ愉快だから歌いもするし踊り

もするし飲みもするし音楽も聞く  
事もあり種々と楽しみ得る譯けで

す。花を愛し月を賞すなど云ふ昔  
の人達の言葉も自分の心持ちが幸

福だからの事せう。今の人類愛  
など云はるゝ事も第一自分の愛

し得る丈けの幸福を感じ得る人で  
なければ出来ない事せう。人に

善を愛を盡くして行くことによつ  
て自分の心の幸福を感じると云ふ

様な事では本統でないかも知れま  
せん。而し修身、道徳を教へる本

などにはよくそんな風な教へ方が  
ありますがそれよりも眞の哲人な

るにけ自分自身が幸福でありその  
心の動きは愛であり善であるから

その行ひが自然に實現する人が眞  
の幸福者だと思ひます。

### 本統の愉快

私の小さな一個人の卑近の例を  
擧ぐれば酒を飲むことによつて愉  
快を得るでなくて愉快だから酒も  
飲む歌いもすることになる方がそ  
の人の本統の愉快でないかと思ひ  
ます。

親と子、夫と妻などの關係も御  
互に愛せらるゝ事が幸福であるけ  
れども、親と子、夫と妻などの幸

福が他の世の中のこと、絶對的の  
幸福感到於て隔りがある様に、大  
きな幸福はその間には一番所謂純

な自然に湧く愛情が先づ各の自體  
から發動して行くからであると思  
ひますが、日本の女的美徳も昔は

その強い力ある愛情を持つて居た  
事にあつたので、夫に盲従する従  
順さとも違い、今の女の或るもの  
が誤解して居る様に、たゞ男女を  
同權と見ての徒らな外見的の平等  
でもないと思ひます。即ち強い力  
を持つた愛情の夫婦の間の平和と

幸福であつたと思ひます。

### 愛し得る力と愛

現代では男でさへも女に愛せら  
るゝ事が只一つの幸福かの様に思  
ふ弱い人間が多くなつたと思ひれ  
ます。

愛せらるる事も幸福には違いな  
いけれども、愛し得る大きな力と  
愛を持つことが第一の幸福たる  
要件せう。

取りとめもなく種々な事を書い  
て仕舞いました、私のこんな考へ  
方をするのも、つまりは世界中、  
旅から旅に渡つて行く内に自然に

習慣付けられた感情かも知れませ  
ん。要するに人に親むことは誰れ  
も悪い感じはしません。然るに各  
國民を平等に見る一視同仁に感ず

る丈けの大きな和らいだる感情を  
自ら持つ事であります。左すれ  
ば求めずして人々は互に相親んで  
行けると思ひます。日本人はあま

り差別感念が強い様です。例へば  
現代に世界に巾をきかして居る英  
米人向け一種の敬意のみを有して  
親愛の感じを持ち得ない。もつと

退嬰的になれば薩で憤慨したりす  
るし、南歐人、伊太利、西班牙あ  
たりの人だと頭から横柄な態度に

出るし、もつと東洋に來て印度人  
や支那人だと人間外の様に見える風  
がある。日本の朝鮮統治もイトラ

要路の人や國家の將來を考ふる人  
達が内鮮合體を考へても一般内地  
人が朝鮮人に對し心からなる親愛

を感じ得ないならば無理な事だと  
思ふ。そしてこんな小さな心しか  
持ち得ない多くの日本人は將來の  
日本人、朝鮮人の子孫に不幸のみ  
を遺す人ではないかと思ふ。要す  
るに大國民たるの資格は大國民た  
るの態度と云ふ様なシカツメラし

い言葉で表はさなくとも御互が温  
かい和らいだる大きな心を持つて  
總てのものを愛し得る事ではない  
かと思ひます。今の私には何んに  
も考へる餘裕がなくなつて唯だ十  
年振り靜かに親子四人が暫らく暮  
らす事や自分達を生い育てた故山  
の懐に母上のそばで暮らせる事を  
のみ心から思慕してゐます。

### ◆將棋風聞記

漢江 瀧郎

○大學病院の篠崎博士が、黒の  
大一番の折拠に、將棋の盤と駒と  
をおさめ、『さテ勝負く』と怒  
鳴りながら、杉原博士邸へ、ムン  
ツと坐り込んだことは、前號御案  
内の通り……。

○寝ごみを襲はれた杉原博士、  
流石にヒヤツとした。だが、腕に  
覺えの剛の者、決して悲鳴はあげ  
ぬ。『ム、よからう、大に雌雄を  
決しやう……』、双方頭のテツ邊  
から、火柱を立て、大決戦をや  
つたのでした。

○だが、力戰となると、杉原博  
士は強い。ヤ、もすると、篠崎博  
士を死地に陥れて、ギュー／＼い  
はせる。そのたびに、篠崎博士『  
残念／＼、師匠に合せる顔がない  
ウーン』、それを聞くと、杉原夫  
人お氣の毒でならぬ。で、いゝ氣  
色になつてゐる郎君の袖を、チヨ  
イ／＼引く。引かれると、精神統  
一が亂れる。アレヨ／＼といふ中  
アベコベにこつちがやられる。

○このデンで、杉原博士二度負  
けた。篠崎先生、喜悅極點に達し  
おほへずスベラした告白。『君、  
うちの家内が、ウフツ……喜ぶぢ  
やらうのう』

うまくなつたんだね』、そして私  
の賞めるのを待つやうな態度だ。

が誤解して居る様に、たゞ男女が同權と見ての徒らな外見的の平等でもないと思ひます。即ち強い力を持つた愛情の夫婦の間の平和と

日本人、朝鮮人の子孫に不幸のみを遺す人ではないかと思ふ。要するに大國民たるの資格は大國民たるの襟度と云ふ様なシカツメラし

けた。篠崎先生、喜悅極點に達しおほへずスベラした告白。「君、うちの家内が、ウフツ……喜ぶちやらうのう」

# 父と子

奥 永政輝

(鈴木運送店)

久じぶりに郷里からの電信を、懐かしく見入つてみると、『壽さんから電話です』と告げられてかゝる。

『お父さんですか』、いかにも元氣相な我子壽の聲。

『お父さんは近頃ちつとも僕のところに來ないね？、お父さんそんなに忙がしいの、僕ねこの次の日曜日にお父さんの家に行くからわ』

『日曜は×日だね、エート丁度よいから、いらつしやい。父さん待つて居るからね』、私は母のないう幼き我子の爲めに出来るだけ心優しく云つた。

『お父さん忙がしかつたら、僕行くのを止めやうか。行つても良いの』と、逝つた母親をつくりの落付いた言葉使ひの反問である。私はこの子が可愛くてならない。又こんなに幼ない時に母親を失つた子供の心境を考へると、可憐で今迄より以上の可愛さを感じるのである。

春、春、總てを暖かく抱擁し、そして何物をも愛撫するやうな春この春に背いて、×月×日人生の半なるに、而かも、病床に就いて僅か七日にして、此世を去つて、永遠に不歸の旅路についた妻、その妻に生寫しの顔立ちだが、電話の話し方までが亡き妻をつくりだ私は思はず眼を濕はした。妻在りせば、と心で繰返したのであつ

た。

私は妻亡きあと、この子供の將來、否、當座の教育方針、その他を考へた、悩んだ。そして苦しんだ。結局、厄介とは思つたけど、×町に居る叔父の家に行くことにした。叔父の家は、女學校に通つてゐる娘の子だけであり、又叔父達は、以前からよく壽を可愛がつて呉れてゐた。

私は多忙であり到底子供の教育殊に家庭教育は困難だと思ひ、一面に於ては、幼なき我子に一刻でも、人生の悲哀を感じさせまいと思つたからである。

今では暖かい心の持主であるこの叔父達夫婦の懷ろに抱かれて、日毎に成長してゐる。

私は日曜毎に彼を訪づれるのを忘れなかつた。又彼も私の訪づれるのを、何よりも歡び迎へるのであつた。博覽會の爲め、事務が多忙であつたので、二回日曜日に訪づれなかつた。

『お父さん』と元氣よく、我家を訪づれて來た。私は彼の顔を視ると、嬉しさと悲しさと、交々胸に迫り、暫時聲が出なかつた。彼は、得意然として、私の横の椅子に凭り語りだした。

『お父さん僕ね、今日學校の先生から、算術と書方の表を買つたよ、そしたらね算術は百點だつたけど書方は甲下だつたよ。この前のは乙だつたから、僕書方は

うまくなつたんだね』、そして私の賞めるのを待つやうな態度だ。『ではね、今晚お父さんが褒美に天勝に連れて行つてあげやうわ』と云ふと、彼は雀躍して喜んだ。まだ大分時間があるのに、早く／＼とせき立てる。

天勝を見に行つて、空中冒險までは眼があいてゐたが五節舞の舞臺の頃から眠つて仕舞つた。

はねたから、ゆすぶるおこすけどうしてもおきない。しばらくして、やうやく眼を覺ました。それからしばらくして態々立上つたところ急に泣き出した。

私は急に可愛相になつたので、背を向けて負んぶした。壽はすやすやと眠つた様子、電車通まで來たがこんな時に眠つて電車が遅いやうな氣持がする。そこに都合よく圓タクが停つたので救はれた氣持で、車中の人となる。車は夜の京城を與へられたスピードで疾走し出した。

車が太平通りにさし懸つた時、彼はひよつこり起きて、にっこり笑つた。

『自動車に乗つてゐるの！』、いかにもうれしやうな容子であつた。

二人は歸つてから二階の床の間の横の佛壇に禮拜しやうとして蹲いた。

『お父さん、どうして、佛様のお花こんなにしなびてゐるの！』いかにも私を譴責するやうな態度『本町には朝から、晩まできれいなお花を澤山賣つて居るよ、それを買つていらつしやい』

私はそのお花の事まで氣をつけられると、矢張りこの子供は亡き母の事を思つてゐるのかと思ふと一種の悲哀を覺へた。お母さん、



お母さんと、あまゝる盛りのこの子供の年配で、佛様のお花の世話をする事を考へると、私の眼から熱い熱い涙が止めどもなく出る。「父うさんはね、今日新しいお花を供へるのを忙がしくて忘れただからね、では明日早くお供へしよらね」

私は心の中で両手をついて詫言る気分です。佛様の前に、小さな手を合せて、幾度も禮拜をする我子の姿を見るに忍びなかつた。郷里から手紙の来る度に、屹度壽を大切に、して呉れと書いた事を思ひ出し、この子を完全に教育し亡き母の愛

と自分の愛とを、極力この子に注がねばならぬと今更らのやう感じるのであつた。その夜私達は種々の物語りをし悲しき中にも、圓らかな夢路にいついた。

### 將 棋 血 戰 錄

— 木村八段對金子七段 —

石 山 賢 吉

本文は讀賣新聞に書いた觀戰記を轉載したものである。

(I)

今回金子七段が八段三人まで負かした。然も其負かし振が頗る美事であつた。木見君も、大崎君も花田君も、悉く中押模樣でまかした。元來、金子君の棋風は派手で鮮かに勝つか、脆く負けるかであるが、名に負ふ蒙の者に向ふに廻して、三人まで薙ぎ倒したのだから、我々見物は痛快で堪らない。是で先づ金子君の人氣が湧いた。其處へ持つて来て、次ぎに出たのが、當代棋界の人氣を一人で背負つて居る木村八段である。そこで此對局が頗る見ものとなつた。但し、過去の成績からすれば、金子君は木村君の敵ではない。四段時代に國民新聞の優勝争ひで負けたのがケチの付き始まり、それから今日迄八年間殆ど負け通してある。然し、金子君は木村君に負けたほど弱い棋士ではない、弱い處か、垢抜けのした天才肌の棋風は、頗る前途を囑望され、彼も亦

(II)

將來の名人と見られて居る一人である。唯木村君にだけ悪い。他の棋士に對しては立派な成績を示して居る。是れは勿論心理作用が加はつて居るからだ。金子君が神經を柔かくし、實力一ぱいに指せば木村君に勝てぬ限りはない。今回は金子君が八段三人に連勝し、氣をよくして居る折柄だから、此對局が頗る面白くなつたのである。

今回の七八段戰が決定するや、七段棋士は非常に緊張した。八段と云ひ、七段と云ふも、其實力は紙一枚の差である處から、此機會に、八段をまかして氣を吐いてやらうと、戰鬪意識を燃や立たせたのである。就中、金子君は人一倍緊張した。金子君は今春七段に昇進する時、一部の棋士から時期尚早の非難を受けた。それが腹にこたへて居る。今回八段と戰つて脆くまかされるようでは、其非難が事實になる。金子君は、新七段の面目上、イヤでも應でも勝たねばならぬのであつた。

クジを引いて一番となり、木見八段と對局する事になるや、金子君は先づ以て四五日温泉へ行つて静養した。體の弱い金子君は大戦となれば、何を措いても體を鍛へる必要があるからだ。其効ひあつて、歸つて對局するや、美事に

木見君をまかした。左の角を右へ廻し、敵の王のコピンを狙つて攻め付け、木見君に何の業もさせずに捻ぢ倒したあたりは、如何にも金子君らしい美事な勝であつた。金子君は初段時代に木見君から飛車落を一番指して貰つた。此時は十七八歳の少年であつたが、土居君の内弟子だけあつて定跡は全部心得て居た。飛車落なんて負けるものかと、絶大の自信を以て對局して見ると、さうは行かない。木見君一流の力將棋に遭つて脆くまかされた。其時金子君は

「飛車落なんかで負けては、先生に對して申譯がない」と云つて、ワツと泣き出したと云ふ事が、今に棋士仲間の語り草になつて居る。其金子君が平手で木見君をまかしたのだから、昔を顧みて、感慨無量であつたであらう。續いて大崎君に勝ち、花田君に勝ち、さて四人目が苦手の木村君である。八段同志の對局でも續けて三人に勝つた云ふ事はないのだから、金子君は茲で早や既に勝利の記録を作つてゐる。四人目の木村君に負けた處で、何でもないので、これまで負續けて居るだけに、今回は是が非でも勝たねばならぬ。蓋し金子君は木村君との對局の日には齋戒沐浴して家をた出た事であらう(以下次號)



獨 語

永樂町人

癌

私の祖母は、胃癌で死んだが、父もまた、同じ病気で死んだ。癌種は、遺傳ではないといふが、私の感じをいふと、自分もどうやらこれでやられさうな気がする。印刷物に『癌』といふ題目を見つけると、如何にツマラヌ記事でも、一寸眼を通さねば、氣の濟まぬほど、信仰的になつてゐる。自分ながら、おかしな程である。

父は病中、少しも苦痛をいはなかつた。『苦しいでせう』と聞くとも、『ウム』と肯く位であつた。しかし生死の問題には、随分悩んだ。佛家にも来てもらひし、基督敎の人にも、自ら進んで、話をしてももらつた。その他親善な老友や親戚の科擧者やの説も聴き。凡そ讀みたいと思ふ書籍は、片ツ端から涉獵した。しかしどうも『安心』は得られないらしく、『人間はなかく死ねないネ』と、折々悲痛な顔をしてゐた。

死の境地に安住したのは、病後の僅か三週間位前であつた。非常に機嫌がよく、晴れ／＼として、『もう俺も大丈夫だ。見舞に來た人には、誰にでも會はうよ』といつた。元氣に話した。その安住のどんなものであるかは、今もつて私には判らぬ。

私は今、眼前に死が來ても、從容として、それに應接するといふ氣を持つてゐる。しかしホントウに死が來たら、いよくそれがノックして來たら、この假定的安住

は、一遍にフツ飛ばされ、も一度徹底的に惱まねばならぬのかも知れぬ——何、そんな事はない——と思つてはゐるものゝ、死はもつと／＼絶大な壓倒力であらう。

老人現象

豊臣秀吉の朝鮮征伐は、一ツの老人現象であらう。

人間衰老して、血管硬化症が、よく昂進すれば、或るものは、いよく萎縮し、或るものは、いよく誇大妄想的となる。

秀吉は、壯年不遇の地位に居り久しく粗食と、過度の勤務と、その神身を酷使したものである。彼に衰老期の、早く來るは、當然の事柄である。

九州討征より還りたる時、大阪城中の婦女子は、『あれ／＼上様のお年を召されたこと』、いたく驚倒したといふ。

この前後に行つた茶會でも、花見でも、築城でも、一ツとして必要以上に、大膽でないものはない。

史家は、彼の大陸征討が、何の目的か判らぬといふ。判らぬ筈である。これは、彼の老病に原因してゐる。

家康も、毛利元就も、彼よりもズツと良い體格を持つてゐた。それ故彼の年配になつても、少しも老人現象を見せなかつた。それと今一ツ、この兩人は、相當の教養があつた。周密な思考をした。ソユになると、秀吉はお里が出る。老人現象マル出しといふことにな

景 光

或る先輩が、私に脇差一口をくれた。『これは、もと某幕臣の所

の對局の日には齋戒沐浴して家をた出た事であらう(以下次號)

有であるが、自分が或る事件で盡力したため、謝禮の意で、七八年前贈られたものである。名刀か否か、自分には判らぬ。唯だあんたが、好きらしいから上げる』、私は、難有う／＼といつてもらつて來た。

備前物らしいと思つたが、シカとしたことは判らぬ。衣笠國手に見てもらふと、『備前景光だらう』とのことであつた。

景光を差料にする位なら、少くも何千石といふ階級の、上士だらうと想像される。

私に興味の最も深いのは、その鞘書きである。

參州以來傳家之刀

御祖父友成君大阪御陣御供之節御用其節之切込與申傳世々蒙君恩之厚茂右等之餘澤與難有奉存子孫此之御苦勞ヲ思ヒ元朝々拜ヲ成サバ平生御奉公之一助與弘化三年正月十三日白柄ニ致ッ家之寶劍ト成置者也  
二百年御年回ニ當リ  
當主 茂實 謹述

この數行の文句の中に、封建武士の信仰も、幕府の政治的仕組——社會的制度も、隱然として、觀取される。

我々は、世の變革に依つて、正宗、貞宗でも、將た一文字、粟田口……古來の重器を、自由に觀賞し得るが、幕政時代には、四五萬石の大神でも、新刀一二流のものを寶物扱にしたのである。

伊賀越の荒木が、來國後を水車の如く振り廻したといふが如きは講釋師一流の、出體目に過ぎない。それにしても、『當主茂實』とある舊持主の、姓字、家系、祖先戰功などを、詳かにする手ツルのない事は、如何にも残念である。

鮮内隨一の

# 生氣嶺石炭

發熱量高く、價格最廉

塊炭一屯 (市內持込) 十五圓八十錢

粒炭一屯 (市內持込) 八圓八十錢

小林商店石炭部

古市町驛貯炭場

電話本局四〇〇二番



京  
報  
日  
報

每  
日  
申  
報

三十年來  
おなじみの  
最上醬油

香味  
佳絶  
ホシ大ソース

お上品な  
料理に  
淡口醬油

永登浦  
大塚  
油醬最上

淡口醬油

内科  
婦人科

今本醫院

(京城旭町一丁目)  
院長 今本義胤

主筆 大浦貫道

月刊 心の友

京城南米倉町  
心の友發行所

高級化粧品

金ばこ

三越丁子屋など  
一流店舗にあり

昭和四年一月廿五日印刷  
昭和五年二月一日發行

本誌定價

一ヶ月(二部) 四十五錢  
半年分 二圓六十錢  
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇

發行兼編輯人 松本武正  
印刷人 石川利夫

印刷所 京城日報社  
京城府和泉町一七〇

發行所 京城雜筆社  
電話光化門三〇六番



# 看板裝飾專門

模  
ノ  
マ  
型  
パ  
ツ  
ト  
セ  
ツ  
塔  
宣  
傳  
塔  
ア  
ノ  
チ  
特  
設  
館

# 早川裝飾工事務所

早川天望

京城市府黃金遊園內

電話本局二四七六番

鎮南浦府三和町

朝鮮商工株式會社

社長 川添種一郎

鎮南浦府龍井町

西崎鑛業事務所

西崎鶴太郎